



\*0017284000\*

0017284-000

AZ-785-185

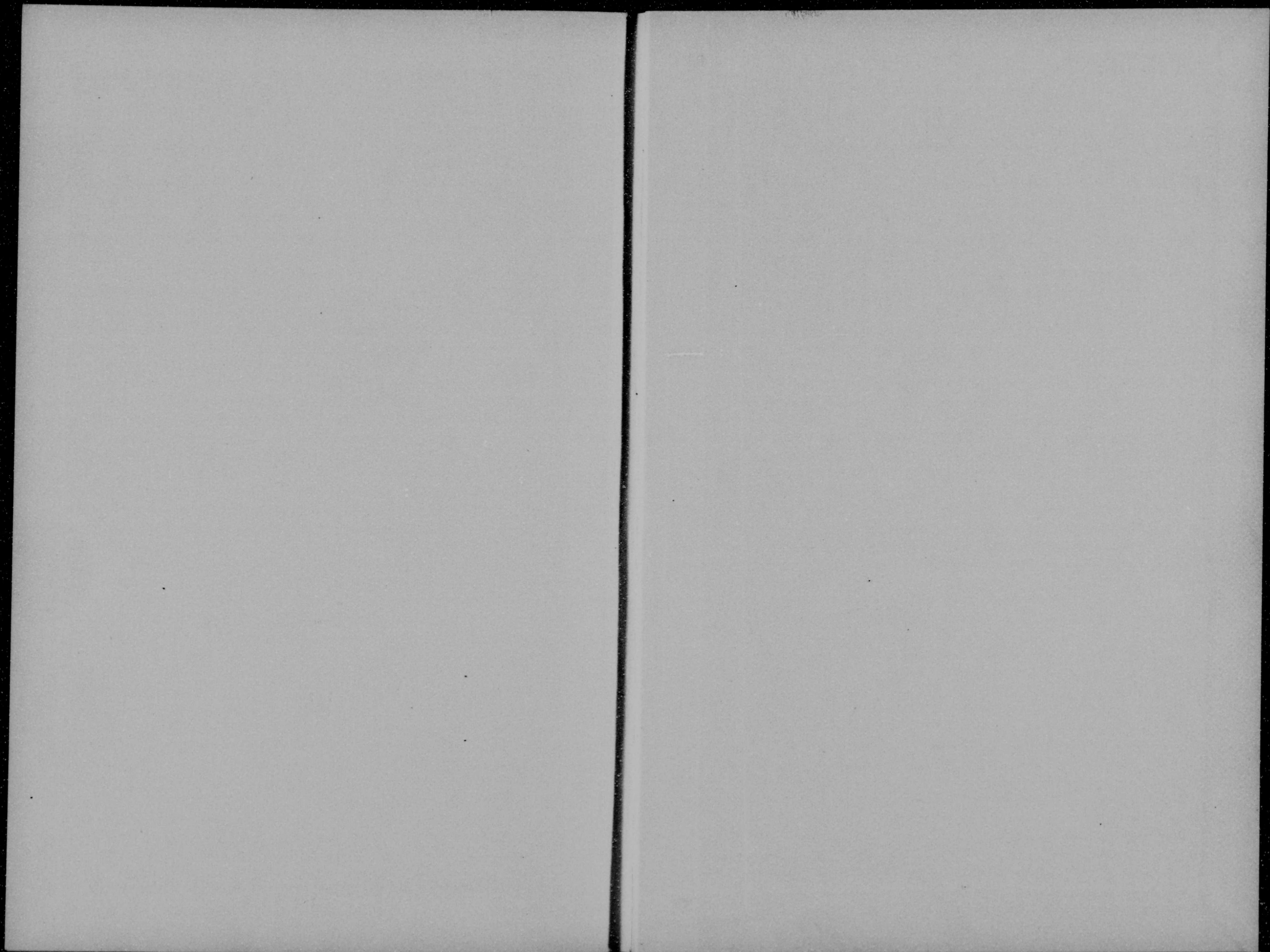
民事訴訟法改正法律案委員会速  
記録(抄)

司法省

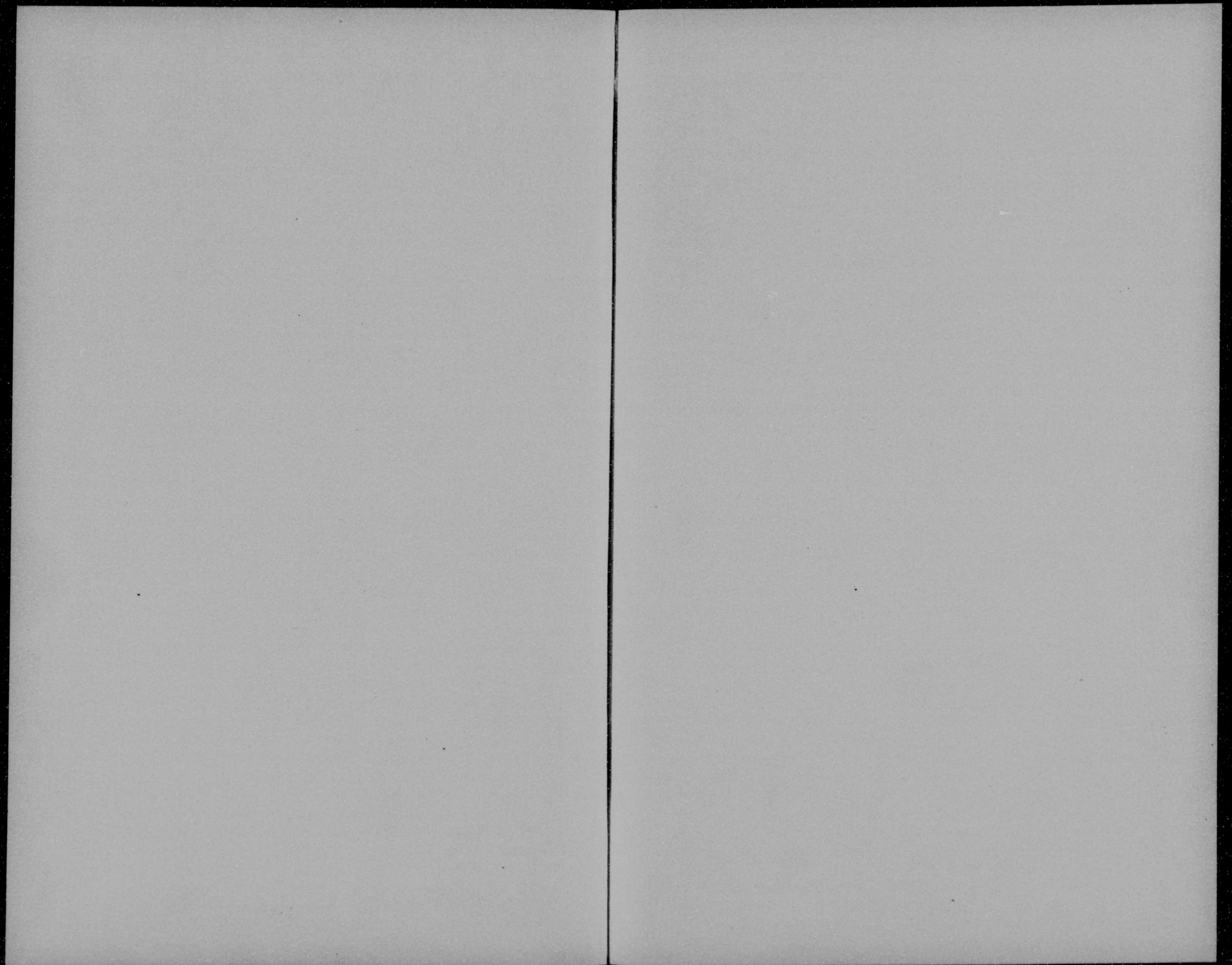
1929. 3

ACH











シセ C 20

第五十一回帝國議會

民事訴訟法  
改正法律委員會案  
速記錄  
(抄)

司法省



AZ  
1785  
185



~~873042~~  
82W26225



本書は第五十一回帝國議會貴衆兩院に於ける民事訴訟法中改正法律案委員會の議事速記中改正民事訴訟法解釋上參考となるべき部分を抄録し之れに當時日本辯護士協會東京辯護士會より提出ありたる該法案に對する修正意見を附録したるものにて謄寫に代へ印刷の上裁判所部内に配付するものなり

昭和四年三月

司 法 省 民 事 局



# 民事訴訟法改正法律案委員會速記録(抄)

## 民事訴訟法中改正法律案

〔參照〕

民事訴訟法中左ノ通改正ス

民事訴訟法目錄第一編乃至第五編ヲ左ノ如ク改ム

### 第一編 總則

#### 第一章 裁判所

##### 第一節 管轄

##### 第二節 裁判所職員ノ除斥、忌避及回避

#### 第二章 當事者

##### 第一節 當事者能力及訴訟能力

##### 第二節 共同訴訟

##### 第三節 訴訟參加

##### 第四節 訴訟代理人及輔佐人



第三章 訴訟費用

第一節 訴訟費用ノ負擔

第二節 訴訟費用ノ擔保

第三節 訴訟上ノ救助

第四章 訴訟手續

第一節 口頭辯論

第二節 期日及期間

第三節 送達

第四節 裁判

第五節 訴訟手續ノ中斷及中止

第二編 第一審ノ訴訟手續

第一章 地方裁判所ノ訴訟手續

第一節 訴

第二節 辯論ノ準備

第三節 證據

第一款 總則

第二款 證人訊問

第三款 鑑定

第四款 書證

第五款 檢證

第六款 當事者訊問

第七款 證據保全

第二章 區裁判所ノ訴訟手續

第三編 上訴

第一章 控訴

第二章 上告

第三章 抗告

第四編 再審

第五編 督促手續

民事訴訟法第一編乃至第五編ヲ左ノ如ク改ム



第一編 總則

第一章 裁判所

第一節 管轄

第一條 訴ハ被告ノ普通裁判籍所在地ノ裁判所ノ管轄ニ屬ス

第二條 人ノ普通裁判籍ハ住所ニ依リテ定ル

日本ニ住所ナキトキ又ハ住所ノ知レサルトキハ普通裁判籍ハ居所ニ依リ、居所ナキトキ又ハ居所ノ知レサルトキハ最後ノ住所ニ依リテ定ル

第三條 大使、公使其ノ他外國ニ在リテ治外法權ヲ享クル日本人カ前條ノ規定ニ依リ普通裁判籍ヲ有セサルトキハ其ノ者ノ普通裁判籍ハ東京市ニ在ルモノトス

第四條 法人其ノ他ノ社團又ハ財團ノ普通裁判籍ハ其ノ主タル事務所又ハ營業所ニ依リ、事務所又ハ營業所ナキトキハ主タル業務擔當者ノ住所ニ依リテ定ル

國ノ普通裁判籍ハ訴訟ニ付國ヲ代表スル官廳ノ所在地ニ依リテ定ル

第一項ノ規定ハ外國ノ社團又ハ財團ノ普通裁判籍ニ付テハ日本ニ於ケル事務所、營業所又ハ業務擔當者ニ之ヲ適用ス

第五條 財産權上ノ訴ハ義務履行地ノ裁判所ニ之ヲ提起スルコトヲ得

第六條 寄留者ニ對スル財産權上ノ訴ハ寄留地ノ裁判所ニ之ヲ提起スルコトヲ得

第七條 軍人、軍屬又ハ船員ニ對スル財産權上ノ訴ハ軍事用ノ應舎ノ所在地又ハ艦船ノ本籍若ハ船籍ノ所在地ノ裁判所ニ之ヲ提起スルコトヲ得

第八條 日本ニ住所ナキ者又ハ住所ノ知レサル者ニ對スル財産權上ノ訴ハ請求若ハ其ノ擔保ノ目的又ハ差押フルコトヲ得ヘキ被告ノ財産ノ所在地ノ裁判所ニ之ヲ提起スルコトヲ得

第九條 事務所又ハ營業所ヲ有スル者ニ對スル訴ハ其ノ事務所又ハ營業所ニ於ケル業務ニ關スルモノニ限り其ノ所在地ノ裁判所ニ之ヲ提起スルコトヲ得

第十條 船舶又ハ航海ニ關シ船舶所有者其ノ他船舶ノ利用ヲ爲ス者ニ對スル訴ハ船籍ノ所在地ノ裁判所ニ之ヲ提起スルコトヲ得

第十一條 船舶債權其ノ他船舶ヲ以テ擔保スル債權ニ基ク訴ハ船舶ノ所在地ノ裁判所ニ之ヲ提起スルコトヲ得

第十二條 會社其ノ他ノ社團ヨリ社員ニ對スル訴又ハ社員ヨリ社員ニ對スル訴ハ社員タル資格ニ基クモノニ限り會社其ノ他ノ社團ノ普通裁判籍所在地ノ裁判所ニ之ヲ提起スルコトヲ得  
前項ノ規定ハ社團又ハ財團ヨリ役員ニ對スル訴及會社ヨリ發起人又ハ検査役ニ對スル訴ニ之ヲ準用ス



第十三條 會社其ノ他ノ社團ノ債權者ヨリ社員ニ對スル訴ハ社員タル資格ニ基クモノニ限リ前條ノ裁判所ニ之ヲ提起スルコトヲ得

第十四條 第十二條及前條ノ規定ハ社團、財團、社員又ハ社團ノ債權者ヨリ社員、役員發起人又ハ検査役タリシ者ニ對スル訴及社員タリシ者ヨリ社員ニ對スル訴ニ之ヲ準用ス

第十五條 不法行爲ニ關スル訴ハ其ノ行爲アリタル地ノ裁判所ニ之ヲ提起スルコトヲ得  
船舶ノ衝突ニ基ク損害賠償ノ訴ハ損害ヲ受ケタル船舶カ最初ニ到達シタル地ノ裁判所ニ之ヲ提起スルコトヲ得

第十六條 海難救助ニ關スル訴ハ救助アリタル地又ハ救助セラレタル船舶カ最初ニ到達シタル地ノ裁判所ニ之ヲ提起スルコトヲ得

第十七條 不動産ニ關スル訴ハ不動産所在地ノ裁判所ニ之ヲ提起スルコトヲ得

第十八條 登記又ハ登録ニ關スル訴ハ登記又ハ登録ヲ爲スヘキ地ノ裁判所ニ之ヲ提起スルコトヲ得  
第十九條 相続權ニ關スル訴又ハ遺留分若ハ遺贈其ノ他死亡ニ因リテ效力ヲ生スヘキ行爲ニ關スル訴ハ相続開始ノ時ニ於ケル被相続人ノ普通裁判籍所在地ノ裁判所ニ之ヲ提起スルコトヲ得

第二十條 相続債權其ノ他相続財産ノ負擔ニ關スル訴ニシテ前條ノ規定ニ該當セサルモノハ相続財産ノ全部又ハ一部カ前條ノ裁判所ノ管轄區域内ニ在ルトキニ限リ其ノ裁判所ニ之ヲ提起スル

トヲ得

第二十一條 一ノ訴ヲ以テ數個ノ請求ヲ爲ス場合ニ於テハ第一條乃至前條ノ規定ニ依リ一ノ請求ニ付管轄權ヲ有スル裁判所ニ其ノ訴ヲ提起スルコトヲ得

第二十二條 裁判所構成法ニ依リ管轄カ訴訟ノ目的ノ價額ニ依リテ定ルトキハ其ノ價額ハ訴ヲ以テ主張スル利益ニ依リテ之ヲ算定ス

前項ノ價額ヲ算定スルコト能ハサルトキハ其ノ價額ハ千圓ヲ超過スルモノト看做ス

第二十三條 一ノ訴ヲ以テ數個ノ請求ヲ爲ストキハ其ノ價額ヲ合算ス  
果實、損害賠償、違約金又ハ費用ノ請求カ訴訟ノ附帶ノ目的ナルトキハ其ノ價額ハ之ヲ訴訟ノ目的ノ價額ニ算入セス

第二十四條 左ノ場合ニ於テハ關係アル裁判所ニ共通スル直近上級裁判所ハ申立ニ因リ決定ヲ以テ管轄裁判所ヲ定ム

一 管轄裁判所及裁判所構成法第十三條第二項ノ規定ニ依リテ之ニ代ルヘキ裁判所カ法律上又ハ事實上裁判權ヲ行フコト能ハサルトキ

二 裁判所ノ管轄區域明確ナラサル爲管轄裁判所カ定ラサルトキ  
前項ノ決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス



第二十五條 當事者ハ第一審ニ限り合意ニ依リ管轄裁判所ヲ定ムルコトヲ得

八

前項ノ合意ハ一定ノ法律關係ニ基ク訴ニ關シ且書面ヲ以テ之ヲ爲スニ非サレハ其ノ效ナシ

第二十六條 被告カ第一審裁判所ニ於テ管轄違ノ抗辯ヲ提出セスシテ本案ニ付辯論ヲ爲シ又ハ準備手續ニ於テ申述ヲ爲シタルトキハ其ノ裁判所ハ管轄權ヲ有ス

第二十七條 第一條、第五條乃至第二十一條、第二十五條及前條ノ規定ハ訴ニ付專屬管轄ノ定アル場合ニハ之ヲ適用セス

第二十八條 裁判所ハ管轄ニ關スル事項ニ付職權ヲ以テ證據調ヲ爲スコトヲ得

第二十九條 裁判所ノ管轄ハ起訴ノ時ヲ標準トシテ之ヲ定ム

第三十條 裁判所ハ訴訟ノ全部又ハ一部カ其ノ管轄ニ屬セスト認ムルトキハ決定ヲ以テ之ヲ管轄裁判所ニ移送ス

第三十一條 裁所判ハ其ノ管轄ニ屬スル訴訟ニ付著キ損害又ハ遲滯ヲ避クル爲必要アリト認ムルトキハ其ノ專屬管轄ニ屬スルモノヲ除クノ外申立ニ因リ決定ヲ以テ訴訟ノ全部又ハ一部ヲ他ノ管轄裁判所ニ移送スルコトヲ得

第三十二條 移送ノ裁判ハ移送ヲ受ケタル裁判所ヲ羈束ス

移送ヲ受ケタル裁判所ハ更ニ事件ヲ他ノ裁判所ニ移送スルコトヲ得ス

第三十三條 移送ノ裁判ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

移送ノ申立ヲ却下シタル裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第三十四條 移送ノ裁判確定シタルトキハ訴訟ハ初ヨリ移送ヲ受ケタル裁判所ニ繫屬シタルモノト看做ス

前項ノ場合ニ於テハ移送ノ裁判ヲ爲シタル裁判所ノ書記ハ其ノ裁判ノ正本ヲ訴訟記録ニ添附シ移送ヲ受ケタル裁判所ノ書記ニ之ヲ送付スルコトヲ要ス

#### 第二節 裁判所職員ノ除斥、忌避及回避

第三十五條 判事ハ左ノ場合ニ於テハ法律上其ノ職務ノ執行ヨリ除斥セラル

一 判事又ハ其ノ妻若ハ妻タリシ者カ事件ノ當事者ナルトキ又ハ事件ニ付當事者ト共同權利者、共同義務者若ハ償還義務者タル關係ヲ有スルトキ

二 判事カ當事者ノ四親等内ノ血族若ハ三親等内ノ姻族ナルトキ又ハナリシトキ

三 判事カ當事者ノ後見人又ハ同居ノ戸主若ハ家族ナルトキ

四 判事カ事件ニ付證人又ハ鑑定人ト爲リタルトキ

五 判事カ事件ニ付當事者ノ代理人又ハ輔佐人ナルトキ又ハナリシトキ

六 判事カ事件ニ付仲裁判斷ニ關與シ又ハ不服ヲ申立テラレタル前審ノ裁判ニ關與シタルトキ



但シ他ノ裁判所ノ囑託ニ因リ受託判事トシテ其ノ職務ヲ行フコトヲ妨ケス

第三十六條 除斥ノ原因アルトキハ裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ除斥ノ裁判ヲ爲ス

第三十七條 判事ニ付裁判ノ公正ヲ妨クヘキ事情アルトキハ當事者ハ之ヲ忌避スルコトヲ得

當事者カ判事ノ面前ニ於テ辯論ヲ爲シ又ハ準備手續ニ於テ申述ヲ爲シタルトキハ其ノ判事ヲ忌避スルコトヲ得ス但シ忌避ノ原因カ其ノ後ニ生シ又ハ當事者カ其ノ原因アルコトヲ知ラザリシトキハ此ノ限ニ在ラス

第三十八條 第三十六條又ハ前條ニ規定スル申立ハ其ノ原因ヲ開示シテ判事所屬ノ裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ要ス

除斥又ハ忌避ノ原因ハ申立ヲ爲シタル日ヨリ三日内ニ之ヲ疏明スルコトヲ要ス前條第二項但書ノ事實亦同シ

第三十九條 合議裁判所ノ判事ノ除斥又ハ忌避ニ付テハ其ノ裁判所、區裁判所ノ判事ノ除斥又ハ忌避ニ付テハ其ノ裁判所ノ所在地ヲ管轄スル地方裁判所決定ヲ以テ裁判ヲ爲ス

第四十條 判事ハ其ノ除斥又ハ忌避ニ付裁判ニ關與スルコトヲ得ス但シ意見ヲ述フルコトヲ得

第四十一條 除斥又ハ忌避ヲ理由アリトスル決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス之ヲ理由ナシトスル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第四十二條 除斥又ハ忌避ノ申立アリタルトキハ其ノ申立ニ付テノ裁判ノ確定ニ至ル迄訴訟手續ヲ停止スルコトヲ要ス但シ急速ヲ要スル行爲ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第四十三條 第三十五條及第三十七條第一項ノ場合ニ於テハ判事ハ監督權アル判事ノ許可ヲ得テ回避スルコトヲ得

第四十四條 本節ノ規定ハ裁判所書記ニ之ヲ準用ス此ノ場合ニ於テハ裁判ハ書記所屬ノ裁判所之ヲ爲ス

## 第二章 當事者

### 第一節 當事者能力及訴訟能力

第四十五條 當事者能力、訴訟能力及訴訟無能力者ノ法定代理ハ本法ニ別段ノ定アル場合ヲ除クノ外民法其ノ他ノ法令ニ從フ訴訟行爲ヲ爲スニ必要ナル授權亦同シ

第四十六條 法人ニ非サル社團又ハ財團ニシテ代表者又ハ管理人ノ定アルモノハ其ノ名ニ於テ訴ヘ又ハ訴ヘラルルコトヲ得

第四十七條 共同ノ利益ヲ有スル多數者ニシテ前條ノ規定ニ該當セサルモノハ其ノ中ヨリ總員ノ爲ニ原告若ハ被告ト爲ルヘキ一人若ハ數人ヲ選定シ又ハ之ヲ變更スルコトヲ得  
訴訟ノ繫屬ノ後前項ノ規定ニ依リテ原告又ハ被告ト爲ルヘキ者ヲ定メタルトキハ他ノ當事者ハ



當然訴訟ヨリ脱退ス

第四十八條 前條ノ規定ニ依リテ選定セラレタル當事者中死亡其ノ他ノ事由ニ因リテ其ノ資格ヲ喪失シタル者アルトキハ他ノ當事者ニ於テ總員ノ爲ニ訴訟行爲ヲ爲スコトヲ得

第四十九條 未成年者及禁治産者ハ法定代理人ニ依リテノミ訴訟行爲ヲ爲スコトヲ得但シ未成年者カ獨立シテ法律行爲ヲ爲スコトヲ得ル場合ハ此ノ限ニ在ラス

第五十條 準禁治産者、妻又ハ法定代理人カ相手方ノ提起シタル訴又ハ上訴ニ付訴訟行爲ヲ爲スニハ保佐人ノ同意、夫ノ許可又ハ親族會ノ同意其ノ他ノ授權ヲ要セス

準禁治産者、妻又ハ法定代理人カ訴、控訴若ハ上告ノ取下、和解、請求ノ抛棄若ハ認諾又ハ第七十二條ノ規定ニ依ル脱退ヲ爲スニハ常ニ特別ノ授權アルコトヲ要ス

第五十一條 外國人ハ其ノ本國法ニ依レハ訴訟能力ヲ有セザルトキト雖日本ノ法律ニ依レハ訴訟能力ヲ有スヘキトキハ之ヲ訴訟能力者ト看做ス

第五十二條 法定代理權又ハ訴訟行爲ヲ爲スニ必要ナル授權ハ書面ヲ以テ之ヲ證スルコトヲ要ス

第四十七條ノ規定ニ依ル當事者ノ選定及變更亦同シ  
前項ノ書面ハ訴訟記録ニ之ヲ添附スルコトヲ要ス

第五十三條 訴訟能力、法定代理權又ハ訴訟行爲ヲ爲スニ必要ナル授權ノ欠缺アルトキハ裁判所ハ期間ヲ定メテ其ノ補正ヲ命ジ若遲滯ノ爲損害ヲ生スル虞アルトキハ一時訴訟行爲ヲ爲サシムルコトヲ得

第五十四條 訴訟能力、法定代理權又ハ訴訟行爲ヲ爲スニ必要ナル授權ノ欠缺アル者カ爲シタル訴訟行爲ハ其ノ欠缺ナキニ至リタル當事者又ハ法定代理人ノ追認ニ因リ行爲ノ時ニ遡リテ其ノ效力ヲ生ス

第五十五條 第五十三條及前條ノ規定ハ第四十七條ノ規定ニ依ル當事者カ訴訟行爲ヲ爲ス場合ニ之ヲ準用ス

第五十六條 法定代理人ナキ場合又ハ法定代理人カ代理權ヲ行フコト能ハサル場合ニ於テ未成年者又ハ禁治産者ニ對シ訴訟行爲ヲ爲サムトスル者ハ遲滯ノ爲損害ヲ受クル虞アルコトヲ疏明シテ受訴裁判所ノ裁判長ニ特別代理人ノ選任ヲ申請スルコトヲ得

裁判所ハ何時ニテモ特別代理人ヲ改任スルコトヲ得  
特別代理人カ訴訟行爲ヲ爲スニハ後見人ト同一ノ授權アルコトヲ要ス  
特別代理人ノ選任及改任ノ命令ハ特別代理人ニモ之ヲ送達スルコトヲ要ス

第五十七條 法定代理權ノ消滅ハ本人又ハ代理人ヨリ之ヲ相手方ニ通知スルニ非ザレハ其ノ効ナシ但シ相手方カ其ノ事實ヲ知リタルトキハ此ノ限ニ在ラス



前項ノ規定ハ第四十七條ノ規定ニ依ル當事者ノ變更ニ之ヲ準用ス

第五十八條 本法中法定代理及法定代理人ニ關スル規定ハ法人ノ代表者及法人ニ非スシテ其ノ名ニ於テ訴ヘ又ハ訴ヘラルルコトヲ得ル社團又ハ財團ノ代表者又ハ管理人ニ之ヲ準用ス

第二節 共同訴訟

第五十九條 訴訟ノ目的タル權利又ハ義務カ數人ニ付共通ナルトキ又ハ同一ノ事實上及法律上ノ原因ニ基クトキハ其ノ數人ハ共同訴訟人トシテ訴ヘ又訴ヘラルルコトヲ得訴訟ノ目的タル權利又ハ義務カ同種ニシテ事實上及法律上同種ノ原因ニ基クトキ亦同シ

第六十條 他人間ノ訴訟ノ目的ノ全部又ハ一部ヲ自己ノ爲ニ請求スル者ハ其ノ訴訟ノ繫屬中當事者雙方ヲ共同被告トシ第一審ノ受訴裁判所ニ訴ヲ提起スルコトヲ得

第六十一條 共同訴訟人ノ一人ノ訴訟行爲又ハ之ニ對スル相手方ノ訴訟行爲及其ノ一人ニ付生シタル事項ハ他ノ共同訴訟人ニ影響ヲ及ホサス

第六十二條 訴訟ノ目的カ共同訴訟人ノ全員ニ付合一ニノミ確定スヘキ場合ニ於テハ其ノ一人ノ訴訟行爲ハ全員ノ利益ニ於テノミ其ノ效力ヲ生ス

共同訴訟人ノ一人ニ對スル相手方ノ訴訟行爲ハ全員ニ對シテ其ノ效力ヲ生ス  
共同訴訟人ノ一人ニ付訴訟手續ノ中斷又ハ中止ノ原因アルトキハ其ノ中斷又ハ中止ハ全員ニ付

其ノ效力ヲ生ス

第六十三條 第五十條第一項ノ規定ハ前條第一項ノ場合ニ於テ共同訴訟人ノ一人カ提起シタル上訴ニ付他ノ共同訴訟人ノ爲スヘキ訴訟行爲ニ之ヲ準用ス

第三節 訴訟參加

第六十四條 訴訟ノ結果ニ付利害關係ヲ有スル第三者ハ其ノ訴訟ノ繫屬中當事者ノ一方ヲ補助スル爲訴訟ニ參加スルコトヲ得

第六十五條 參加ノ申出ハ參加ノ趣旨及理由ヲ具シ參加ニ依リテ訴訟行爲ヲ爲スヘキ裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ要ス

書面ニ依リテ參加ノ申出ヲ爲シタル場合ニ於テハ其ノ書面ハ之ヲ當事者雙方ニ送達スルコトヲ要ス

參加ノ申出ハ參加人トシテ爲シ得ル訴訟行爲ト共ニ之ヲ爲スコトヲ得

第六十六條 當事者カ參加ニ付異議ヲ述ヘタルトキハ參加ノ理由ハ之ヲ説明スルコトヲ要ス此ノ場合ニ於テハ裁判所ハ參加ノ許否ニ付決定ヲ以テ裁判ヲ爲ス

前項ノ裁判ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第六十七條 當事者カ參加ニ付異議ヲ述ヘスシテ辯論ヲ爲シ又ハ準備手續ニ於テ申述ヲ爲シタル



トキハ異議ヲ述フル權利ヲ失フ

第六十八條 參加人ハ參加ニ付異議アル場合ニ於テモ參加ヲ許ササル裁判確定セサル間ハ訴訟行爲ヲ爲スコトヲ得

參加人ノ訴訟行爲ハ當事者カ之ヲ援用シタルトキハ參加ヲ許ササル裁判確定シタル場合ニ於テモ其ノ效力ヲ有ス

第六十九條 參加人ハ訴訟ニ付攻撃又ハ防禦ノ方法ノ提出、異議ノ申立、上訴ノ提起其ノ他一切ノ訴訟行爲ヲ爲スコトヲ得但シ參加ノ時ニ於ケル訴訟ノ程度ニ從ヒ爲スコトヲ得サルモノハ此ノ限ニ在ラス

參加人ノ訴訟行爲カ被參加人ノ訴訟行爲ト牴觸スルトキハ其ノ效力ヲ有セス

第七十條 前條ノ規定ニ依リテ參加人カ訴訟行爲ヲ爲スコトヲ得ヌ又ハ其ノ訴訟行爲カ效力ヲ有セザリシ場合、被參加人カ參加人ノ訴訟行爲ヲ妨ケタル場合及被參加人カ參加人ノ爲スコト能ハサル訴訟行爲ヲ故意又ハ過失ニ因リテ爲サザリシ場合ヲ除クノ外裁判ハ參加人ニ對シテモ其ノ效力ヲ有ス

第七十一條 訴訟ノ結果ニ因リテ權利ヲ害セラルヘキコトヲ主張スル第三者又ハ訴訟ノ目的ノ全部若ハ一部カ自己ノ權利ナルコトヲ主張スル第三者ハ當事者トシテ訴訟ニ參加スルコトヲ得此

ノ場合ニ於テハ第六十二條及第六十五條ノ規定ヲ準用ス

第七十二條 前條ノ規定ニ依リ自己ノ權利ヲ主張スル爲訴訟ニ參加シタル者アル場合ニ於テハ參加前ノ原告又ハ被告ハ相手方ノ承諾ヲ得テ訴訟ヨリ脱退スルコトヲ得但シ判決ハ脱退シタル當事者ニ對シテモ其ノ效力ヲ有ス

第七十三條 訴訟ノ繫屬中其ノ訴訟ノ目的タル權利ノ全部又ハ一部ヲ讓受ケタルコトヲ主張シ第七十一條ノ規定ニ依リテ訴訟參加ヲ爲シタルトキハ其ノ參加ハ訴訟ノ繫屬ノ初ニ遡リテ時効ノ中斷又ハ法律上ノ期間遵守ノ效力ヲ生ス

第七十四條 訴訟ノ繫屬中第三者カ其ノ訴訟ノ目的タル債務ヲ承繼シタルトキハ裁判所ハ當事者ノ申立ニ因リ其ノ第三者ヲシテ訴訟ヲ引受ケシムルコトヲ得

裁判所ハ前項ノ規定ニ依リテ決定ヲ爲ス前當事者及第三者ヲ審訊スルコトヲ要ス

第七十二條ノ規定中脱退及判決ノ效力ニ關スルモノハ第一項ノ規定ニ依リテ訴訟ノ引受アリタル場合ニ之ヲ準用ス

第七十五條 訴訟ノ目的カ當事者ノ一方及第三者ニ付合一ニノミ確定スヘキ場合ニ於テハ其ノ第三者ハ共同訴訟人トシテ訴訟ニ參加スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ第六十五條ノ規定ヲ準用ス

第七十六條 當事者ハ訴訟ノ繫屬中參加ヲ爲スコトヲ得ル第三者ニ其ノ訴訟ノ告知ヲ爲スコトヲ



得

訴訟告知ヲ受ケタル者ハ更ニ訴訟告知ヲ爲スコトヲ得

第七十七條 訴訟告知ハ理由及訴訟ノ程度ヲ記載シタル書面ヲ裁判所ニ提出シテ之ヲ爲スコトヲ要ス

前項ノ書面ハ相手方ニモ之ヲ送達スルコトヲ要ス

第七十八條 訴訟告知ヲ受ケタル者カ參加セザリシ場合ニ於テモ第七十條ノ規定ノ適用ニ付テハ參加スルコトヲ得ヘカリシ時ニ參加シタルモノト看做ス

#### 第四節 訴訟代理人及輔佐人

第七十九條 法令ニ依リテ裁判上ノ行爲ヲ爲スコトヲ得ル代理人ノ外辯護士ニ非サレハ訴訟代理人タルコトヲ得ス但シ區裁判所ニ於テハ許可ヲ得テ辯護士ニ非サル者ヲ訴訟代理人ト爲スコトヲ得

前項ノ許可ハ何時ニテモ之ヲ取消スコトヲ得

第八十條 訴訟代理人ノ權限ハ書面ヲ以テ之ヲ證スルコトヲ要ス

前項ノ書面カ私文書ナルトキハ裁判所ハ當該吏員ノ認證ヲ受クヘキ旨ヲ訴訟代理人ニ命スルコトヲ得

前二項ノ規定ハ當事者カ口頭ヲ以テ訴訟代理人ヲ選任シ裁判所書記カ調書ニ其ノ陳述ヲ記載シタル場合ニハ之ヲ適用セス

第八十一條 訴訟代理人ハ委任ヲ受ケタル事件ニ付反訴、參加、強制執行、假差押及假處分ニ關スル訴訟行爲モ亦之ヲ爲スコトヲ得

左ニ掲クル事項ニ付テハ特別ノ委任ヲ受クルコトヲ要ス

一 反訴ノ提起

二 訴ノ取下、和解、請求ノ拋棄若ハ認諾又ハ第七十二條ノ規定ニ依ル脱退

三 控訴、上告又ハ其ノ取下

四 代理人ノ選任

訴訟代理權ハ之ヲ制限スルコトヲ得ス但シ辯護士ニ非サル訴訟代理人ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第八十二條 數人ノ訴訟代理人アルトキハ各自當事者ヲ代理ス

當事者カ前項ノ規定ニ異ル定ヲ爲スモ其ノ效力ヲ生セス

第八十三條 第八十一條及前條ノ規定ハ法令ニ依リテ裁判上ノ行爲ヲ爲スコトヲ得ル代理人ノ權限ヲ妨ケス

第八十四條 訴訟代理人ノ事實上ノ陳述ハ當事者カ直ニ之ヲ取消シ又ハ更正シタルトキハ其ノ效



カヲ生セス

第八十五條 訴訟代理權ハ當事者ノ死亡若ハ訴訟能力ノ喪失、當事者タル法人ノ合併ニ因ル消滅、當事者タル受託者ノ信託ノ任務終了又ハ法定代理人ノ死亡、訴訟能力ノ喪失若ハ代理權ノ消滅、變更ニ因リテ消滅セス

第八十六條 一定ノ資格ヲ有スル者ニシテ自己ノ名ヲ以テ他人ノ爲訴訟ノ當事者タルモノノ訴訟代理人ノ代理權ハ當事者ノ資格ノ喪失ニ因リテ消滅セス

前項ノ規定ハ第四十七條ノ規定ニ依リテ選定セラレタル當事者カ其ノ資格ヲ喪失シタル場合ニ之ヲ準用ス

第八十七條 第五十二條第二項、第五十三條、第五十四條及第五十七條ノ規定ハ訴訟代理ニ之ヲ準用ス

第八十八條 當事者又ハ訴訟代理人ハ裁判所ノ許可ヲ得テ輔佐人ト共ニ出頭スルコトヲ得此ノ許可ハ何時ニテモ之ヲ取消スコトヲ得

輔佐人ノ陳述ハ當事者又ハ訴訟代理人カ直ニ之ヲ取消シ又ハ更正セサルトキハ自ラ之ヲ爲シタルモノト看做ス

### 第三章 訴訟費用

#### 第一節 訴訟費用ノ負擔

第八十九條 訴訟費用ハ敗訴ノ當事者ノ負擔トス

第九十條 裁判所ハ事情ニ從ヒ勝訴ノ當事者ヲシテ其ノ權利ノ伸張若ハ防禦ニ必要ナラサル行爲ニ因リテ生シタル訴訟費用又ハ訴訟ノ程度ニ於テ相手方ノ權利ノ伸張若ハ防禦ニ必要ナリシ行爲ニ因リテ生シタル訴訟費用ノ全部又ハ一部ヲ負擔セシムルコトヲ得

第九十一條 當事者カ適當ノ時期ニ攻撃若ハ防禦ノ方法ヲ提出セサル爲又ハ期日若ハ期間ノ懈怠其ノ他當事者ノ責ニ歸スヘキ事由ニ因リ訴訟ヲ遲滯セシメタルトキハ裁判所ハ之ヲシテ其ノ勝訴ノ場合ニ於テモ遲滯ニ因リテ生シタル訴訟費用ノ全部又ハ一部ヲ負擔セシムルコトヲ得

第九十二條 一部敗訴ノ場合ニ於テ各當事者ノ負擔スヘキ訴訟費用ハ裁判所ノ意見ヲ以テ之ヲ定ム但シ事情ニ從ヒ當事者ノ一方ヲシテ訴訟費用ノ全部ヲ負擔セシムルコトヲ得

第九十三條 共同訴訟人ハ平等ノ割合ヲ以テ訴訟費用ヲ負擔ス但シ裁判所ハ事情ニ從ヒ共同訴訟人ヲシテ連帶シテ訴訟費用ヲ負擔セシメ又ハ他ノ方法ニ依リ之ヲ負擔セシムルコトヲ得  
裁判所ハ前項ノ規定ニ拘ラス權利ノ伸張又ハ防禦ニ必要ナラサル行爲ヲ爲シタル當事者ヲシテ其ノ行爲ニ因リテ生シタル費用ヲ負擔セシムルコトヲ得

第九十四條 第八十九條乃至前條ノ規定ハ當事者カ參加ニ付異議ヲ述ヘタル場合ニ於テハ其ノ異



議ニ因リテ生シタル訴訟費用ノ参加人ト異議ヲ述ヘタル當事者トノ間ニ於ケル負擔ニ關シ之ヲ準用ス参加ニ因リテ生シタル訴訟費用ノ参加人ト相手方トノ間ニ於ケル負擔ニ付亦同シ

第九十五條 裁判所ハ事件ヲ完結スル裁判ニ於テ職權ヲ以テ其ノ審級ニ於ケル訴訟費用ノ全部ニ付裁判ヲ爲スコトヲ要ス但シ事情ニ從ヒ事件ノ一部又ハ中間ノ争ニ關スル裁判ニ於テ其ノ費用ノ裁判ヲ爲スコトヲ得

第九十六條 上級裁判所カ本案ノ裁判ヲ變更スル場合ニ於テハ訴訟ノ總費用ニ付裁判ヲ爲スコトヲ要ス事件ノ差戻又ハ移送ヲ受ケタル裁判所カ其ノ事件ヲ完結スル裁判ヲ爲ス場合亦同シ

第九十七條 當事者カ裁判所ニ於テ和解ヲ爲シタル場合ニ於テ和解ノ費用及訴訟費用ノ負擔ニ付別段ノ定ヲ爲ササルトキハ其ノ費用ハ各自之ヲ負擔ス

第九十八條 法定代理人、訴訟代理人、裁判所書記又ハ執達吏カ故意又ハ重大ナル過失ニ因リテ無益ナル費用ヲ生セシメタルトキハ受訴裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ此等ノ者ニ對シ其ノ費用額ノ償還ヲ命スルコトヲ得

前項ノ規定ハ法定代理人又ハ訴訟代理人トシテ訴訟行為ヲ爲シタル者カ其ノ代理權又ハ訴訟行為ヲ爲スニ必要ナル授權アルコトヲ證明スルコト能ハス又ハ追認ヲ得サリシ場合ニ於テ其ノ訴訟行為ニ因リテ生シタル訴訟費用ニ之ヲ準用ス

前二項ノ決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第九十九條 裁判所カ前條第二項ノ場合ニ於テ訴ヲ却下シタルトキハ訴訟費用ハ代理人トシテ訴訟行為ヲ爲シタル者ノ負擔トス

第一百條 裁判所カ訴訟費用ノ負擔ヲ定ムル裁判ニ於テ其ノ額ヲ定メサルトキハ第一審ノ受訴裁判所ハ其ノ裁判カ執行力ヲ生シタル後申立ニ因リ決定ヲ以テ之ヲ定ム

訴訟費用額ノ確定ヲ求ムル申立ヲ爲スニハ費用計算書及其ノ謄本並費用額ノ疏明ニ必要ナル書面ヲ提出スルコトヲ要ス

第一項ノ決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第一百一條 裁判所ハ訴訟費用額ヲ定ムル決定ヲ爲ス前相手方ニ費用計算書ノ謄本ヲ交付シ陳述ヲ爲スヘキ旨並一定ノ期間内ニ費用計算書及費用額ノ疏明ニ必要ナル書面ヲ提出スヘキ旨ヲ催告スルコトヲ要ス

相手方カ期間内ニ前項ノ書面ヲ提出セサルトキハ裁判所ハ申立人ノ費用ノミニ付裁判ヲ爲スコトヲ得但シ相手方ノ費用額ノ確定ヲ求ムル申立ヲ妨ケス

第一百二條 裁判所カ訴訟費用額ヲ定ムル裁判ヲ爲ス場合ニ於テハ前條第二項ノ場合ヲ除クノ外各當事者ノ負擔スヘキ費用ハ其ノ對當額ニ付相殺アリタルモノト看做ス



第二百三條 第九十七條ノ場合ニ於テ當事者カ訴訟費用ノ負擔ヲ定メ其ノ額ヲ定メサルトキハ裁判所ハ申立ニ因リ決定ヲ以テ其ノ額ヲ定ムルコトヲ要ス此ノ場合ニ於テハ第百條第二項第三項、第百一條及前條ノ規定ヲ準用ス

第二百四條 前條ノ場合ヲ除クノ外訴訟カ裁判ニ因ラスシテ完結シタルトキハ裁判所ハ申立ニ因リ決定ヲ以テ訴訟費用ノ額ヲ定メ且其ノ負擔ヲ命スルコトヲ要ス參加又ハ之ニ付テノ異議ノ取下アリタルトキ亦同シ

第八十九條乃至第九十四條、第百條第二項第三項、第百一條及第百二條ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第二百五條 裁判所ハ裁判所書記ヲシテ訴訟費用額ノ計算ヲ爲サシムルコトヲ得

第二百六條 費用ヲ要スル行爲ニ付テハ裁判所ハ當事者ヲシテ其ノ費用ヲ豫納セシムルコトヲ得當事者カ裁判所ノ命ニ從ヒ費用ヲ豫納セサルトキハ裁判所ハ前項ノ行爲ヲ爲ササルコトヲ得

第二節 訴訟費用ノ擔保

第二百七條 原告カ日本ニ住所、事務所及營業所ヲ有セサルトキハ裁判所ハ被告ノ申立ニ因リ訴訟費用ノ擔保ヲ供スヘキコトヲ原告ニ命スルコトヲ要ス擔保ニ不足ヲ生シタルトキ亦同シ前項ノ規定ハ請求ノ一部ニ付爭ナキ場合ニ於テ其ノ額カ擔保ニ十分ナルトキハ之ヲ適用セス

第二百八條 擔保ヲ供スヘキ事由アルコトヲ知リタル後被告カ本案ニ付辯論ヲ爲シ又ハ準備手續ニ於テ申述ヲ爲シタルトキハ擔保ノ申立ヲ爲スコトヲ得ス

第二百九條 擔保ノ申立ヲ爲シタル被告ハ原告カ擔保ヲ供スル迄應訴ヲ拒ムコトヲ得

第一百十條 裁判所ハ擔保ヲ供スヘキコトヲ命スル決定ニ於テ擔保額及擔保ヲ供スヘキ期間ヲ定ムルコトヲ要ス

擔保額ハ被告カ各審ニ於テ支出スヘキ費用ノ總額ヲ標準トシテ之ヲ定ム

第一百一條 擔保ノ申立ニ關スル裁判ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第一百十二條 擔保ヲ供スルニハ金錢又ハ裁判所カ相當ト認ムル有價證券ヲ供託スルコトヲ要ス但シ當事者カ別段ノ契約ヲ爲シタルトキハ其ノ契約ニ依ル

第一百十三條 被告ハ訴訟費用ニ付前條ノ規定ニ依リテ供託シタル金錢又ハ有價證券ノ上ニ質權者ト同一ノ權利ヲ有ス

第一百十四條 原告カ擔保ヲ供スヘキ期間内ニ之ヲ供セサルトキハ裁判所ハ口頭辯論ヲ經スシテ判決ヲ以テ訴ヲ却下スルコトヲ得但シ判決前擔保ヲ供シタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第一百十五條 擔保ヲ供シタル者カ擔保ノ事由止ミタルコトヲ證明シタルトキハ裁判所ハ申立ニ因リ擔保取消ノ決定ヲ爲スコトヲ要ス



擔保ヲ供シタル者カ擔保取消ニ付擔保權利者ノ同意ヲ得タルコトヲ證明シタルトキ亦前項ニ同シ

訴訟ノ完結後裁判所カ擔保ヲ供シタル者ノ申立ニ因リ擔保權利者ニ對シ一定ノ期間内ニ其ノ權利ヲ行使スヘキ旨ヲ催告シ擔保權利者カ其ノ行使ヲ爲ササルトキハ擔保取消ニ付擔保權利者ノ同意アリタルモノト看做ス

第一項及第二項ノ規定ニ依ル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第一百十六條 裁判所ハ擔保ヲ供シタル者ノ申立ニ因リ決定ヲ以テ供託シタル擔保物ノ變換ヲ命スルコトヲ得

前項ノ規定ハ供託シタル擔保ヲ契約ニ因リテ他ノ擔保ニ變換スルコトヲ妨ケス

第一百七條 第九條、第十條第一項及第十一條乃至前條ノ規定ハ他ノ法令ニ依リテ訴ノ提起ニ付供スヘキ擔保ニ之ヲ準用ス

第三節 訴訟上ノ救助

第一百十八條 訴訟費用ヲ支拂フ資力ナキ者ニ對シテハ裁判所ハ申立ニ因リ訴訟上ノ救助ヲ與フルコトヲ得但シ勝訴ノ見込ナキニ非サルトキニ限ル

第一百十九條 訴訟上ノ救助ハ各審ニ於テ之ヲ與フ

救助ノ事由ハ之ヲ疏明スルコトヲ要ス

第二十條 訴訟上ノ救助ハ訴訟及強制執行ニ付左ノ效力ヲ生ス

- 一 裁判費用ノ支拂ノ猶豫
- 二 執達吏及裁判所ニ於テ附添ヲ命シタル辯護士ノ報酬及立替金ノ支拂ノ猶豫
- 三 訴訟費用ノ擔保ノ免除

第二十一條 訴訟上ノ救助ハ之ヲ受ケタル者ノ爲ニノミ其ノ效力ヲ有ス

裁判所ハ訴訟ノ承繼人ニ對シ猶豫シタル費用ノ支拂ヲ命ス

第二十二條 訴訟上ノ救助ヲ受ケタル者カ訴訟費用ノ支拂ヲ爲ス資力ヲ有スルコト判明シ又ハ之ヲ有スルニ至リタルトキハ訴訟記録ノ存スル裁判所ハ利害關係人ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ何時ニテモ救助ヲ取消シ猶豫シタル訴訟費用ノ支拂ヲ命スルコトヲ得

第二十三條 訴訟上ノ救助ヲ受ケタル者ニ支拂ヲ猶豫シタル費用ハ其ノ負擔ヲ命セラレタル相手方ヨリ直接ニ之ヲ取立ツルコトヲ得此ノ場合ニ於テ辯護士又ハ執達吏ハ訴訟上ノ救助ヲ受ケタル者ノ有スル債務名義ニ依リ報酬及立替金ニ付費用額ヲ定ムル申立及強制執行ヲ爲スコトヲ得

辯護士又ハ執達吏ハ報酬及立替金ニ付當事者ニ代リ第三條又ハ第四條ノ裁判ヲ求ムル申立



ヲ爲スコトヲ得

第二百二十四條 本節ニ規定スル裁判ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

#### 第四章 訴訟手續

##### 第一節 口頭辯論

第二百五條 當事者ハ訴訟ニ付裁判所ニ於テ口頭辯論ヲ爲スコトヲ要ス但シ決定ヲ以テ完結スヘキ事件ニ付テハ裁判所口頭辯論ヲ爲スヘキカ否ヲ定ム

前項但書ノ規定ニ依リテ口頭辯論ヲ爲ササル場合ニ於テハ裁判所ハ當事者ヲ審訊スルコトヲ得前二項ノ規定ハ別段ノ規定アル場合ニハ之ヲ適用セス

第二百十六條 口頭辯論ハ裁判長之ヲ指揮ス

裁判長ハ發言ヲ許シ又ハ其ノ命ニ從ハサル者ニ發言ヲ禁スルコトヲ得

第二百十七條 裁判長ハ訴訟關係ヲ明瞭ナラシムル爲事實上及法律上ノ事項ニ關シ當事者ニ對シテ問ヲ發シ又ハ立證ヲ促スコトヲ得

陪席判事ハ裁判長ニ告ケテ前項ニ規定スル處置ヲ爲スコトヲ得

當事者ハ裁判長ニ對シ必要ナル發問ヲ求ムルコトヲ得

第二百十八條 裁判長ハ前條ノ規定ニ依リテ當事者ヲシテ釋明セシムヘキ事項ヲ指示シ口頭辯論

期日前準備ヲ爲スヘキコトヲ命スルコトヲ得

第二百十九條 當事者カ辯論ノ指揮ニ關スル裁判長ノ命又ハ第二百十七條若ハ前條ノ規定ニ依ル裁判長若ハ陪席判事ノ處置ニ對シ異議ヲ述ヘタルトキハ裁判所決定ヲ以テ其ノ異議ニ付裁判ヲ爲ス

第二百十條 受命判事ヲシテ其ノ職務ヲ行ハシムヘキ場合ニ於テハ裁判長其ノ判事ヲ指定ス裁判所ノ爲ス囑託ハ別段ノ規定アル場合ヲ除クノ外裁判長之ヲ爲ス

第二百十一條 裁判所ハ訴訟關係ヲ明瞭ナラシムル爲左ノ處分ヲ爲スコトヲ得

- 一 當事者本人又ハ其ノ法定代理人ノ出頭ヲ命スルコト
- 二 訴訟書類又ハ訴訟ニ於テ引用シタル文書其ノ他ノ物件ニシテ當事者ノ所持スルモノヲ提出セシムルコト

三 當事者又ハ第三者ノ提出シタル文書其ノ他ノ物件ヲ裁判所ニ留置クコト

四 檢證ヲ爲シ又ハ鑑定ヲ命スルコト

五 必要ナル調査ヲ囑託スルコト

前項ニ規定スル檢證、鑑定及調査ノ囑託ニ付テハ證據調ニ關スル規定ヲ準用ス

第二百十二條 裁判所ハ口頭辯論ノ制限、分離若ハ併合ヲ命シ又ハ其ノ命ヲ取消スコトヲ得



第三百三十三條 裁判所ハ終結シタル口頭辯論ノ再開ヲ命スルコトヲ得

第三百三十四條 辯論ニ與ル者カ日本語ニ通セサルトキ又ハ雙若ハ啞ナルトキハ通事ヲ立會ハシム但シ雙者又ハ啞者ニハ文字ヲ以テ問ヒ又ハ陳述ヲ爲サシムルコトヲ得  
鑑定人ニ關スル規定ハ通事ニ之ヲ準用ス

第三百三十五條 裁判所ハ訴訟關係ヲ明瞭ナラシムル爲必要ナル陳述ヲ爲スコト能ハサル當事者、代理人又ハ輔佐人ノ陳述ヲ禁シ辯論續行ノ爲新期日ヲ定ムルコトヲ得

前項ノ規定ニ依リテ陳述ヲ禁シタル場合ニ於テ必要アリト認ムルトキハ裁判所ハ辯護士ノ附添ヲ命スルコトヲ得

訴訟代理人ノ陳述ヲ禁シ又ハ辯護士ノ附添ヲ命シタルトキハ本人ニ其ノ旨ヲ通知スルコトヲ要ス

第三百三十六條 裁判所ハ訴訟ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハス和解ヲ試ミ又ハ受命判事若ハ受託判事ヲシテ之ヲ試ミシムルコトヲ得

裁判所又ハ受命判事若ハ受託判事ハ和解ノ爲當事者本人又ハ其ノ法定代理人ノ出頭ヲ命スルコトヲ得

第三百三十七條 攻撃又ハ防禦ノ方法ハ別段ノ規定アル場合ヲ除クノ外口頭辯論ノ終結ニ至ル迄之

ヲ提出スルコトヲ得

第三百三十八條 原告又ハ被告カ最初ニ爲スヘキ口頭辯論ノ期日ニ出頭セス又ハ出頭スルモ本案ノ辯論ヲ爲ササルトキハ其ノ者ノ提出シタル訴狀、答辯書其ノ他ノ準備書面ニ記載シタル事項ハ之ヲ陳述シタルモノト看做シ出頭シタル相手方ニ辯論ヲ命スルコトヲ得

第三百三十九條 當事者カ故意又ハ重大ナル過失ニ因リ時機ニ後レテ提出シタル攻撃又ハ防禦ノ方法ハ之カ爲訴訟ノ完結ヲ遅延セシムヘキモノト認メタルトキハ裁判所ハ決定ヲ以テ之ヲ却下スルコトヲ得

攻撃又ハ防禦ノ方法ニシテ其ノ趣旨明瞭ナラサルモノニ付當事者カ必要ナル釋明ヲ爲サス又ハ釋明ヲ爲スヘキ期日ニ出頭セサルトキ亦前項ニ同シ

第四百十條 當事者カ口頭辯論ニ於テ相手方ノ主張シタル事實ヲ明ニ争ハサルトキハ其ノ事實ヲ自白シタルモノト看做ス但シ辯論ノ全趣旨ニ依リ其ノ事實ヲ争ヒタルモノト認ムヘキ場合ハ此ノ限ニ在ラス

相手方ノ主張シタル事實ヲ知ラサル旨ノ陳述ヲ爲シタル者ハ其ノ事實ヲ争ヒタルモノト推定ス  
第四百十一條 當事者カ訴訟手續ニ關スル規定ノ違背ヲ知り又ハ之ヲ知ルコトヲ得ヘカリシ場合ニ於テ遲滯ナク異議ヲ述ヘサルトキハ之ヲ述フル權利ヲ失フ但シ拋棄スルコトヲ得サルモノハ



此ノ限ニ在ラス

第四百二十二條 口頭辯論ニ付テハ裁判所書記期日毎ニ調書ヲ作ルコトヲ要ス

第四百二十三條 調書ニハ左ノ事項ヲ記載シ裁判長及裁判所書記之ニ署名捺印シ裁判長支障アルトキハ陪席判事其ノ席次ニ從ヒ順次之ニ代リテ署名捺印シ且其ノ事由ヲ記載スルコトヲ要ス但シ判事皆支障アルトキハ書記其ノ旨ヲ記載スルヲ以テ足ル

一 事件ノ表示

二 判事及裁判所書記ノ氏名

三 立會ヒタル檢事ノ氏名

四 出頭シタル當事者、代理人、輔佐人及通事並闕席シタル當事者ノ氏名

五 辯論ノ場所及年月日

六 辯論ヲ公開シタルコト又ハ公開セサル場合ニ於テハ其ノ理由

第四百二十四條 調書ニハ辯論ノ要領ヲ記載シ殊ニ左ノ事項ヲ明確ニスルコトヲ要ス

一 和解、認諾、拋棄、取下及自白

二 證人、鑑定人ノ宣誓及陳述

三 檢證ノ結果

四 書面ニ作ラサル裁判

五 裁判ノ言渡

第四百四十五條 調書ニハ書面、寫真其ノ他裁判所ニ於テ適當ト認ムルモノヲ引用シ訴訟記録ニ添

附シテ之ヲ調書ノ一部ト爲スコトヲ得

第四百四十六條 調書ノ記載ハ申立ニ因リ法廷ニ於テ關係人ニ之ヲ讀聞カセ又ハ閱覽セシメ且調書

ニ其ノ旨ヲ記載スルコトヲ要ス

調書ノ記載ニ付關係人カ異議ヲ述ヘタルトキハ調書ニ其ノ趣旨ヲ記載スルコトヲ要ス

第四百四十七條 口頭辯論ノ方式ニ關スル規定ノ遵守ハ調書ニ依リテノミ之ヲ證スルコトヲ得但シ

調書カ滅失シタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第四百四十八條 裁判所必要アリト認ムルトキハ速記者ヲシテ口頭辯論ニ於ケル陳述ノ全部又ハ一

部ヲ筆記セシムルコトヲ得

第四百四十九條 第四百二十二條乃至前條ノ規定ハ受命判事又ハ受託判事ノ審問及證據調ニ之ヲ準用

ス

第四百五十條 申立其ノ他ノ申述ハ別段ノ規定アル場合ヲ除クノ外書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコ

トヲ得



口頭ヲ以テ申述ヲ爲スニハ裁判所書記ノ面前ニ於テ陳述ヲ爲スコトヲ要ス

前項ノ場合ニ於テハ書記調書ヲ作り之ニ署名捺印スルコトヲ要ス

第五十一條 當事者ハ訴訟記録ノ閲覧若ハ謄寫又ハ其ノ正本、謄本、抄本若ハ訴訟ニ關スル事項ノ證明書ノ交付ヲ裁判所書記ニ請求スルコトヲ得利害關係ヲ説明シタル第三者亦同シ  
訴訟記録ノ正本、謄本又ハ抄本ニハ其ノ正本、謄本又ハ抄本ナルコトヲ記載シ書記之ニ署名捺印シ且裁判所ノ印ヲ押捺スルコトヲ要ス

第二節 期日及期間

第五十二條 期日ハ裁判長之ヲ定ム

受命判事又ハ受託判事ノ審問ノ期日ハ其ノ判事之ヲ定ム

期日ノ指定ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ爲ス

第五十三條 期日ハ已ムコトヲ得サル場合ニ限り日曜日其ノ他ノ一般ノ休日ニ之ヲ定ムルコトヲ得

第五十四條 期日ニ於ケル呼出ハ呼出狀ヲ送達シテ之ヲ爲ス但シ當該事件ニ付頭シタル者ニ對シテハ期日ヲ告知スルヲ以テ足ル

第五十五條 期日ハ事件ノ呼上ヲ以テ之ヲ開始ス

第五十六條 期間ノ計算ハ民法ニ從フ

期間ノ末日カ日曜日其ノ他ノ一般ノ休日ニ當ルトキハ期間ハ其ノ翌日ヲ以テ滿了ス

第五十七條 期間ヲ定ムル裁判ニ於テ始期ヲ定メサルトキハ其ノ期間ハ裁判カ效力ヲ生シタル時ヨリ進行ヲ始ム

第五十八條 裁判所ハ法定期間又ハ其ノ定メタル期間ヲ伸長シ又ハ之ヲ短縮スルコトヲ得但シ不變期間ハ此ノ限ニ在ラス

不變期間ニ付テハ裁判所ハ遠隔ノ地ニ住所又ハ居所ヲ有スル者ノ爲附加期間ヲ定ムルコトヲ得  
裁判長、受命判事又ハ受託判事ハ其ノ定メタル期間ヲ伸長シ又ハ之ヲ短縮スルコトヲ得

第五十九條 當事者カ其ノ責ニ歸スヘカラサル事由ニ因リ不變期間ヲ遵守スルコト能ハサリシ場合ニ於テハ其ノ事由ノ止ミタル後一週内ニ限り懈怠シタル訴訟行爲ノ追完ヲ爲スコトヲ得  
此ノ期間ニ付テハ前條ノ規定ヲ適用セス

第三節 送達

第六十條 送達ハ別段ノ規定アル場合ヲ除クノ外職權ヲ以テ之ヲ爲ス

第六十一條 送達ニ關スル事務ハ裁判所書記之ヲ取扱フ

前項ノ事務ノ取扱ハ送達地ノ區裁判所ノ書記ニ之ヲ囑託スルコトヲ得



第六十二條 送達ハ執達吏又ハ郵便ニ依リ之ヲ爲ス

郵便ニ依ル送達ニ在リテハ郵便集配人ヲ以テ送達ヲ爲ス吏員トス

第六十三條 當該事件ニ付頭シタル者ニ對シテハ裁判所書記自ラ送達ヲ爲スコトヲ得

第六十四條 送達ハ別段ノ規定アル場合ヲ除クノ外送達ヲ受クヘキ者ニ送達スヘキ書類ノ謄本ヲ交付シテ之ヲ爲ス

送達スヘキ書類ノ提出ニ代ヘ調書ヲ作リタルトキハ其ノ調書ノ謄本又ハ抄本ヲ交付シテ送達ヲ爲ス

第六十五條 訴訟無能力者ニ對スル送達ハ其ノ法定代理人ニ之ヲ爲ス

第六十六條 數人カ共同シテ代理權ヲ行フヘキ場合ニ於テハ送達ハ其ノ一人ニ之ヲ爲スヲ以テ足ル

第六十七條 軍用ノ廳舎又ハ艦船ニ屬スル者ニ對スル送達ハ其ノ廳舎又ハ艦船ノ長ニ之ヲ爲ス

第六十八條 在監者ニ對スル送達ハ監獄ノ長ニ之ヲ爲ス

第六十九條 送達ハ之ヲ受クヘキ者ノ住所、居所、營業所又ハ事務所ニ於テ之ヲ爲ス但シ法定代理人ニ對スル送達ハ本人ノ營業所又ハ事務所ニ於テモ之ヲ爲スコトヲ得

送達ヲ受クヘキ者カ日本ニ住所、居所、營業所又ハ事務所ヲ有スルコト明ナラサルトキハ送達ハ其ノ者ニ出會ヒタル場所ニ於テ之ヲ爲スコトヲ得住所、居所、營業所又ハ事務所ヲ有スル者カ送達ヲ受クルコトヲ拒マサルトキ亦同シ

第七十條 當事者、法定代理人又ハ訴訟代理人ハ訴訟ノ繫屬スル裁判所ノ所在地ニ於テ送達ヲ受クヘキ場所及送達受取人ヲ定メ之ヲ届出ツルコトヲ得

裁判所ノ所在地ニ住所、居所、營業所又ハ事務所ヲ有スルコト明ナラサル場合ニ於テ送達ヲ受クヘキ者カ前項ノ届出ヲ爲ササルトキハ其ノ者ニ對シテ送達スヘキ書類ハ前條第一項ノ規定ニ依リ送達スヘキ場所ニ宛テ郵便ニ付シテ之ヲ送達スルコトヲ得

第七十一條 送達ヲ爲スヘキ場所ニ於テ送達ヲ受クヘキ者ニ出會ハサルトキハ事務員、雇人又ハ同居者ニシテ事理ヲ辨識スルニ足ルヘキ知能ヲ具フル者ニ書類ヲ交付スルコトヲ得  
前項ニ掲クル者其ノ他書類ノ交付ヲ受クヘキ者カ正當ノ事由ナクシテ之ヲ受クルコトヲ拒ミタルトキハ送達ヲ爲スヘキ場所ニ書類ヲ差置クコトヲ得

七十二條 前條ノ規定ニ依リテ送達ヲ爲スコト能ハサル場合ニ於テハ裁判所書記書類ヲ郵便ニ付シテ之ヲ發送スルコトヲ得

第七十三條 第七十條第二項又ハ前條ノ規定ニ依リテ書類ヲ郵便ニ付シテ發送シタル場合ニ



於テハ其ノ發送ノ時ニ於テ送達アリタルモノト看做ス

第一百七十四條 日曜日其ノ他ノ一般ノ休日又ハ日出前日没後ニ於テ執達吏ニ依ル送達ヲ爲スニハ裁判長ノ許可アルコトヲ要ス

前項ノ許可アリタルトキハ裁判所書記ハ送達スヘキ書類ニ其ノ旨ヲ附記スルコトヲ要ス

前二項ノ規定ニ違背スル送達ハ書類ノ交付ヲ受クヘキ者カ之ヲ受取リタル場合ニ限り其ノ效力ヲ有ス

第一百七十五條 外國ニ於テ爲スヘキ送達ハ裁判長其ノ國ノ管轄官廳又ハ其ノ國ニ駐在スル日本ノ大使、公使若ハ領事ニ囑託シテ之ヲ爲ス

第一百七十六條 出陣ノ軍隊若ハ外國駐在ノ軍隊ニ屬スル者又ハ役務ニ服スル艦船ノ乗組員ニ對スル送達ハ裁判長上班司令官廳ニ囑託シテ之ヲ爲ス

前項ノ送達ニ付テハ第六十七條ノ規定ヲ準用ス

第一百七十七條 送達ヲ爲シタル吏員ハ書面ヲ作り送達ニ關スル事項ヲ記載シ之ヲ裁判所ニ提出スルコトヲ要ス

第一百七十八條 當事者ノ住所、居所其ノ他送達ヲ爲スヘキ場所カ知レサル場合又ハ外國ニ於テ爲スヘキ送達ニ付第一百七十五條ノ規定ニ依ルコト能ハス若ハ之ニ依ルモ其ノ效ナシト認ムヘキ場

合ニ於テハ申立ニ因リ裁判長ノ許可ヲ得テ公示送達ヲ爲スコトヲ得

同一ノ當事者ニ對スル爾後ノ公示送達ハ職權ヲ以テ之ヲ爲ス

第一百七十九條 公示送達ハ裁判所書記送達スヘキ書類ヲ保管シ何時ニテモ送達ヲ受クヘキ者ニ交付スヘキ旨ヲ裁判所ノ揭示場ニ揭示シテ之ヲ爲ス但シ呼出狀ノ送達ハ呼出狀ヲ揭示場ニ貼附シテ之ヲ爲ス

裁判所ハ公示送達アリタルコトヲ官報又ハ新聞紙ニ掲載スヘキコトヲ命スルコトヲ得但シ外國ニ於テ爲スヘキ送達ニ付テハ公示送達アリタルコトヲ郵便ニ付シテ通知スルコトヲ得

第一百八十條 公示送達ハ前條第一項ノ規定ニ依ル揭示ヲ始メ又ハ貼附ヲ爲シタル日ヨリ二週間ヲ經過スルニ因リテ其ノ效力ヲ生ス但シ第一百七十八條第二項ノ公示送達ハ揭示ヲ始メ又ハ貼附ヲ爲シタル日ノ翌日ニ於テ其ノ效力ヲ生ス

前項ノ期間ハ之ヲ短縮スルコトヲ得ス

第一百八十一條 送達ニ關スル裁判長ノ權限ハ受命判事、受託判事及送達地ノ區裁判所ノ判事亦之ヲ有ス

#### 第四節 裁判

第一百八十二條 訴訟カ裁判ヲ爲スニ熟スルトキハ裁判所ハ終局判決ヲ爲ス



第八十三條 訴訟ノ一部カ裁判ヲ爲スニ熟スルトキハ裁判所ハ其ノ一部ニ付終局判決ヲ爲スコトヲ得

前項ノ規定ハ口頭辯論ノ併合ヲ命シタル數個ノ訴訟中其ノ一カ裁判ヲ爲スニ熟スル場合及本訴又ハ反訴カ裁判ヲ爲スニ熟スル場合ニ之ヲ準用ス

第八十四條 獨立シタル攻撃又ハ防禦ノ方法其ノ他中間ノ争ニ付裁判ヲ爲スニ熟スルトキハ裁判所ハ中間判決ヲ爲スコトヲ得請求ノ原因及數額ニ付争アル場合ニ於テ其ノ原因ニ付亦同シ

第八十五條 裁判所ハ判決ヲ爲スニ當リ其ノ爲シタル口頭辯論ノ全趣旨及證據調ノ結果ヲ斟酌シ自由ナル心證ニ依リ事實上ノ主張ヲ眞實ト認ムヘキカ否ヲ判斷ス

第八十六條 裁判所ハ當事者ノ申立テタル事項ニ付判決ヲ爲スコトヲ得ス

第八十七條 判決ハ其ノ基本タル口頭辯論ニ關與シタル判事之ヲ爲ス

判事ノ更迭アル場合ニ於テハ當事者ハ従前ノ口頭辯論ノ結果ヲ陳述スルコトヲ要ス

第八十八條 判決ハ言渡ニ因リテ其ノ效力ヲ生ス

第八十九條 判決ノ言渡ハ裁判長主文ヲ朗讀シテ之ヲ爲ス

裁判長ハ相當ト認ムルトキハ判決ノ理由ヲ朗讀シ又ハ口頭ヲ以テ其ノ要領ヲ告クルコトヲ得

第九十條 判決ノ言渡ハ口頭辯論終結ノ日ヨリ一週間内ニ之ヲ爲ス

判決ノ言渡ハ當事者カ在廷セサル場合ニ於テモ之ヲ爲スコトヲ得

第九十一條 判決ニハ左ノ事項ヲ記載シ判決ヲ爲シタル判事之ニ署名捺印スルコトヲ要ス

一 主文

二 事實及争點

三 理由

四 當事者及法定代理人

五 裁判所

事實及争點ノ記載ハ口頭辯論ニ於ケル當事者ノ陳述ニ基キ要領ヲ摘示シテ之ヲ爲スコトヲ要ス

判事判決ニ署名捺印スルニ支障アルトキハ他ノ判事判決ニ其ノ事由ヲ記載シテ署名捺印スルコトヲ要ス

第九十二條 判決ハ言渡ノ日ヨリ一週間内ニ之ヲ裁判所書記ニ交付シ書記ハ言渡及交付ノ日ヲ

附記シ之ニ捺印スルコトヲ要ス

第九十三條 判決ハ當事者ニ之ヲ送達スルコトヲ要ス

判決ノ送達ハ正本ヲ以テ之ヲ爲ス



第九十四條 判決ニ違算、書損其ノ他之ニ類スル明白ナル誤謬アルトキハ裁判所ハ何時ニテモ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ更正決定ヲ爲スコトヲ得但シ判決ノ主文又ハ理由ニ影響ヲ及ホスヘキ場合ニ限ル

更正決定ハ判決ノ原本及正本ニ之ヲ附記スルコトヲ要ス但シ正本ニ附記スルコト能ハサルトキハ決定ノ正本ヲ作り之ヲ當事者ニ送達スルコトヲ要ス

更正決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得但シ判決ニ對シ適法ノ控訴アリタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第九十五條 裁判所カ請求ノ一部ニ付裁判ヲ脱漏シタルトキハ訴訟ハ其ノ請求ノ部分ニ付仍裁判所ニ繫屬ス

訴訟費用ノ裁判ヲ脱漏シタル場合ニ於テハ裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其ノ訴訟費用ニ付裁判ヲ爲ス此ノ場合ニ於テハ第四百四條ノ規定ヲ準用ス

前項ノ規定ニ依ル訴訟費用ノ裁判ハ本案判決ニ對シ適法ノ控訴アリタルトキハ其ノ效力ヲ失フ此ノ場合ニ於テハ控訴裁判所ハ訴訟ノ總費用ニ付裁判ヲ爲ス

第九十六條 財産權上ノ請求ニ關スル判決ニ付テハ裁判所ハ必要アリト認ムルトキハ職權ヲ以テ擔保ヲ供シ又ハ供セスシテ假執行ヲ爲スコトヲ得ヘキコトヲ宣言スルコトヲ得

裁判所ハ職權ヲ以テ擔保ヲ供シテ假執行ヲ免ルルコトヲ得ヘキコトヲ宣言スルコトヲ得

前二項ノ宣言ハ判決主文ニ之ヲ掲タルコトヲ要ス

第九十七條 第一百二條、第一百三條、第一百五條及第一百六條ノ規定ハ前條ノ擔保ニ之ヲ準用ス

第九十八條 假執行ノ宣言ハ其ノ宣言又ハ本案判決ヲ變更スル判決ノ言渡ニ因リ變更ノ限度ニ於テ其ノ效力ヲ失フ

本案判決ヲ變更スル場合ニ於テハ裁判所ハ被告ノ申立ニ因リ其ノ判決ニ於テ假執行ノ宣言ニ基キ被告カ給付シタルモノノ返還及假執行ニ因リ又ハ之ヲ免ルル爲被告ノ受ケタル損害ノ賠償ヲ原告ニ命スルコトヲ要ス

假執行ノ宣言ノミヲ變更シタルトキハ後ニ本案判決ヲ變更スル判決ニ付前項ノ規定ヲ適用ス

第九十九條 確定判決ハ主文ニ包含スルモノニ限り既判力ヲ有ス  
相殺ノ爲主張シタル請求ノ成立又ハ不成立ノ判斷ハ相殺ヲ以テ對抗シタル額ニ付既判力ヲ有ス

第二百條 外國裁判所ノ確定判決ハ左ノ條件ヲ具備スル場合ニ限り其ノ效力ヲ有ス

一 法令又ハ條約ニ於テ外國裁判所ノ裁判權ヲ否認セサルコト



二 敗訴ノ被告カ日本人ナル場合ニ於テ公示送達ニ依ラスシテ訴訟ノ開始ニ必要ナル呼出若ハ命令ノ送達ヲ受ケタルコト又ハ之ヲ受ケサルモ應訴シタルコト

三 外國裁判所ノ判決カ日本ニ於ケル公ノ秩序又ハ善良ノ風俗ニ反セサルコト

四 相互ノ保證アルコト

第二百一一條 確定判決ハ當事者、口頭辯論終結後ノ承繼人又ハ其ノ者ノ爲請求ノ目的物ヲ所持スル者ニ對シテ其ノ效力ヲ有ス

他人ノ爲原告又ハ被告ト爲リタル者ニ對スル確定判決ハ其ノ他人ニ對シテモ效力ヲ有ス

前二項ノ規定ハ假執行ノ宣言ニ之ヲ準用ス

第二百二條 不適法ナル訴ニシテ其ノ欠缺カ補正スルコト能ハサルモノナル場合ニ於テハ口頭辯論ヲ經スシテ判決ヲ以テ之ヲ却下スルコトヲ得

第二百三條 和解又ハ請求ノ拋棄若ハ認諾ヲ調査ニ記載シタルトキハ其ノ記載ハ確定判決ト同一ノ效力ヲ有ス

第二百四條 決定及命令ハ相當ト認ムル方法ヲ以テ之ヲ告知スルニ因リテ其ノ效力ヲ生ス

第二百五條 訴訟ノ指揮ニ關スル決定及命令ハ何時ニテモ之ヲ取消スコトヲ得

第二百六條 裁判所書記ノ處分ニ對スル異議ニ付テハ其ノ書記所屬ノ裁判所決定ヲ以テ裁判ヲ爲

ス

第二百七條 決定及命令ニハ其ノ性質ニ反セサル限り判決ニ關スル規定ヲ準用ス

第五節 訴訟手續ノ中斷及中止

第二百八條 當事者カ死亡シタルトキハ訴訟手續ハ中斷ス此ノ場合ニ於テハ相續人、相續財産管  
理人其ノ他法令ニ依リ訴訟ヲ續行スヘキ者ハ訴訟手續ヲ受繼クコトヲ要ス

相續人ハ相續ノ拋棄ヲ爲スコトヲ得ル間ハ訴訟手續ヲ受繼クコトヲ得ス

第二百九條 當事者タル法人カ合併ニ因リテ消滅シタルトキハ訴訟手續ハ中斷ス此ノ場合ニ於テ  
ハ合併ニ因リテ設立シタル法人又ハ合併後存續スル法人ハ訴訟手續ヲ受繼クコトヲ要ス

前項ノ規定ハ合併ヲ以テ相手方ニ對抗スルコトヲ得サル場合ニハ之ヲ適用セス

第二百十條 當事者カ訴訟能力ヲ失ヒタルトキ又ハ其ノ法定代理人カ死亡シ若ハ代理權ヲ失ヒタ  
ルトキハ訴訟手續ハ中斷ス此ノ場合ニ於テハ法定代理人又ハ訴訟能力ヲ有スルニ至リタル當事  
者ハ訴訟手續ヲ受繼クコトヲ要ス

第二百十一條 受託者ノ信託ノ任務終了シタルトキハ訴訟手續ハ中斷ス此ノ場合ニ於テハ新受託  
者訴訟手續ヲ受繼クコトヲ要ス

第二百十二條 一定ノ資格ヲ有スル者カ自己ノ名ヲ以テ他人ノ爲訴訟ノ當事者タル場合ニ於テ其



ノ資格ヲ喪失シタルトキハ訴訟手續ハ中斷ス此ノ場合ニ於テハ同一ノ資格ヲ有スル者訴訟手續ヲ受繼クコトヲ要ス當事者ノ死亡ニ因リ訴訟手續カ中斷シタル場合亦同シ

第四十七條ノ規定ニ依リテ原告又ハ被告ト爲ルヘキ者ヲ選定シタル訴訟ニ於テ其ノ選定セラレタル當事者ノ全員カ其ノ資格ヲ喪失シタルトキハ訴訟手續ハ中斷ス此ノ場合ニ於テハ選定ヲ爲シタル者ノ總員又ハ新ニ原告若ハ被告トシテ選定セラレタル者ハ訴訟手續ヲ受繼クコトヲ要ス  
第二百十三條 第二百八條第一項、第二百九條第一項及第二百十條乃至前條ノ規定ハ訴訟代理人アル間ハ之ヲ適用セス

第二百十四條 當事者カ破産ノ宣告ヲ受ケタルトキハ破産財團ニ關スル訴訟手續ハ中斷ス此ノ場合ニ於テ破産法ニ依ル受繼アル迄ニ破産手續ノ解止アリタルトキハ破産者ハ當然訴訟手續ヲ受繼ス

第二百十五條 破産法ニ依リテ破産財團ニ關スル訴訟手續ノ受繼アリタル後破産手續ノ解止アリタルトキハ訴訟手續ハ中斷ス此ノ場合ニ於テハ破産者ハ訴訟手續ヲ受繼クコトヲ要ス

第二百十六條 訴訟手續ノ受繼ハ相手方ニ於テモ亦之ヲ爲スコトヲ得

第二百十七條 訴訟手續受繼ノ申立アリタルトキハ裁判所ハ之ヲ相手方ニ通知スルコトヲ要ス

第二百十八條 訴訟手續受繼ノ申立ハ裁判所職權ヲ以テ之ヲ調査シ理由ナシト認メタルトキハ決

定ヲ以テ之ヲ却下スルコトヲ要ス

裁判ノ送達後中斷シタル訴訟手續ノ受繼ニ付テハ其ノ裁判ヲ爲シタル裁判所裁判ヲ爲スコトヲ要ス

第二百十九條 裁判所ハ當事者カ訴訟手續ノ受繼ヲ爲ササル場合ニ於テモ職權ヲ以テ其ノ續行ヲ命スルコトヲ得

第二百二十條 天災其ノ他ノ事故ニ因リテ裁判所カ職務ヲ行フコト能ハサルトキハ訴訟手續ハ其ノ事故ノ止ム迄中止ス

第二百二十一條 當事者カ不定期間ノ故障ニ因リ訴訟手續ヲ續行スルコト能ハサルトキハ裁判所ハ決定ヲ以テ其ノ中止ヲ命スルコトヲ得  
裁判所ハ前項ノ決定ヲ取消スコトヲ得

第二百二十二條 判決ノ言渡ハ訴訟手續ノ中斷中ト雖之ヲ爲スコトヲ得  
訴訟手續ノ中斷又ハ中止ハ期間ノ進行ヲ止メ訴訟手續ノ受繼ノ通知又ハ續行ノ時ヨリ更ニ全期間ノ進行ヲ始ム

第二編 第一審ノ訴訟手續

第一章 地方裁判所ノ訴訟手續



第一節 訴

第二百二十三條 訴ノ提起ハ訴狀ヲ裁判所ニ提出シテ之ヲ爲スコトヲ要ス

第二百二十四條 訴狀ニハ當事者、法定代理人並請求ノ趣旨及原因ヲ記載スルコトヲ要ス  
準備書面ニ關スル規定ハ訴狀ニ之ヲ準用ス

第二百二十五條 確認ノ訴ハ法律關係ヲ證スル書面ノ眞否ヲ確定スル爲ニモ之ヲ提起スルコトヲ得

第二百二十六條 將來ノ給付ヲ求ムル訴ハ豫メ其ノ請求ヲ爲ス必要アル場合ニ限り之ヲ提起スルコトヲ得

第二百二十七條 數個ノ請求ハ同種ノ訴訟手續ニ依ル場合ニ限り一ノ訴ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第二百二十八條 訴狀カ第二百二十四條第一項ノ規定ニ違背スル場合ニ於テハ裁判長ハ相當ノ期間ヲ定メ其ノ期間内ニ欠缺ヲ補正スヘキコトヲ命スルコトヲ要ス法律ノ規定ニ從ヒ訴狀ニ印紙ヲ貼用セサル場合亦同シ

原告カ欠缺ノ補正ヲ爲ササルトキハ裁判長ハ命令ヲ以テ訴狀ヲ却下スルコトヲ要ス  
前項ノ命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

抗告狀ニハ却下セラレタル訴狀ヲ添附スルコトヲ要ス

第二百二十九條 訴狀ハ之ヲ被告ニ送達スルコトヲ要ス

前條ノ規定ハ訴狀ノ送達ヲ爲スコト能ハサル場合ニ之ヲ準用ス

第二百三十條 訴ノ提起アリタルトキハ裁判長ハ口頭辯論ノ期日ヲ定メ當事者ヲ呼出スコトヲ要ス

第二百三十一條 裁判所ニ繫屬スル事件ニ付テハ當事者ハ更ニ訴ヲ提起スルコトヲ得ス

第二百三十二條 原告ハ請求ノ基礎ニ變更ナキ限リ口頭辯論ノ終結ニ至ル迄請求又ハ請求ノ原因ヲ變更スルコトヲ得但シ之ニ因リ著ク訴訟手續ヲ遲滯セシムヘキ場合ハ此ノ限ニ在ラス

請求ノ變更ハ書面ニ依リテ之ヲ爲スコトヲ要ス  
前項ノ書面ハ之ヲ相手方ニ送達スルコトヲ要ス

第二百三十三條 裁判所カ請求又ハ請求ノ原因ノ變更ヲ不當ナリト認ムルトキハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其ノ變更ヲ許ササル旨ノ決定ヲ爲スコトヲ要ス

第二百三十四條 裁判カ訴訟ノ進行中ニ争ト爲リタル法律關係ノ成立又ハ不成立ニ繫ルトキハ當事者ハ請求ヲ擴張シテ其ノ法律關係ノ確認ノ判決ヲ求ムルコトヲ得但シ其ノ確認ノ請求カ他ノ裁判所ノ管轄ニ專屬セサルトキニ限ル

前項ノ規定ニ依ル請求ノ擴張ハ書面ニ依リテ之ヲ爲スコトヲ要ス



前項ノ書面ハ之ヲ相手方ニ送達スルコトヲ要ス

第二百三十五條 時効ノ中斷又ハ法律上ノ期間遵守ノ爲必要ナル裁判上ノ請求ハ訴ヲ提起シタル時又ハ第二百三十二條第二項若ハ前條第二項ノ規定ニ依リ書面ヲ裁判所ニ提出シタル時ニ於テ其ノ效力ヲ生ス

第二百三十六條 訴ハ判決ノ確定ニ至ル迄其ノ全部又ハ一部ヲ取下クルコトヲ得但シ相手方カ本案ニ付準備書面ヲ提出シ、準備手續ニ於テ申述ヲ爲シ又ハ口頭辯論ヲ爲シタルトキハ訴ノ取下ニ付其ノ同意アルコトヲ要ス

訴ノ取下ハ書面ニ依リテ之ヲ爲スコトヲ要ス但シ口頭辯論ニ於テ又ハ準備手續中受命判事ノ面前ニ於テ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ妨ケス

訴狀送達ノ後ニ在リテハ取下ノ書面ハ之ヲ相手方ニ送達スルコトヲ要ス

第二百三十七條 訴訟ハ訴ノ取下アリタル部分ニ付テハ初ヨリ繫屬ナカリシモノト看做ス

本案ニ付終局判決アリタル後訴ヲ取下ケタル者ハ同一ノ訴ヲ提起スルコトヲ得ス

第二百三十八條 當事者雙方カ口頭辯論ノ期日ニ出頭セス又ハ辯論ヲ爲サスシテ退廷シタル場合

ニ於テ六月内ニ期日指定ノ申立ヲ爲ササルトキハ訴ノ取下アリタルモノト看做ス

第二百三十九條 被告ハ口頭辯論ノ終結ニ至ル迄本訴ノ繫屬スル裁判所ニ反訴ヲ提起スルコトヲ

得但シ其ノ目的タル請求カ他ノ裁判所ノ管轄ニ專屬セサルトキ及本訴ノ目的タル請求又ハ防禦ノ方法ト牽連スルトキニ限ル

第二百四十條 反訴ニ付テハ本訴ニ關スル規定ニ依ル

第二百四十一條 本訴ノ取下アリタルトキハ被告ハ原告ノ同意ヲ得スシテ反訴ヲ取下クルコトヲ得

### 第二節 辯論ノ準備

第二百四十二條 口頭辯論ハ書面ヲ以テ之ヲ準備スルコトヲ要ス

第二百四十三條 準備書面ハ之ニ記載シタル事項ニ付相手方カ準備ヲ爲スニ必要ナル期間ヲ存シ之ヲ裁判所ニ提出シ裁判所ハ之ヲ相手方ニ送達スルコトヲ要ス

裁判長ハ準備書面ヲ提出スヘキ期間ヲ定ムルコトヲ得

第二百四十四條 準備書面ニハ左ノ事項ヲ記載シ當事者又ハ代理人之ニ署名捺印スルコトヲ要ス

一 當事者ノ氏名、名稱又ハ商號、職業及住所

二 代理人ノ氏名、職業及住所

三 事件ノ表示

四 攻撃又ハ防禦ノ方法



- 五 相手方ノ請求及攻撃又ハ防禦ノ方法ニ對スル陳述
- 六 附屬書類ノ表示
- 七 年月日
- 八 裁判所ノ表示

第二百四十五條 當事者ノ所持スル文書ニシテ準備書面ニ引用シタルモノハ準備書面ノ各通ニ其ノ謄本ヲ添附スルコトヲ要ス

文書ノ一部ノミヲ必要トスルトキハ其ノ抄本ヲ添附シ文書カ大部ナルトキハ其ノ文書ヲ表示スルヲ以テ足ル

第二百四十六條 前條ノ文書ハ相手方ノ求ニ因リ其ノ原本ヲ閲覽セシムルコトヲ要ス

第二百四十七條 準備書面ニ記載セサル事實ハ相手方カ在廷セサルトキハ口頭辯論ニ於テ之ヲ主張スルコトヲ得ス

第二百四十八條 外國語ヲ以テ作りタル文書ニハ其ノ譯文ヲ添附スルコトヲ要ス

第二百四十九條 訴訟ニ付テハ受命判事ニ依リ口頭辯論ノ準備手續ヲ爲スコトヲ要ス但シ裁判所相當ト認ムルトキハ直ニ辯論ヲ命シ又ハ訴訟ノ一部若ハ或爭點ノミニ付準備手續ヲ命スルコトヲ得

第二百五十條 準備手續ニ於テハ調書ヲ作り當事者ノ陳述ニ基キ第二百四十四條第四號及第五號

ニ掲クル事項ヲ記載シ殊ニ證據ニ付テハ其ノ申出ヲ明確ニスルコトヲ要ス

受命判事相當ト認ムルトキハ準備書面ヲ以テ前項ノ陳述及調書ニ代フルコトヲ得

第二百五十一條 當事者ノ一方カ期日ニ出頭セサルトキハ前條ノ調書ノ謄本ヲ之ニ送達シ新期日ヲ定メ當事者雙方ヲ呼出スコトヲ得

第二百五十二條 受命判事ハ當事者ヲシテ準備書面ヲ提出セシムルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ第二百四十三條ノ規定ヲ準用ス

第二百五十三條 當事者カ期日ニ出頭セス又ハ前條ノ規定ニ依リ受命判事ノ定メタル期間内ニ準備書面ヲ提出セサルトキハ受命判事ハ準備手續ヲ終結スルコトヲ得

第二百五十四條 當事者ハ口頭辯論ニ於テ準備手續ノ結果ヲ陳述スルコトヲ要ス

第二百五十五條 調書又ハ之ニ代ルヘキ準備書面ニ記載セサル事項ハ口頭辯論ニ於テ之ヲ主張スルコトヲ得ス但シ其ノ事項カ裁判所職權ヲ以テ調査スヘキモノナルトキ、著ク訴訟ヲ遲滯セシメサルトキ又ハ重大ナル過失ナクシテ準備手續ニ於テ之ヲ提出スルコト能ハサリシコトヲ疏明シタルトキハ此ノ限ニ在ラス

前項但書ノ規定ハ第二百四十七條ノ規定ノ適用ヲ妨ケス



訴狀又ハ準備手續前ニ提出シタル準備書面ニ記載シタル事項ハ調書又ハ之ニ代ルヘキ準備書面ニ記載セサルモノト雖口頭辯論ニ於テ之ヲ主張スルコトヲ妨ケス

第二百五十六條 第二百二十六條乃至第二百二十九條、第三百一十一條、第三百三十三條乃至第四百一十一條及第二百三十八條ノ規定ハ準備手續ニ之ヲ準用ス

第三節 證據

第一款 總則

第二百五十七條 裁判所ニ於テ當事者カ自白シタル事實及顯著ナル事實ハ之ヲ證スルコトヲ要セス

第二百五十八條 證據ノ申出ハ證スヘキ事實ヲ表示シテ之ヲ爲スコトヲ要ス

證據ノ申出ハ期日前ニ於テモ之ヲ爲スコトヲ得

第二百五十九條 當事者ノ申出テタル證據ニシテ裁判所ニ於テ不必要ト認ムルモノハ之ヲ取調フルコトヲ要セス

第二百六十條 證據調ニ付不定期間ノ障碍アルトキハ裁判所ハ證據調ヲ爲ササルコトヲ得

第二百六十一條 裁判所ハ當事者ノ申出テタル證據ニ依リテ心證ヲ得ルコト能ハサルトキ其ノ他必要アリト認ムルトキハ職權ヲ以テ證據調ヲ爲スコトヲ得

第二百六十二條 裁判所ハ必要ナル調査ヲ官廳若ハ公署、外國ノ官廳若ハ公署又ハ法人ニ囑託スルコトヲ得

第二百六十三條 證據調ハ當事者カ期日ニ出頭セサル場合ニ於テモ之ヲ爲スコトヲ得

第二百六十四條 外國ニ於テ爲スヘキ證據調ハ其ノ國ノ管轄官廳又ハ其ノ國ニ駐在スル日本ノ大使、公使若ハ領事ニ之ヲ囑託シテ爲スコトヲ要ス

外國ニ於テ爲シタル證據調ハ其ノ國ノ法律ニ違背スルモ本法ニ違背セサルトキハ其ノ效力ヲ有ス

第二百六十五條 裁判所ハ相當ト認ムルトキハ裁判所外ニ於テ證據調ヲ爲スコトヲ得此ノ場合ニ於テハ部員ニ命シ又ハ區裁判所ニ囑託シテ證據調ヲ爲サシムルコトヲ得

受託判事カ他ノ區裁判所ニ於テ證據調ヲ爲スコトヲ相當ト認ムルトキハ更ニ證據調ノ囑託ヲ爲スコトヲ得此ノ場合ニ於テハ其ノ旨ヲ受託裁判所及當事者ニ通知スルコトヲ要ス

第二百六十六條 受託判事ハ證據調ニ關スル記録ヲ受託裁判所ニ送付スルコトヲ要ス

第二百六十七條 疏明ハ即時ニ取調フルコトヲ得ヘキ證據ニ依リテ之ヲ爲スコトヲ要ス

裁判所ハ當事者若ハ法定代理人ヲシテ保證金ヲ供託セシメ又ハ其ノ主張ノ眞實ナルコトヲ宣誓セシメ之ヲ以テ疏明ニ代フルコトヲ得



第二百八十六條乃至第二百八十九條ノ規定ハ前項ノ宣誓ニ之ヲ準用ス

第二百六十八條 前條第二項ノ規定ニ依リテ保證金ノ供託ヲ爲シタル當事者又ハ法定代理人カ虛偽ノ申述ヲ爲シタルトキハ裁判所決定ヲ以テ保證金ヲ沒取ス

第二百六十九條 第二百六十七條第二項ノ規定ニ依リテ宣誓ヲ爲シタル當事者又ハ法定代理人カ虛偽ノ申述ヲ爲シタルトキハ宣誓ヲ爲サシメタル裁判所決定ヲ以テ千圓以下ノ過料ニ處ス  
第二百七十條 第二百六十八條及前條ノ決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第二款 證人訊問

第二百七十一條 裁判所ハ別段ノ規定アル場合ヲ除クノ外何人ト雖證人トシテ之ヲ訊問スルコトヲ得

第二百七十二條 官吏又ハ官吏タリシ者ヲ證人トシテ職務上ノ祕密ニ付訊問スル場合ニ於テハ裁判所ハ當該監督官廳ノ承認ヲ得ルコトヲ要ス  
前項ノ規定ハ他ノ公務員ニ付之ヲ準用ス

第二百七十三條 國務大臣、宮内大臣、內大臣、樞密院議長、樞密院副議長、樞密顧問官、會計検査院長、元帥、參謀總長、海軍軍令部長、教育總監若ハ軍事參議官又ハ此等ノ職ニ在リタル者ヲ證人トシテ職務上ノ祕密ニ付訊問スル場合ニ於テハ裁判所ハ勅許ヲ得ルコトヲ要ス

第二百七十四條 貴族院若ハ衆議院ノ議員又ハ議員タリシ者ヲ證人トシテ職務上ノ祕密ニ付訊問スル場合ニ於テハ裁判所ハ其ノ院ノ承認ヲ得ルコトヲ要ス

第二百七十五條 證人訊問ノ申出ハ證人ヲ指定シテ之ヲ爲スコトヲ要ス

第二百七十六條 證人ノ呼出狀ニハ左ノ事項ヲ記載スルコトヲ要ス

一 當事者ノ表示

二 訊問事項ノ要領

三 出頭セサル場合ニ於ケル法律上ノ制裁

第二百七十七條 證人カ正當ノ事由ナクシテ出頭セサルトキハ裁判所ハ決定ヲ以テ之ニ因リテ生シタル訴訟費用ノ負擔ヲ命シ且五百圓以下ノ過料ニ處ス此ノ決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第二百七十八條 裁判所ハ正當ノ事由ナクシテ出頭セサル證人ノ勾引ヲ命スルコトヲ得  
前項ノ勾引ニハ刑事訴訟法中勾引ニ關スル規定ヲ準用ス

第二百七十九條 左ノ場合ニ於テハ受命判事又ハ受託判事ヲシテ證人ノ訊問ヲ爲サシムルコトヲ得

一 證人カ受訴裁判所ニ出頭スル義務ナキトキ又ハ正當ノ事由ニ因リ出頭スルコト能ハサルト



二 證人カ受訴裁判所ニ出頭スルニ付不相當ノ費用又ハ時間ヲ要スルトキ

第二百八十條 證言カ證人又ハ左ニ掲クル者ノ刑事上ノ訴追又ハ處罰ヲ招ク虞アル事項ニ關スル

トキハ證人ハ證言ヲ拒ムコトヲ得證言カ此等ノ者ノ恥辱ニ歸スヘキ事項ニ關スルトキ亦同シ

一 證人ノ配偶者、四親等内ノ血族若ハ三親等内ノ姻族又ハ證人ノ家ノ戸主但シ親族ニ付テハ親族關係カ止ミタル後亦同シ

二 證人ノ後見人又ハ證人ノ後見ヲ受クル者

三 證人カ主人トシテ仕フル者

第二百八十一條 左ノ場合ニ於テハ證人ハ證言ヲ拒ムコトヲ得

一 第二百七十二條乃至第二百七十四條ノ場合

二 醫師、齒科醫師、藥劑師、藥種商、産婆、辯護士、辨理士、辯護人、公證人、宗教又ハ禱祀ノ職ニ在ル者又ハ此等ノ職ニ在リタル者カ職務上知リタル事實ニシテ默秘スヘキモノニ付訊問ヲ受クルトキ

三 技術又ハ職業ノ秘密ニ關スル事項ニ付訊問ヲ受クルトキ  
前項ノ規定ハ證人カ默秘ノ義務ヲ免セラレタル場合ニハ之ヲ適用セス

第二百八十二條 證言拒絶ノ理由ハ之ヲ疏明スルコトヲ要ス

第二百八十三條 第二百八十一條第一項第一號ノ場合ヲ除ク外證言拒絶ノ當否ニ付テハ受訴裁判所當事者ヲ審訊シテ裁判ヲ爲ス

證言拒絶ニ關スル裁判ニ對シテハ當事者及證人ハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第二百八十四條 證言拒絶ヲ理由ナシトスル裁判確定シタル後證人カ故ナク證言ヲ拒ムトキハ第二百七十七條第一項ノ規定ヲ準用ス

第二百八十五條 裁判長ハ證人ヲシテ訊問前宣誓ヲ爲サシムルコトヲ要ス但シ特別ノ事由アルトキハ訊問後之ヲ爲サシムルコトヲ要ス

第二百八十六條 宣誓ハ起立シテ嚴肅ニ之ヲ行フコトヲ要ス

第二百八十七條 裁判長ハ宣誓前宣誓ノ趣旨ヲ諭示シ且僞證ノ罰ヲ警告スルコトヲ要ス

第二百八十八條 宣誓ハ證人ヲシテ宣誓書ヲ朗讀セシメ且之ニ署名捺印セシメテ之ヲ爲ス證人宣誓書ヲ朗讀スルコト能ハサルトキハ裁判長代リテ之ヲ朗讀ス

宣誓書ニハ良心ニ從ヒ眞實ヲ述ヘ何事ヲモ默秘セス又何事ヲモ附加セサルコトヲ誓フ旨ヲ記載スルコトヲ要ス

第二百八十九條 左ニ掲クル者ヲ證人トシテ訊問スルニハ宣誓ヲ爲サシムルコトヲ得ス



一 十六年未滿ノ者

二 宣誓ノ趣旨ヲ理解スルコト能ハサル者

第二百九十條 第二百八十條ノ規定ニ該當スル證人ニシテ證言拒絶ノ權利ヲ行ハサル者ヲ訊問スルニハ宣誓ヲ爲サシメサルコトヲ得

第二百九十一條 證人カ自己又ハ第二百八十條ニ掲クル者ニ著キ利害關係アル事項ニ付訊問ヲ受クルトキハ宣誓ヲ拒ムコトヲ得

第二百九十二條 宣誓ヲ爲サシメシテ證人ヲ訊問シタルトキハ其ノ旨及事由ヲ調書ニ記載スルコトヲ要ス

第二百九十三條 第二百七十七條第一項、第二百八十二條及第二百八十三條ノ規定ハ證人カ宣誓ヲ拒ム場合ニ之ヲ準用ス

第二百九十四條 裁判長ハ必要アリト認ムルトキハ證人相互ノ對質ヲ命スルコトヲ得

第二百九十五條 裁判長ハ必要アリト認ムルトキハ證人ヲシテ文字ノ手記其ノ他必要ナル行爲ヲ爲サシムルコトヲ得

第二百九十六條 裁判長ハ必要アリト認ムルトキハ後ニ訊問スヘキ證人ニ一時退廷ヲ命スルコトヲ得

第二百九十七條 證人ハ書類ニ依リテ陳述ヲ爲スコトヲ得ス但シ裁判長ノ許可ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第二百九十八條 陪席判事ハ裁判長ニ告ケ證人ニ對シテ問ヲ發スルコトヲ得

第二百九十九條 當事者ハ裁判長ニ對シ必要ナル發問ヲ求メ又ハ其ノ許可ヲ得テ問ヲ發スルコトヲ得

當事者ハ發問ノ許否ニ付異議ヲ述フルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ裁判所異議ニ付裁判ヲ爲ス

第三百條 受命判事又ハ受託判事カ證人訊問ヲ爲ス場合ニ於テハ裁判所及裁判長ノ職務ハ其ノ判事之ヲ行フ但シ前條第二項ノ規定ニ依ル異議ノ裁判ハ受訴裁判所之ヲ爲ス

### 第三款 鑑定

第三百一條 鑑定ニハ別段ノ規定アル場合ヲ除クノ外前款ノ規定ヲ準用ス

第三百二條 鑑定ニ必要ナル學識經驗アル者ハ鑑定ヲ爲ス義務ヲ負フ

第二百八十條又ハ第二百九十一條ノ規定ニ依リテ證言又ハ宣誓ヲ拒ミ得ル者ト同一ノ地位ニ在ル者及第二百八十九條ニ掲クル者ハ鑑定人タルコトヲ得ス

第三百三條 鑑定人ハ之ヲ勾引スルコトヲ得ス

第三百四條 鑑定人ハ受訴裁判所、受命判事又ハ受託判事之ヲ指定ス



第三百五條 鑑定人ニ付誠實ニ鑑定ヲナスコトヲ妨クヘキ事情アルトキハ當事者ハ其ノ鑑定人カ鑑定事項ニ付陳述ヲ爲ス前之ヲ忌避スルコトヲ得陳述ヲ爲シタルトキト雖其ノ後ニ忌避ノ原因ヲ生シ又ハ當事者カ其ノ原因アルコトヲ知リタルトキ亦同シ

第三百六條 忌避ノ申立ハ受訴裁判所受命判事又ハ受託判事ニ之ヲ爲スコトヲ要ス  
忌避ノ事由ハ之ヲ疏明スルコトヲ要ス

忌避ノ理由アリトスル決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス之ヲ理由ナシトスル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第三百七條 宣誓書ニハ良心ニ從ヒ誠實ニ鑑定ヲ爲スコトヲ誓フ旨ヲ記載スルコトヲ要ス

第三百八條 裁判長ハ鑑定人ヲシテ書面又ハ口頭ヲ以テ共同ニテ又ハ各別ニ意見ヲ述ヘシムルコトヲ得

第三百九條 特別ノ學識經驗ニ依リテ知り得タル事實ニ關スル訊問ニ付テハ證人訊問ニ關スル規定ニ依ル

第三百十條 裁判所必要アリト認ムルトキハ官廳若ハ公署、外國ノ官廳若ハ公署又ハ相當ノ設備アル法人ニ鑑定ヲ囑託スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ宣誓ニ關スル規定ヲ除クノ外本款ノ規定ヲ準用ス

前項ノ場合ニ於テ裁判所必要アリト認ムルトキハ官廳、公署又ハ法人ノ指定シタル者ヲシテ鑑定書ノ説明ヲ爲サシムルコトヲ得

第四款 書證

第三百十一條 書證ノ申出ハ文書ヲ提出シ又ハ之ヲ所持スル者ニ其ノ提出ヲ命セムコトヲ申立テ之ヲ爲スコトヲ要ス

第三百十二條 左ノ場合ニ於テハ文書ノ所持者ハ其ノ提出ヲ拒ムコトヲ得ス

- 一 當事者カ訴訟ニ於テ引用シタル文書ヲ自ラ所持スルトキ
- 二 舉證者カ文書ノ所持者ニ對シ其ノ引渡又ハ閱覽ヲ求ムルコトヲ得ルトキ
- 三 文書カ舉證者ノ利益ノ爲ニ作成セラレ又ハ舉證者ト文書ノ所持者トノ間ノ法律關係ニ付作成セラレタルトキ

第三百十三條 文書提出ノ申立ニハ左ノ事項ヲ明ニスルコトヲ要ス

- 一 文書ノ表示
- 二 文書ノ趣旨
- 三 文書ノ所持者
- 四 證スヘキ事實



五 文書提出ノ義務ノ原因

第三百十四條 裁判所カ文書提出ノ申立ヲ理由アリト認メタルトキハ決定ヲ以テ文書ノ所持者ニ對シ其ノ提出ヲ命ス

第三者ニ對シ文書ノ提出ヲ命スル場合ニ於テハ其ノ第三者ヲ審訊スルコトヲ要ス

第三百十五條 文書提出ノ申立ニ關スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第三百十六條 當事者カ文書提出ノ命ニ從ハサルトキハ裁判所ハ文書ニ關スル相手方ノ主張ヲ眞實ト認ムルコトヲ得

第三百十七條 當事者カ相手方ノ使用ヲ妨クル目的ヲ以テ提出ノ義務アル文書ヲ毀滅シ其ノ他之ヲ使用スルコト能ハサルニ至ラシメタルトキハ裁判所ハ其ノ文書ニ關スル相手方ノ主張ヲ眞實ト認ムルコトヲ得

第三百十八條 第三者カ文書提出ノ命ニ從ハサルトキハ裁判所ハ決定ヲ以テ五百圓以下ノ過料ニ處ス此ノ決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第三百十九條 書證ノ申立ハ第三百十一條ノ規定ニ拘ラス文書ノ所持者ニ其ノ文書ノ送付ヲ囑託セムコトヲ申立テ之ヲ爲スコトヲ得但シ當事者カ法令ニ依リテ文書ノ正本又ハ謄本ノ交付ヲ求ムルコトヲ得ル場合ハ此ノ限ニ在ラス

第三百二十條 裁判所ハ必要アリト認ムルトキハ提出又ハ送付ニ係ル文書ヲ留置クコトヲ得

第三百二十一條 第二百六十五條ノ規定ニ依リテ受命判事又ハ受託判事ヲシテ文書ニ付證據調ヲ爲サシムル場合ニ於テハ裁判所ハ受命判事又ハ受託判事ノ調書ニ記載スヘキ事項ヲ定ムルコトヲ得

前項ノ調書ニハ文書ノ謄本又ハ抄本ヲ添附スルコトヲ要ス

第三百二十二條 文書ノ提出又ハ送付ハ原本、正本又ハ認證アル謄本ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ要ス

裁判所ハ前項ノ規定ニ拘ラス原本ノ提出ヲ命シ又ハ送付ヲ爲サシムルコトヲ得

裁判所ハ當事者ヲシテ其ノ引用シタル文書ノ謄本又ハ抄本ヲ提出セシムルコトヲ得

第三百二十三條 文書ハ其ノ方式及趣旨ニ依リ官吏其ノ他ノ公務員カ職務上作成シタルモノト認ムヘキトキハ之ヲ眞正ナル公文書ト推定ス

公文書ノ眞否ニ付疑アルトキハ裁判所ハ職權ヲ以テ當該官廳又ハ公署ニ問合ヲ爲スコトヲ得

第三百二十四條 前條ノ規定ハ外國ノ官廳又ハ公署ノ作成ニ係ルモノト認ムヘキ文書ニ之ヲ準用ス

第三百二十五條 私文書ハ其ノ眞正ナルコトヲ證スルコトヲ要ス



第三百二十六條 私文書ハ本人又ハ其ノ代理人ノ署名又ハ捺印アルトキハ之ヲ真正ナルモノト推定ス

第三百二十七條 文書ノ真否ハ筆跡又ハ印影ノ對照ニ依リテモ之ヲ證スルコトヲ得

第三百二十八條 第三百十一條、第三百十四條乃至第三百十七條及第三百十九條乃至第三百二十一條ノ規定ハ對照ノ用ニ供スヘキ筆跡又ハ印影ヲ具フル文書其ノ他ノ物件ノ提出又ハ送付ニ之ヲ準用ス

第三者カ正當ノ事由ナクシテ前項ノ規定ニ依ル提出ノ命ニ從ハサルトキハ裁判所ハ決定ヲ以テ五百圓以下ノ過料ニ處ス此ノ決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第三百二十九條 對照ニ適當ナル筆跡ナキトキハ裁判所ハ對照ノ用ニ供スヘキ文字ノ手記ヲ相手方ニ命スルコトヲ得

相手方カ正當ノ事由ナクシテ前項ノ規定ニ依ル裁判所ノ命ニ從ハサルトキハ裁判所ハ文書ノ真否ニ關スル舉證者ノ主張ヲ眞實ト認ムルコトヲ得書様ヲ變シテ手記シタルトキ亦同シ

第三百三十條 對照ノ用ニ供シタル書類ノ原本、謄本又ハ抄本ハ之ヲ調書ニ添附スルコトヲ要ス

第三百三十一條 當事者又ハ其ノ代理人カ故意又ハ重大ナル過失ニ因リ眞實ニ反シテ文書ノ真正

ヲ爭ヒタルトキハ裁判所決定ヲ以テ五百圓以下ノ過料ニ處ス此ノ決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ文書ノ真正ヲ爭ヒタル當事者又ハ代理人カ訴訟繫屬中其ノ真正ナルコトヲ認メタルトキハ裁判所ハ事情ニ依リ前項ノ決定ヲ取消スコトヲ得

第三百三十二條 本款ノ規定ハ證據ノ爲作リタル物件ニシテ文書ニ非サルモノニ之ヲ準用ス

第五款 檢證

第三百三十三條 檢證ノ申出ハ檢證ノ目的ヲ表示シテ之ヲ爲スコトヲ要ス

第三百三十四條 受命判事又ハ受託判事ハ檢證ヲ爲スニ當リ必要アリト認ムルトキハ鑑定ヲ命スルコトヲ得

第三百三十五條 第三百十一條、第三百十四條乃至第三百十七條及第三百十九條乃至第三百二十一條ノ規定ハ檢證ノ目的ノ提示又ハ送付ニ之ヲ準用ス

第三者カ正當ノ事由ナクシテ前項ノ規定ニ依ル提示ノ命ニ從ハサルトキハ裁判所ハ決定ヲ以テ五百圓以下ノ過料ニ處ス此ノ決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第六款 當事者訊問

第三百三十六條 裁判所カ證據調ニ依リテ心證ヲ得ルコト能ハサルトキ其ノ他必要アリト認ムル



トキハ職權ヲ以テ當事者本人ヲ訊問スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ當事者ヲシテ宣誓ヲ爲サシムルコトヲ得

第三百三十七條 裁判長必要アリト認ムルトキハ當事者相互又ハ當事者ト證人トノ對質ヲ命スルコト得

第三百三十八條 當事者カ正當ノ事由ナクシテ呼出ニ應セス又ハ宣誓若ハ陳述ヲ拒ミタルトキハ裁判所ハ訊問事項ニ關スル相手方ノ主張ヲ眞實ト認ムルコトヲ得

第三百三十九條 宣誓シタル當事者カ虚偽ノ陳述ヲ爲シタルトキハ裁判所決定ヲ以テ千圓以下ノ過料ニ處ス此ノ決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第三百三十一條第二項ノ規定ハ前項ノ決定ニ之ヲ準用ス

第三百四十條 當事者ヲ訊問シタルトキハ其ノ陳述及宣誓ヲ爲サシメ又ハ爲サシメサルコトヲ調書ニ記載スルコトヲ要ス

第三百四十一條 第三百三十六條乃至前條ノ規定ハ訴訟ニ於テ當事者ヲ代表スル法定代理人ニ之ヲ準用ス但シ當事者本人ヲ訊問スルコトヲ妨ケス

第三百四十二條 第二百七十六條、第二百七十九條、第二百八十五條乃至第二百八十九條、第二百九十五條及第二百九十七條乃至第三百條ノ規定ハ本款ノ訊問ニ之ヲ準用ス

第七款 證據保全

第三百四十三條 裁判所ハ豫メ證據調ヲ爲スニ非サレハ其ノ證據ヲ使用スルニ困難ナル事情アリト認ムルトキハ申立ニ因リ本節ノ規定ニ從ヒ證據調ヲ爲スコトヲ得

第三百四十四條 證據保全ノ申立ハ訴訟ノ繫屬中ニ在リテハ其ノ證據ヲ使用スヘキ審級ノ裁判所ニ、其ノ提起前ニ在リテハ訊問ヲ受クヘキ者若ハ文書ヲ所持スル者ノ居所又ハ檢證物ノ所在地ヲ管轄スル區裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ要ス

急迫ナル場合ニ於テハ訴ノ提起後ト雖前項ノ區裁判所ニ證據保全ノ申立ヲ爲スコトヲ得

第三百四十五條 證據保全ノ申立ニハ左ノ事項ヲ明ニスルコトヲ要ス

一 相手方ノ表示

二 證スヘキ事實

三 證據

四 證據保全ノ事由

證據保全ノ事由ハ之ヲ疏明スルコトヲ要ス

第三百四十六條 證據保全ノ申立ハ相手方ヲ指定スルコト能ハサル場合ニ於テモ之ヲ爲スコトヲ得此ノ場合ニ於テハ裁判所ハ相手方ト爲ルヘキ者ノ爲ニ特別代理人ヲ選任スルコトヲ得



第三百四十七條 裁判所ハ必要アリト認ムルトキハ訴訟ノ繫屬中職權ヲ以テ證據保全ノ決定ヲ爲スコトヲ得

第三百四十八條 證據保全ノ決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第三百四十九條 證據調ノ期日ニハ申立人及相手方ヲ呼出スコトヲ要ス但シ急速ヲ要スル場合ハ此ノ限ニ在ラス

第三百五十條 證據保全ニ關スル記録ハ本訴訟ノ記録ノ存スル裁判所ニ之ヲ送付スルコトヲ要ス  
第三百五十一條 證據保全ニ關スル費用ハ訴訟費用ノ一部トス

第二章 區裁判所ノ訴訟手續

第三百五十二條 區裁判所ノ訴訟手續ニハ別段ノ規定アル場合ヲ除クノ外前章ノ規定ヲ準用ス

第三百五十三條 訴ハ口頭ヲ以テ之ヲ提起スルコトヲ得

第三百五十四條 當事者雙方ハ任意ニ裁判所ニ出頭シ訴訟ニ付口頭辯論ヲ爲スコトヲ得此ノ場合ニ於テハ訴ノ提起ハ口頭ノ陳述ニ依リテ之ヲ爲ス

第三百五十五條 被告カ反訴ヲ以テ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル請求ヲ爲シタル場合ニ於テ相手方ノ申立アルトキハ區裁判所ハ決定ヲ以テ本訴及反訴ヲ地方裁判所ニ移送スルコトヲ要ス此ノ場合ニ於テハ第三十二條及第三十四條ノ規定ヲ準用ス

移送ノ決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第三百五十六條 民事上ノ争ニ付テハ當事者ハ請求ノ趣旨及原因並争ノ實情ヲ表示シテ相手方ノ普通裁判籍所在地ノ區裁判所ニ和解ノ申立ヲ爲スコトヲ得

和解調ヒタルトキハ之ヲ調書ニ記載スルコトヲ要ス

和解調ハサル場合ニ於テ裁判所ハ和解ノ期日ニ出頭シタル當事者雙方ノ申立アルトキハ直ニ訴訟ノ辯論ヲ命ス此ノ場合ニ於テハ和解ノ申立ヲ爲シタル者ハ其ノ申立ヲ爲シタル時ニ於テ訴ヲ提起シタルモノト看做シ和解ノ費用ハ之ヲ訴訟費用ノ一部トス

申立人又ハ相手方カ和解ノ期日ニ出頭セサルトキハ裁判所ハ和解調ハサルモノト看做スコトヲ得

第三百五十七條 口頭辯論ハ書面ヲ以テ之ヲ準備スルコトヲ要セス

相手方カ準備ヲ爲スニ非サレハ陳述ヲ爲スコト能ハスト認ムヘキ事項ハ前項ノ規定ニ拘ラス書面ヲ以テ之ヲ準備スルコトヲ要ス此ノ場合ニ於テハ準備書面ノ提出ニ代ヘ口頭辯論前直接ニ相手方ニ其ノ事項ヲ通知スルコトヲ得

第二百四十七條ノ規定ハ前項ノ通知ヲ爲ササル場合ニ之ヲ準用ス

第三百五十八條 準備手續ニ關スル規定ハ區裁判所ノ訴訟手續ニ之ヲ適用セス



第三百五十九條 判決ニ事實及理由ヲ記載スルニハ請求ノ趣旨及原因ノ要旨、其ノ原因ノ有無並  
請求ヲ排斥スル理由タル抗辯ノ要旨ヲ表示スルヲ以テ足ル

第三編 上訴

第一章 控訴

第三百六十條 控訴ハ第一審ノ終局判決ニ對シテ之ヲ爲スコトヲ得但シ當事者雙方共ニ控訴ヲ爲  
ササル旨ノ合意ヲ爲シタルトキハ此ノ限ニ在ラス

前項ノ合意ハ上告ヲ爲ス權利ヲ留保シテ之ヲ爲スコトヲ得

第二十五條第二項ノ規定ハ第一項ノ合意ニ之ヲ準用ス

第三百六十一條 財産權上ノ請求ニ關スル判決ニ對シテハ控訴ニ因リテ受クヘキ利益ノ價額カ三  
百圓ニ滿タサル場合ニ於テハ再審ノ事由アルニ非サレハ控訴ヲ爲スコトヲ得ス

前項ノ規定ハ訴訟ノ目的ノ價額カ三百圓以上ナル事件ニ付裁判所カ訴訟ノ一部ニ付爲シタル判  
決ニハ之ヲ適用セス

第一項ノ價額ハ控訴提起ノ時ヲ標準トシテ之ヲ定ム

控訴審ニ於テ擴張シタル請求ノ價額ハ第一項ノ價額ニ之ヲ算入セス

第一項ノ價額ヲ算定スルコト能ハサルトキハ其ノ價額ハ三百圓ト看做ス第二十三條ノ規定ハ第

一項ノ價額ノ算定ニ之ヲ準用ス

第三百六十二條 訴訟費用ノ裁判ニ對シテハ獨立シテ控訴ヲ爲スコトヲ得ス

第三百六十三條 終局判決前ノ裁判ハ控訴裁判所ノ判斷ヲ受ク但シ不服ヲ申立ツルコトヲ得サル  
裁判及抗告ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得ル裁判ハ此ノ限ニ在ラス

第三百六十四條 控訴ハ控訴審ノ終局判決アル迄之ヲ取下クルコトヲ得

第二百三十六條第一項但書第二項第三項、第二百三十七條第一項及第二百三十八條ノ規定ハ控  
訴ノ取下ニ之ヲ準用ス

第三百六十五條 控訴ヲ爲ス權利ハ之ヲ拋棄スルコトヲ得

第三百六十六條 控訴權ノ拋棄ハ控訴提起前ニ在リテハ第一審裁判所、控訴提起後ニ在リテハ控  
訴裁判所ニ對スル申述ニ依リテ之ヲ爲スコトヲ要ス

控訴提起後ノ控訴權ノ拋棄ハ控訴ノ取下ト共ニ之ヲ爲スコトヲ要ス

控訴權拋棄ノ書面ハ之ヲ相手方ニ送達スルコトヲ要ス

第三百六十七條 控訴ハ判決ノ送達アリタル日ヨリ二週間内ニ之ヲ提起スルコトヲ要ス但シ其ノ  
期間前提起シタル控訴ノ效力ヲ妨ケス

前項ノ期間ハ之ヲ不變期間トス



第三百六十八條 控訴ノ提起ハ控訴狀ヲ第一審裁判所又ハ控訴裁判所ニ提出シテ之ヲ爲スコトヲ要ス

控訴狀ニハ左ノ事項ヲ記載スルコトヲ要ス

一 當事者及法定代理人

二 第一審判決ノ表示及其ノ判決ニ對シ控訴ヲ爲ス旨

第三百六十九條 準備書面ニ關スル規定ハ控訴狀ニ之ヲ準用ス

第三百七十條 第一審裁判所ニ控訴狀ノ提出アリタルトキハ裁判所書記ハ訴訟記録ニ控訴狀ヲ添

附シテ遲滯ナク之ヲ控訴裁判所ノ書記ニ送付スルコトヲ要ス

控訴裁判所ニ控訴狀ノ提出アリタルトキハ裁判所書記ハ遲滯ナク第一審裁判所ノ書記ニ訴訟記録ノ送付ヲ求ムルコトヲ要ス

第三百七十一條 第二百二十八條ノ規定ハ控訴狀カ第三百六十八條第二項ノ規定ニ反スル場合、

法律ノ規定ニ從ヒ控訴狀ニ印紙ヲ貼用セサル場合及控訴狀ノ送達ヲ爲スコト能ハサル場合ニ之ヲ準用ス

第三百七十二條 控訴狀ハ之ヲ被控訴人ニ送達スルコトヲ要ス

第三百七十三條 被控訴人ハ控訴權消滅ノ後ト雖口頭辯論ノ終結ニ至ル迄附帶控訴ヲ爲スコトヲ

得附帶控訴ニ因リテ受クヘキ利益ノ價額カ三百圓ニ滿タサルトキ亦同シ

第三百七十四條 附帶控訴ハ控訴ノ取下アリタルトキ又ハ不適法トシテ控訴ノ棄却アリタルトキ

ハ其ノ效力ヲ失フ但シ控訴ノ要件ヲ具備スルモノハ之ヲ獨立ノ控訴ト看做ス

第三百七十五條 附帶控訴ニ付テハ控訴ニ關スル規定ニ依ル

第三百七十六條 控訴裁判所ハ第一審ノ判決ニ付不服ノ申立ナキ部分ニ限り申立ニ因リ決定ヲ以テ假執行ノ宣言ヲ爲スコトヲ得

第三百七十七條 假執行ニ關スル控訴審ノ裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

前條ノ申立ヲ却下スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第三百七十八條 口頭辯論ハ當事者カ第一審ノ判決ノ變更ヲ求ムル限度ニ於テノミ之ヲ爲ス

當事者ハ第一審ニ於ケル口頭辯論ノ結果ヲ陳述スルコトヲ要ス

第三百七十九條 前編第一章ノ規定ハ別段ノ規定アル場合ヲ除クノ外控訴審ノ訴訟手續ニ之ヲ準用ス

第三百八十條 第一審ニ於テ爲シタル訴訟行為ハ控訴審ニ於テモ其ノ效力ヲ有ス

第三百八十一條 第一審ニ於テ爲シタル準備手續ハ控訴審ニ於テモ其ノ效力ヲ有ス

第三百八十二條 控訴審ニ於テハ當事者ハ第一審裁判所カ管轄權ヲ有セサルコトヲ主張スルコト



ヲ得ス但シ專屬管轄ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第三百八十三條 反訴ハ相手方ノ同意アル場合ニ限り之ヲ提起スルコトヲ得

相手方カ異議ヲ述ヘスシテ反訴ノ本案ニ付辯論ヲ爲シタルトキハ反訴ノ提起ニ同意シタルモノト看做ス

第三百八十四條 不適法ナル控訴ニシテ其ノ欠缺カ補正スルコト能ハサルモノナル場合ニ於テハ

口頭辯論ヲ經スシテ判決ヲ以テ之ヲ却下スルコトヲ得

第三百八十五條 控訴裁判所ハ第一審判決ヲ相當トスルトキハ控訴ヲ棄却スルコトヲ要ス

判決カ其ノ理由ニ依レハ不當ナル場合ニ於テモ他ノ理由ニ依リテ正當ナルトキハ控訴ヲ棄却スルコトヲ要ス

第三百八十六條 第一審判決ノ變更ハ不服申立ノ限度ニ於テノミ之ヲ爲スコトヲ得

第三百八十七條 控訴裁判所ハ第一審判決ヲ不當トスルトキハ之ヲ取消スコトヲ要ス

第三百八十八條 第一審ノ判決ノ手續カ法律ニ違背シタルトキハ控訴裁判所ハ判決ヲ取消スコト

ヲ要ス

第三百八十九條 訴ヲ不適法トシテ却下シタル第一審判決ヲ取消ス場合ニ於テハ控訴裁判所ハ事件ヲ第一審裁判所ニ差戻スコトヲ要ス

第三百九十條 前條ノ場合ノ外控訴裁判所カ第一審判決ヲ取消ス場合ニ於テ事件ニ付尙辯論ヲ爲

ス必要アルトキハ之ヲ第一審裁判所ニ差戻スコトヲ得

第一審裁判所ニ於ケル訴訟手續カ法律ニ違背シタルコトヲ理由トシテ事件ヲ差戻ストキハ其ノ訴訟手續ハ之ニ因リテ取消サレタルモノト看做ス

第三百九十一條 事件カ管轄違ナルコトヲ理由トシテ第一審判決ヲ取消ストキハ控訴裁判所ハ判

決ヲ以テ事件ヲ管轄裁判所ニ移送スルコトヲ要ス

第三百九十二條 判決ニ事實及理由ヲ記載スルニハ第一審判決ヲ引用スルコトヲ得

第三百九十三條 訴訟完結シタル後上訴ノ提起ナクシテ上訴期間滿了シタルトキハ裁判所書記ハ

判決又ハ第三百七十一條ノ規定ニ依ル命令ノ正本ヲ訴訟記録ニ添附シ之ヲ第一審裁判所ノ書記ニ送付スルコトヲ要ス

## 第二章 上告

第三百九十四條 上告ハ控訴審ノ終局判決ニ對シテ之ヲ爲スコトヲ得

第三百九十五條 上告ハ判決カ法令ニ違背シタルコトヲ理由トスルトキニ限り之ヲ爲スコトヲ得

第三百九十六條 判決ハ左ノ場合ニ於テハ常ニ法令ニ違背シタルモノトス



- 一 法律ニ從ヒテ判決裁判所ヲ構成セザリシトキ
  - 二 法律ニ依リ判決ニ關與スルコトヲ得サル判事カ判決ニ關與シタルトキ
  - 三 專屬管轄ニ關スル規定ニ違背シタルトキ
  - 四 法定代理權訴訟代理權又ハ代理人カ訴訟行爲ヲ爲スニ必要ナル授權ノ欠缺アリタルトキ
  - 五 口頭辯論公開ノ規定ニ違背シタルトキ
  - 六 判決ニ理由ヲ附セス又ハ理由ニ齟齬アルトキ
- 前項第四號ノ規定ハ第五十四條又ハ第八十七條ノ規定ニ依ル追認アリタル場合ニハ之ヲ適用セ  
ス

第三百九十七條 前章ノ規定ハ別段ノ規定アル場合ヲ除クノ外上告及上告審ノ訴訟手續ニ之ヲ準  
用ス

第三百九十八條 上告狀ニ上告ノ理由ヲ記載セサルトキハ遅クトモ上告期間滿了ノ日ヨリ三十日  
内ニ上告理由書ヲ提出スルコトヲ要ス

第三百九十九條 上告人カ前條ノ規定ニ違背シ上告理由書ヲ提出セサルトキハ上告裁判所ハ口頭  
辯論ヲ經スシテ判決ヲ以テ上告ヲ却下スルコトヲ得

第四百條 裁判長ハ相當ノ期間ヲ定メ答辯書ヲ提出スヘキコトヲ被上告人ニ命スルコトヲ得

第四百一條 上告裁判所カ上告狀、上告理由書、答辯書其ノ他ノ書類ニ依リ上告ヲ理由ナシト認  
ムルトキハ口頭辯論ヲ經スシテ判決ヲ以テ上告ヲ棄却スルコトヲ得

第四百二條 上告裁判所ハ上告理由ニ基キ不服ノ申立アリタル限度ニ於テノミ調査ヲ爲ス

第四百三條 原判決ニ於テ適法ニ確定シタル事實ハ上告裁判所ヲ羈束ス

第四百四條 第三百九十四條第二項ノ規定ニ依ル上告アリタル場合ニ於テハ上告裁判所ハ原判決  
ニ於ケル事實ノ確定カ法律ニ違背シタルコトヲ理由トシテ其ノ判決ヲ破毀スルコトヲ得ス

第四百五條 第四百二條乃至前條ノ規定ハ裁判所カ職權ヲ以テ調査スヘキ事項ニ之ヲ適用セス

第四百六條 上告裁判所ハ原判決ニ付不服ノ申立ナキ部分ニ限り申立ニ因リ決定ヲ以テ假執行ノ  
宣言ヲ爲スコトヲ得

第四百七條 上告ヲ理由アリトスルトキハ上告裁判所ハ原判決ヲ破毀シ事件ヲ原裁判所ニ差戻シ  
又ハ同等ナル他ノ裁判所ニ移送スルコトヲ要ス

差戻又ハ移送ヲ受ケタル裁判所ハ新口頭辯論ニ基キ裁判ヲ爲スコトヲ要ス但シ上告裁判所カ破  
毀ノ理由ト爲シタル事實上及法律上ノ判斷ニ羈束ヒラル

原判決ニ關與シタル判事ハ前項ノ裁判ニ關與スルコトヲ得ス

第四百八條 左ノ場合ニ於テハ上告裁判所ハ事件ニ付裁判ヲ爲スコトヲ要ス



一 確定シタル事實ニ付法令ノ適用ヲ誤リタルコトヲ理由トシテ判決ヲ破毀スル場合ニ於テ事件カ其ノ事實ニ基キ裁判ヲ爲スニ熟スルトキ

二 事件カ通常裁判所ノ權限ニ屬セサルコトヲ理由トシテ判決ヲ破毀スルトキ

第四百九條 差戻又ハ移送ノ判決アリタルトキハ裁判所書記ハ其ノ判決ノ正本ヲ訴訟記録ニ添付シ差戻又ハ移送ヲ受ケタル裁判所ノ書記ニ之ヲ送付スルコトヲ要ス

第三章 抗告

第四百十條 口頭辯論ヲ經スシテ訴訟手續ニ關スル申立ヲ却下シタル決定又ハ命令ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得

第四百十一條 決定又ハ命令ヲ以テ裁判ヲ爲スコトヲ得サル事項ニ付決定又ハ命令ヲ爲シタルトキハ當事者ハ之ニ對シテ抗告ヲ爲スコトヲ得

第四百十二條 受命判事又ハ受託判事ノ裁判ニ對シ不服アル當事者ハ受訴裁判所ニ異議ノ申立ヲ爲スコトヲ得但シ其ノ裁判カ受訴裁判所ノ裁判ナル場合ニ於テ之ニ對シ抗告ヲ爲シ得ルモノナルトキニ限ル

抗告ハ異議ニ付テノ裁判ニ對シテ之ヲ爲スコトヲ得

第一項ノ規定ハ大審院ニ繫屬スル事件ニ付受命判事又ハ受託判事ノ爲シタル裁判ニ之ヲ準用

ス

第四百十三條 抗告裁判所ノ決定ニ對シテハ其ノ決定カ法令ニ違背シタルコトヲ理由トスル場合ニ限り更ニ抗告ヲ爲スコトヲ得

第四百十四條 抗告及抗告裁判所ノ訴訟手續ニハ其ノ性質ニ反セサル限り第一章ノ規定ヲ準用ス但シ前條ノ抗告及之ニ關スル訴訟手續ニハ前章ノ規定ヲ準用ス

第四百十五條 即時抗告ハ裁判ノ告知アリタル日ヨリ一週間内ニ之ヲ爲スコトヲ要ス前項ノ期間ハ之ヲ不變期間トス

第四百十六條 抗告ハ原裁判所又ハ抗告裁判所ニ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ要ス抗告裁判所カ抗告ヲ受ケタル場合ニ於テ適當ト認ムルトキハ事件ヲ原裁判所ニ送付スルコトヲ得

第四百十七條 原裁判所カ抗告ヲ受ケ又ハ前條第二項ノ規定ニ依リ事件ノ送付ヲ受ケタル場合ニ於テ抗告ヲ理由アリト認ムルトキハ其ノ裁判ヲ更正スルコトヲ要ス

抗告ヲ理由ナシト認ムルトキハ意見ヲ附シ事件ヲ抗告裁判所ニ送付スルコトヲ要ス

第四百十八條 抗告ハ即時抗告ニ限り執行停止ノ效力ヲ有ス

抗告裁判所又ハ原裁判ヲ爲シタル裁判所若ハ判事ハ抗告ニ付決定アル迄原裁判ノ執行ヲ停止シ



其ノ他必要ナル處分ヲ命スルコトヲ得

第四百十九條 抗告裁判所ハ抗告ニ付口頭辯論ヲ命セサル場合ニ於テハ抗告人其ノ他ノ利害關係人ヲ審訊スルコトヲ得

第四編 再審

第四百二十條 左ノ場合ニ於テハ確定ノ終局判決ニ對シ再審ノ訴ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得但シ當事者カ上訴ニ依リ其ノ事由ヲ主張シタルトキ又ハ之ヲ知リテ主張セサリシトキハ此ノ限ニ在ラス

- 一 法律ニ從ヒテ判決裁判所ヲ構成セサリシトキ
- 二 法律ニ依リ裁判ニ關與スルコトヲ得サル刑事カ裁判ニ關與シタルトキ
- 三 法定代理權、訴訟代理權又ハ代理人カ訴訟行為ヲ爲スニ必要ナル授權ノ欠缺アリタルトキ
- 四 裁判ニ關與シタル刑事カ事件ニ付職務ニ關スル罪ヲ犯シタルトキ
- 五 刑事上罰スヘキ他人ノ行為ニ因リ自白ヲ爲スニ至リタルトキ又ハ判決ニ影響ヲ及ホスヘキ攻撃若ハ防禦ノ方法ヲ提出スルコトヲ妨ケラレタルトキ
- 六 判決ノ證據ト爲リタル文書其ノ他ノ物件カ偽造又ハ變造セラレタルモノナリシトキ
- 七 證人、鑑定人、通事又ハ宣誓シタル當事者若ハ法定代理人ノ虛偽ノ陳述カ判決ノ證據ト爲

リタルトキ

八 判決ノ基礎ト爲リタル民事若ハ刑事ノ判決其ノ他ノ裁判又ハ行政處分カ後ノ裁判又ハ行政處分ニ依リテ變更セラレタルトキ

九 判決ニ影響ヲ及ホスヘキ重要ナル事項ニ付判斷ヲ遺脱シタルトキ

十 不服ノ申立アル判決カ前ニ言渡サレタル確定判決ト牴觸スルトキ

前項第四號乃至第七號ノ場合ニ於テハ罰スヘキ行為ニ付有罪ノ判決若ハ過料ノ裁判確定シタルトキ又ハ證據欠缺外ノ理由ニ因リ有罪ノ確定判決若ハ過料ノ確定裁判ヲ得ルコト能ハサルトキニ限り再審ノ訴ヲ提起スルコトヲ得

控訴審ニ於テ事件ニ付本案判決ヲ爲シタルトキハ第一審ノ判決ニ對シ再審ノ訴ヲ提起スルコトヲ得ス

第四百二十一條 判決ノ基本タル裁判ニ付前條ニ定メタル事由アルトキハ其ノ裁判ニ對シ獨立ノ不服ノ方法ヲ定メタル場合ニ於テモ其ノ事由ヲ以テ判決ニ對スル再審ノ理由ト爲スコトヲ得

第四百二十二條 再審ハ不服ノ申立アル判決ヲ爲シタル裁判所ノ專屬管轄トス

審級ヲ異ニスル裁判所カ同一事件ニ付爲シタル判決ニ對スル再審ノ訴ハ上級裁判所併セテ之ヲ管轄ス



第四百二十三條 再審ノ訴訟手續ニハ其ノ性質ニ反セサル限り各審級ニ於ケル訴訟手續ニ關スル規定ヲ準用ス

第四百二十四條 再審ノ訴ハ當事者カ判決確定後再審ノ事由ヲ知リタル日ヨリ二週間内ニ之ヲ提起スルコトヲ要ス

前項ノ期間ハ之ヲ不變期間トス

判決確定後五年ヲ經過シタルトキハ再審ノ訴ハ之ヲ提起スルコトヲ得ス

再審ノ事由カ判決確定後ニ生シタルトキハ前項ノ期間ハ其ノ事由發生ノ日ヨリ之ヲ起算ス

第四百二十五條 前條ノ規定ハ代理權ノ欠缺及第四百二十條第一項第十號ニ掲クル事項ヲ理由トスル再審ノ訴ニハ之ヲ適用セス

第四百二十六條 訴狀ニハ左ノ事項ヲ記載スルコトヲ要ス

一 當事者及法定代理人

二 不服ノ申立アル判決ノ表示及其ノ判決ニ對シ再審ヲ求ムル旨

三 不服ノ理由

第四百二十七條 本案ノ辯論及裁判ハ不服ノ範圍内ニ於テノミ之ヲ爲スコトヲ得  
不服ノ理由ハ之ヲ變更スルコトヲ得

第四百二十八條 再審ノ事由アル場合ニ於テモ判決ヲ正當トスルトキハ裁判所ハ再審ノ訴ヲ却下スルコトヲ要ス

第四百二十九條 即時抗告ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得ル決定又ハ命令カ確定シタル場合ニ於テ第四百二十條第一項ニ掲クル事由アルトキハ確定判決ニ對スル第四百二十條乃至前條ノ規定ニ準シ再審ノ申立ヲ爲スコトヲ得

#### 第五編 督促手續

第四百三十條 金錢其ノ他ノ代替物又ハ有價證券ノ一定ノ數量ノ給付ヲ目的トスル請求ニ付テハ裁判所ハ債權者ノ申立ニ因リ支拂命令ヲ發スルコトヲ得但シ日本ニ於テ公示送達ニ依ラスシテ其ノ命令ノ送達ヲ爲スコトヲ得ヘキ場合ニ限ル

第四百三十一條 督促手續ハ債務者ノ普通裁判籍所在地ノ區裁判所又ハ第九條ノ規定ニ依ル管轄區裁判所ノ專屬管轄トス

第四百三十二條 支拂命令ノ申立ニハ其ノ性質ニ反セサル限り訴ニ關スル規定ヲ準用ス

第四百三十三條 支拂命令ノ申立カ第四百三十條若ハ管轄ニ關スル規定ニ違背スルトキ又ハ申立ノ趣旨ニ依リ請求ノ理由ナキコト明ナルトキハ其ノ申立ハ之ヲ却下スルコトヲ要ス請求ノ一部ニ付支拂命令ヲ發スルコトヲ得サルトキ其ノ一部ニ付亦同シ



申立却下ノ決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第四百三十四條 支拂命令ハ債務者ヲ審訊セスシテ之ヲ發ス

債務者ハ支拂命令ニ對シ異議ノ申立ヲ爲スコトヲ得

第四百三十五條 支拂命令ニハ當事者、法定代理人竝ニ請求ノ趣旨及原因ヲ記載シ且債務者カ支

拂命令送達ノ日ヨリ二週間内ニ異議ヲ申立テサルトキハ債權者ノ申立ニ因リ假執行ノ宣言ヲ爲スヘキ旨ヲ附記スルコトヲ要ス

第四百三十六條 支拂命令ハ之ヲ當事者ニ送達スルコトヲ要ス

第四百三十七條 債務者カ假執行ノ宣言前異議ヲ申立テタルトキハ支拂命令ハ其ノ異議ノ範圍内ニ於テ效力ヲ失フ

第四百三十八條 債務者カ支拂命令送達ノ日ヨリ二週間内ニ異議ヲ申立テサルトキハ裁判所ハ債權者ノ申立ニ因リ支拂命令ニ手續ノ費用額ヲ附記シ假執行ノ宣言ヲ爲スコトヲ要ス但シ其ノ宣言前異議ノ申立アリタルトキハ此ノ限ニ在ラス

假執行ノ宣言ハ支拂命令ノ原本及正本ニ之ヲ記載シ其ノ正本ヲ當事者ニ送達スルコトヲ要ス  
假執行ノ申立却下ノ決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第四百三十九條 債權者カ假執行ノ申立ヲ爲スコトヲ得ル時ヨリ三十日内ニ其ノ申立ヲ爲ササル

トキハ支拂命令ハ其ノ效力ヲ失フ

第四百四十條 假執行ノ宣言ヲ附シタル支拂命令送達ノ日ヨリ二週間ヲ經過シタルトキハ債務者ハ其ノ支拂命令ニ對シ異議ヲ申立ツルコトヲ得ス

前項ノ期間ハ之ヲ不變期間トス

第四百四十一條 區裁判所カ異議ヲ不合法ト認ムルトキハ請求カ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル場合ニ於テモ決定ヲ以テ其ノ異議ヲ却下スルコトヲ要ス此ノ決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第四百四十二條 支拂命令ニ對シ適法ナル異議ノ申立アリタルトキハ異議アル請求ニ付テハ其ノ目的ノ價額ニ從ヒ支拂命令ノ申立ノ時ニ於テ其ノ命令ヲ發シタル區裁判所又ハ其ノ區裁判所ノ所在地ヲ管轄スル地方裁判所ニ訴ノ提起アリタルモノト看做ス此ノ場合ニ於テハ督促手續ノ費用ハ之ヲ訴訟費用ノ一部トス

前項ノ規定ニ依リテ地方裁判所ニ訴ノ提起アリタルモノト看做サレタル場合ニ於テハ裁判所書記ハ遲滯ナク訴訟記録ヲ地方裁判所ノ書記ニ送付スルコトヲ要ス

第四百四十三條 假執行ノ宣言ヲ附シタル支拂命令ニ對シ異議ノ申立ナキトキ又ハ異議却下ノ決定確定シタルトキハ支拂命令ハ確定判決ト同一ノ效力ヲ有ス



第四百四十四條乃至第四百九十六條 削除

第四百九十七條ノ二 判決カ其判決ニ表示シタル當事者以外ノ者ニ對シ效力ヲ有ス可キトキハ其者ニ對シ又ハ其者ノ爲メニモ之ヲ執行スルコトヲ得但第六十四條ノ規定ニ依ル參加人ニ付テハ此限ニ在ラス

前項ノ場合ニ於テ執行力アル正本ノ付與ニ付テハ第五百十九條乃至第五百二十一條ノ規定ヲ準用ス

第五百條中「原狀回復又ハ」ヲ削ル

第五百一條乃至第五百十一條 削除

第五百十二條中「故障ヲ申立又ハ上訴ヲ起シタルトキ」ヲ「上訴ヲ提起シタルトキ又ハ假執行ノ宣言ヲ付シタル支拂命令ニ對シ異議ヲ申立テタルトキ」ニ改ム

第五百十三條ニ左ノ一項ヲ加フ

第一百十二條、第一百十三條、第一百十五條及ヒ第一百十六條ノ規定ハ第一項ノ規定ニ依ル保證ニ付キ之ヲ準用ス

第五百十四條中「第十七條」ヲ「第八條」ニ改ム

第五百十五條第二項中第二號ヲ左ノ如ク改メ第三號乃至第五號ヲ削ル

第二 外國判決カ第二百條ノ條件ヲ具備セサルトキ

第五百四十一條中「第三百二十九條、第四百條及ヒ第四百十五條乃至第四百十九條」ヲ「第一百十七條、第一百六十八條、第一百七十一條及ヒ第一百七十二條」ニ改ム  
第五百四十五條第二項中「其原因ヲ生シ且故障ヲ以テ之ヲ主張スルコトヲ得サルトキ」ヲ「其原因ヲ生シタルトキ」ニ改ム

第五百四十八條第三項ヲ左ノ如ク改ム

右裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第五百五十條第三號ヲ左ノ如ク改ム

第三 執行ヲ免カルル爲メ擔保ヲ供シタルコトヲ證スル書面

第五百五十九條中第三號及第四號ヲ削リ第五號ヲ第三號トシ第二號ヲ左ノ如ク改ム

第二 假執行ノ宣言ヲ付シタル支拂命令

第五百六十條中「債務名義」ヲ「債務名義及ヒ訴訟上ノ和解並ニ請求ノ拋棄又ハ認諾」ニ改ム  
第五百六十一條中「執行命令」ヲ「假執行ノ宣言ヲ付シタル支拂命令」ニ改ム

第五百六十一條ノ二 過料ノ裁判ハ檢事ノ命令ヲ以テ之ヲ執行ス此命令ハ執行力アル債務名義ト同一ノ效力ヲ有ス



第五百六十二條中「第十七條」ヲ「第八條」ニ改ム

第五百九十五條 執行裁判所トシテハ債務者ノ普通裁判籍ヲ有スル地ノ區裁判所、此區裁判所ナ

キトキハ差押フヘキ債權ノ所在地ヲ管轄スル區裁判所管轄權ヲ有ス

差押フヘキ債權ハ第三債務者ノ普通裁判籍ノ所在地ニ在ルモノトス但物ノ引渡ヲ目的トスル債

權及ヒ物上ノ擔保權ヲ有スル債權ハ其物ノ所在地ニ在ルモノトス

第六百七條中「第五百五條第二項ニ從ヒテ債務者ニ保證ヲ立テシメ又ハ供託ヲ爲サシメテ」ヲ「第

百九十六條第二項ニ從ヒテ債務者ニ擔保ヲ供セシメテ」ニ改ム

第六百三十七條中「看做ス旨ノ闕席判決ヲ爲ス可シ」ヲ「看做ス」ニ改ム

第六百三十八條 第六百三十六條ノ判決ノ確定シタルコト又ハ前條ノ規定ニ從ヒ異議ヲ取下ケタ

ルモノト看做サレタルコトノ證明アルトキハ配當裁判所ハ之ニ基キ支拂又ハ他ノ配當手續ヲ命

ス

第六百四十一條中「第二十六條ノ規定ヲ適用ス」ヲ「各區裁判所管轄權ヲ有ス此場合ニ於テ裁判所

必要アリト認ムルトキハ事件ヲ他ノ管轄區裁判所ニ移送スルコトヲ得」ニ改ム

第六百六十九條中「第四百十三條第三項」ヲ「第七百七十條第二項及ヒ第七十三條」ニ改ム

第六百七十七條中「第二百二十九條乃至第三百二十二條及ヒ第三百三十四條」ヲ「第四百二十二條乃至第百

四十七條」ニ改ム

第六百八十一條中「取消ノ訴若クハ原狀回復ノ訴」ヲ「再審ノ訴」ニ改ム

第七百五十六條ノ二 假處分ヲ取消ス判決ハ財産權上ノ請求ニ關セサルモノニ付テモ假執行ノ宣

言ヲ爲スコトヲ得

第七百六十六條中「之ヲ爲シ其他法律ニ別段ノ規定ヲ設ケサルトキハ第五百五十七條第三項ノ規定

ニ從ヒテ」ヲ削リ同條ニ左ノ一項ヲ加フ

裁判所相當ト認ムルトキハ新聞紙ニ公告ス可キコトヲ命スルコトヲ得

第七百七十四條第二項第六號ヲ左ノ如ク改ム

第六 第四百二十條第四號乃至第八號ノ場合ニ於テ再審ノ訴ヲ許ス條件ノ存スルトキ

第七百七十六條中「第二百二十條ノ條件ノ存セサルトキト雖モ」ヲ削ル

第八百一條第一項第六號ヲ左ノ如ク改ム

第六 第四百二十條第四號乃至第八號ノ場合ニ於テ再審ノ訴ヲ許ス條件ノ存スルトキ

附 則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム



民事訴訟法中改正法律施行法案

民事訴訟法中改正法律施行法

- 第一條 本法ニ於テ新法ト稱スルハ大正十五年民事訴訟法中改正法律ニ依ル改正規定ヲ謂ヒ舊法ト稱スルハ従前ノ規定ヲ謂フ
- 第二條 新法ハ新法施行前ニ生シタル事項ニ亦之ヲ適用ス但シ舊法ニ依リテ生シタル效力ヲ妨ケス
- 第三條 新法施行前ヨリ繫屬スル事件ニ付新法ニ依リ管轄權アル裁判所ハ舊法ニ依レハ管轄權ナキ場合ニ於テモ管轄權ヲ有ス
- 前項ノ事件ニ付舊法ニ依リ管轄權アル裁判所ハ新法ニ依レハ管轄權ナキ場合ニ於テモ管轄權ヲ有ス
- 第四條 新法ニ依リ新ニ期間ヲ定メタル訴訟行爲ニシテ新法施行ノ際爲スヘキモノニ付テハ其ノ期間ハ新法施行ノ日ヨリ之ヲ起算ス
- 第五條 新法第八十五條ノ規定ハ新法施行前同條ニ掲クル事由ヲ生シタル訴訟代理ニシテ新法施行前委任消滅ノ通知ヲ爲ササリシモノニモ之ヲ適用ス
- 第六條 新法施行前ヨリ繫屬スル訴訟ニ付テハ舊法ニ依リ訴訟費用ノ保證ヲ立ツル義務ナキ者ハ

新法ニ依リ擔保ヲ供スルコトヲ要セス

第七條 新法施行前ヨリ進行ヲ始メタル法定期間及其ノ計算ハ舊法ニ依ル

新法施行前言渡シタル判決ニ對スル上訴ノ期間カ新法施行後進行ヲ始メタル場合亦前項ニ同シ

第八條 新法施行前裁判所書記カ判決原本ノ交付ヲ受ケタルトキハ其ノ判決ノ送達ハ申立アルニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ要セス

第九條 新法施行前ヨリ繫屬スル訴訟ニ付テハ特ニ裁判所ノ命シタル場合ニ限り新法ニ依リ準備手續ヲ爲ス

第十條 新法施行前舊法ニ依リテ罰金又ハ過料ニ處スヘキ行爲ヲ爲シタル者ニシテ新法施行ノ際未タ其ノ判決ヲ受ケサルモノハ新法ニ於テ過料ニ處スヘキ場合ニ限り新法ニ依リ處罰ス但シ過料ノ額ハ舊法ノ罰金又ハ過料ノ額ヲ超ユルコトヲ得ス

第十一條 新法施行前ヨリ繫屬スル訴訟ニ付言渡シタル判決ニ對シテハ上訴ニ因リテ受クヘキ利益ノ價額三百圓ニ滿タサル場合ニ於テモ上訴ヲ爲スコトヲ得

第十二條 新法施行前第一審裁判所又ハ控訴裁判所カ管轄違トシテ訴ヲ却下シタル場合ニ於テ上訴裁判所カ第一審裁判所ニ其ノ管轄權ナシトスルトキハ判決ヲ以テ事件ヲ第一審ノ管轄裁判所ニ移送スルコトヲ要ス



- 前項ノ場合ニ於テ上訴裁判所カ第一審裁判所ニ管轄權アリトスルトキハ事件ヲ其ノ裁判所ニ差戻スコトヲ要ス但シ第一審裁判所カ管轄權アリト爲シタル事件ニ付控訴裁判所カ管轄違トシテ訴ヲ却下シタル場合ニ於テハ上告裁判所ハ事件ヲ控訴裁判所ニ差戻スコトヲ得
- 第十三條 新法施行前抗告裁判所ノ爲シタル決定ニ對シテハ仍舊法ニ依リ更ニ抗告ヲ爲スコトヲ得
- 第十四條 闕席判決ニ對シテハ仍舊法ニ依リ故障ヲ申立ツルコトヲ得
- 執行命令ニ對シテハ舊法ニ依ル故障期間内ニ異議ヲ申立ツルコトヲ得
- 第十五條 新法施行前妨訴抗辯ヲ棄却シ又ハ請求ノ原因ヲ正當ナリトシタル中間判決ニ對シテハ仍舊法ニ依リ上訴ヲ爲スコトヲ得
- 第十六條 新法施行前ヨリ繫屬スル證書訴訟及爲替訴訟ハ仍舊法ニ依リ之ヲ完結ス但シ訴訟カ新法施行ノ際第一審ニ繫屬スルトキハ新法施行ノ日ヨリ通常ノ手續ニ於テ繫屬スルモノト看做ス
- 第十七條 故障ヲ許ササル闕席判決ニ對シテハ仍舊法ニ依リ上訴ヲ爲スコトヲ得
- 第十八條 新法施行前請求ノ拋棄又ハ認諾ニ基キ判決ヲ求ムル申立アリタルトキハ仍舊法ニ依リ裁判ス新法施行前闕席判決ノ申立アリタルトキ亦同シ
- 第十九條 新法施行前言渡シタル判決ニシテ舊法第四百二十二條ニ掲クルモノニ對シ控訴ノ提起アリタル場合ニ於テハ仍舊法ノ規定ニ依ル

附 則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

民事訴訟費用法中改正法律案

民事訴訟費用法中左ノ通改正ス

- 第一條中「訴訟費用ハ」ヲ「訴訟費用ハ權利ノ伸張又ハ防禦ニ必要ナル限度ノ費用トシ」ニ改ム
- 第八條中「第二百二十七條」ヲ「第三百二十五條」ニ、「附添ヲ命シタルトキハ」ヲ「附添ヲ命シタルトキ又ハ同法第二百六十二條若クハ第三百十條第一項ノ規定ニ從ヒ囑託ヲ爲シタルトキハ」ニ改ム
- 第十一條乃至第十三條中「及ヒ通事」ヲ、「通事及ヒ民事訴訟法第三百十條第二項ニ規定スル説明者」ニ改ム
- 第十七條 證人、鑑定人、通事及ヒ民事訴訟法第三百十條第二項ニ規定スル説明者ノ日當、旅費、止宿料其他ノ費用ハ請求ニ因リ裁判所之ヲ支拂フ民事訴訟法第二百六十二條及ヒ第三百十條第一項ノ規定ニ依ル囑託ヲ受ケタル者ニ對スル報酬亦同シ
- 第十八條 當事者ノ豫納ニ係ラサル費用ハ裁判ニ因リテ其費用ヲ負擔スヘキ者ヨリ裁判所之ヲ取



立ツルコトヲ得

前項ノ規定ニ依ル費用ノ取立ハ第一審ノ受訴裁判所ノ決定ニ依リ民事訴訟法第六編ノ規定ニ從ヒ之ヲ執行ス其決定ハ執行力アル債務名義ト同一ノ效力ヲ有ス

前項ノ規定ハ民事訴訟法第二百二十三條ノ規定ニ從ヒ訴訟上ノ救助ヲ受ケタル者ノ相手方ヨリ裁判費用ノ取立ヲ爲ス場合ニ之ヲ準用ス

第十九條 民事訴訟法第二百一十一條及ヒ第二百二十二條ノ規定ニ依ル費用ノ取立ノ決定ハ民事訴訟法第六編ノ規定ニ從ヒ之ヲ執行ス其決定ハ執行力アル債務名義ト同一ノ效力ヲ有ス

#### 附則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

#### 民事訴訟用印紙法中改正法律案

民事訴訟用印紙法中左ノ通改正ス

第二條中「第三條乃至第六條」ヲ「第二十二條第一項及ヒ第二十三條」ニ改ム

第五條ノ二 民事訴訟法第七十一條又ハ第七十五條ノ規定ニ依ル參加ノ申出書ニハ第二條、第三條及ヒ前條ノ規定ニ準シ印紙ヲ貼用ス可シ

條及ヒ前條ノ規定ニ準シ印紙ヲ貼用ス可シ

第六條中「支拂命令ノ申請」ヲ「支拂命令ノ申立」ニ改ム

第六條ノ二中「左ニ掲クル申立」ヲ「左ニ掲クル申立、申出」ニ改メ同條第一號乃至第十三號ヲ左ノ如ク改ム

- 一 期日指定ノ申立
- 二 中斷又ハ中止シタル訴訟手續ノ受繼ノ申立
- 三 民事訴訟法第六十四條ノ參加ノ申出
- 四 除斥又ハ忌避ノ申立
- 五 和解ノ申立
- 六 費用額確定ノ申立
- 七 強制執行ノ停止若クハ續行又ハ執行處分ノ取消ノ申立
- 八 配當要求
- 九 強制競賣又ハ強制管理ノ申立
- 十 債權又ハ他ノ財産權差押ノ申請
- 十一 民事訴訟法第七百三十二條乃至第七百三十四條ノ申立



第六條ノ三中「左ニ掲クル申立」ヲ「左ニ掲クル申立、申出」ニ、「證據調ノ申立」ヲ「證據ノ申出」ニ改ム  
第七條 和解及ヒ督促手續ニ付キ民事訴訟法第三百五十六條第三項又ハ第四百四十二條ノ規定ニ依リ訴訟カ繫屬スルトキハ第二條及ヒ第三條ノ規定ニ從ヒ印紙ヲ貼用ス可シ但第六條又ハ第十條ノ規定ニ依リ貼用シタル印紙ノ額ヲ通算ス

第九條 削除

第十條中「申立」ヲ「申立、申出」ニ改ム

第十一條中「第九十七條」ヲ「第二百十條」ニ改ム

第十二條乃至第十五條 削除

第十六條中「及ヒ第十二條」ヲ削ル

附則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

商事非訟事件印紙法中改正法律案

商事非訟事件印紙法中左ノ通改正ス

第一條中「民事訴訟用」ヲ削ル

第二條第三號ヲ削ル

第六條中「協諧契約」ヲ「強制和議」ニ改ム

第八條中「第二章第五節」ヲ「第三章第一節」ニ改ム

附則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

非訟事件手續法中改正法律案

非訟事件手續法中左ノ通改正ス

第四條第二項ヲ左ノ如ク改ム

管轄裁判所ノ指定ハ關係アル裁判所ニ共通スル直近上級裁判所申立ニ因リ決定ヲ以テ之ヲ爲ス  
此決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第七條中「第六十四條」ヲ「第八十條」ニ改メ同條但書ヲ左ノ如ク改ム

但私文書ニ認證ヲ受クヘキ旨ノ命令ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第八條 民事訴訟法第五百十條ノ規定ハ申立及ヒ陳述ニ之ヲ準用ス

第二十二條 當事者カ其責ニ歸スヘカラサル事由ニ因リ即時抗告ノ期間ヲ遵守スルコト能ハサル

場合ニ於テハ其事由ノ止ミタル後一週間内ニ限り懈怠シタル行爲ノ追完ヲ爲スコトヲ得

第二十四條 削除



第二十五條中「前五條ニ」ヲ「特ニ」ニ改ム

第二十九條中「第八十條第一項」ヲ「第九十三條」ニ改ム

第三十條第一項ニ左ノ但書ヲ加ヘ同條第二項ヲ削ル

但獨立シテ不服ヲ申立ツルコトヲ得ヌ

第七十八條中「第七十二條第一項」ヲ「第八十九條」ニ改ム

第二百二十六條中「第九十八條及ヒ商法施行法第九十五條第二項、第一百二條第二項、第一百十條第

二項」ヲ「及ヒ第九十八條」ニ改ム

第三百二十四條中「第四十八條及ヒ商法施行法第二百二條第二項」ヲ「及ヒ第四十八條」ニ改ム

附則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

人事訴訟手續法中改正法律案

人事訴訟手續法中左ノ通改正ス

第十條中「第一百一十一條第二項、第三項及ヒ第三百三十五條乃至第三百四十一條」ヲ「第三百二十九條、第四百十條第一項、第二百五十五條、第三百十六條及ヒ第三百十七條」ニ、「第二百二十九條」ヲ「第二百三條」ニ改メ第三項ヲ削ル

第十一條第二項ヲ削リ同條第三項中「前二項」ヲ「前項」ニ改ム  
第四十六條中「第六節及ヒ第七節」ヲ「第三節第二款及ヒ第三款」ニ改ム  
第七十九條中「第五十條」ヲ「第六十二條及ヒ第六十三條」ニ改ム

附則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

競賣法中改正法律案

競賣法中左ノ通改正ス

第二十五條第三項ヲ削ル

附則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

民法中改正法律案

民法中左ノ通改正ス

第五百十條 支拂命令ハ債權者カ法定ノ期間内ニ假執行ノ申立ヲ爲ササルニ因リ其效力ヲ失フ時ハ時効中斷ノ効力ヲ生セス

附則



本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

破産法中改正法律案

破産法中左ノ通改正ス

第二百八十八條第一項ヲ左ノ如ク改メ同條第四項ヲ削ル

破産者カ其ノ責ニ歸スヘカラサル事由ニ因リ債權調査ノ期日ニ出頭スルコト能ハサリシトキハ其ノ事由ノ止ミタル日ヨリ一週間内ニ限り異議ヲ追完スル爲破産裁判所ニ原狀回復ノ申立ヲ爲スコトヲ得

附則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

明治三十二年法律第五十號中改正法律案

明治三十二年法律第五十號中左ノ通改正ス

第二條 削除

附則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

(參照)

外國人ノ署名捺印及無資力證明ニ關スル法律 明治三十二年三月法律第五十號

第一條 法令ノ規定ニ依リ署名、捺印スヘキ場合ニ於テハ外國人ハ署名スルヲ以テ足ル

捺印ノミヲ爲スヘキ場合ニ於テハ外國人ハ署名ヲ以テ捺印ニ代フルコトヲ得

第二條 民事訴訟法第九十二條ニ依リ訴訟上ノ救助ヲ求ムル外國人ハ日本ニ住所、居所ヲ有セサルトキハ其ノ住所又ハ居所アル外國ノ管轄官廳ノ證明書ヲ以テ同法第九十三條ニ定メタル無資力ノ證明ヲ爲スコトヲ要ス但シ其ノ證明書ニハ日本ニ駐在スル其ノ外國ノ領事ノ認證ヲ受クヘシ日本ニ住所又ハ居所ヲ有スル外國人ハ其ノ住所又ハ居所地又ハ居所地ノ市町村長ノ證明書ヲ以テ前項ノ證明ヲ爲スコトヲ要ス但シ市町村長ノ證明書ヲ提出スルコト能ハサルトキ又ハ其ノ證明力不十分ナルトキハ裁判所ハ日本ニ駐在スル本國領事ノ認證アル本國管轄官廳ノ證明書ヲ提出セシムルコトヲ得

刑事訴訟法中改正法律案

刑事訴訟法中左ノ通改正ス

第五百七十條但書ヲ削ル

第五百七十二條中「保證」ヲ「擔保」ニ、「請求ノ拋棄ニ基キテ爲ス判決」ヲ「請求ノ拋棄」ニ改ム

附則



貴族院特別委員會議事

付託議案

民事訴訟法中改正法律施行法案

委員氏名

- |      |        |        |
|------|--------|--------|
| 委員長  | 子爵     | 伊東祐弘君  |
| 副委員長 | 子爵     | 河村讓三郎君 |
|      | 子爵     | 酒井忠亮君  |
|      | 子爵     | 森俊成君   |
|      | 子爵     | 板倉勝憲君  |
|      | 水上長次郎君 |        |
|      | 渡邊暢君   |        |
|      | 志水小一郎君 |        |

- |    |        |
|----|--------|
| 男爵 | 池田長康君  |
| 男爵 | 松岡均平君  |
| 男爵 | 渡邊修二君  |
|    | 安立綱之君  |
|    | 永田秀次郎君 |
|    | 佐竹三吾君  |
|    | 田村新吉君  |

大正十五年二月十九日(金曜日)午前十時十四分開會

○委員長(子爵伊東祐弘君) 是から民事訴訟法中改正法律案外一件の特別委員會を開きます、御諮りを致しますが、初に提出になりました二案に付て大體御説明を承りたいと思ひます、如何でございます

「賛成」と呼ぶ者あり」

○委員長(子爵伊東祐弘君) それぢやどうぞ、當局から御説明を願ひます

○國務大臣(江木翼君) 先づ以て民事訴訟法中改正法律案に付きまして御説明を申し上げます、本案の制定に付きましては、本會議に於きまして大要説明いたしましたる通り、大體、明治四十四年以



來、遡つて申しますると、もう少し以前になりまするが、明治四十四年以來、法律取調委員會に於て改正の事業に着手いたしましたして、それより以前、法典調査會に於て成案を得ましたものを公表いたしましたる草案に基きまして、更に裁判所、辯護士會及商業會議所等の意見を徴しましたる上、改正の審議を進めたものでございまして、本案は學者、辯護士、裁判官等の中で、特に學識經驗に秀でましたる各方面の士より成りまする所の委員會の慎重審議を経て出來ましたものでございまして右委員會は通じまして、委員總會を開くこと六十四回、起草委員會を開きますること實に四百三十四回に亘つて居るのであります、本案の編成の大體の分ち方は、現行の民事訴訟法の例を踏襲いたして居ります、唯訴訟費用の規定を、當事者と云ふ章がありまするが、其章其より分離いたしまして別章と致しました、それから判決と云ふ標題を裁判と云ふ標題に改め、之を第一審の訴訟手續の編より總則編に移しました、それから督促手續と云ふものを獨立の一編と致しましたことが編別改正の主なる點であります、尙ほ本會議に於きまして、御質問に對して御答へ致しましたる如く、強制執行のことに付きましては、該強制執行の手續と裁判手續とは、其趣を異にして居るものがあります、且つ競賣の手續と關聯することが深うござりまするが故に、共に特別の法規を以て規定を致しまするのを適當と認めまして、該法規に關しまする改正は、之を分離いたしましたして、引續き調査委員會を設けまして、出來るだけ速に其完成を期したいと思ふのであります、民事訴訟法改正の目的は

既に申上げたる如く、主として訴訟手續の延滞を防止し……是が第一點でございまして、且つ第二に適正を期すると云ふことに出でましたることは、申す迄もないこととございまして、今改正の要綱中、一二を挙げて見ますれば、大體、次の如くでございまして、第一に現行法に於ては、専ら當事者主義を採用いたしましたして、訴訟手續進行の如きは主として此當事者の意思に一任を致して居るのであります、裁判官の職權を以てする場合を少く致して居るのであります、私權の方を目的と致しまする民事訴訟に於て、根本の原則を茲に置きまするの誠に當然であります、一面に於きましては訴訟手續をして圓滑迅速に進行するや否やは、頗る公益に關すること大なるものがありまするので、或る程度に於きましては職權主義を加味することは實際極めて肝要でありますことは、多年の經驗に依りまして明かなることとあります、依りまして本案に於きましては、書類の送達であるとか、證據調であるとか、或は中斷したる訴訟手續の續行であるとか云ふやうなことに付きましては、相當の程度に於きまして、裁判所の職權を擴張いたしまして、職權主義を加味いたしましたのであります、第二に現行法に於きましては、準備手續なるものが、例へば計算事件の如き極めて特殊の訴訟に限定せられてありますけれども、本案に於きましては地方裁判所の管轄に屬する訴訟に於ては原則として準備手續を採用することと致したのであります、準備手續に於きましては、受命判事は簡便な手續に依りまして、當事者をして事案の關係を申述いたさせまして、是に依りま



して相互の原被兩訴の争點を明確にし、且つ當事者をして、豫め其争點に對する所の一切の證據方法と云ふものを申出でしめ、證人の呼出し、書類の取寄等、證據調べの準備を整へまして、斯くて準備手續と云ふものが完結するを俟つて、初めて適時公判を開廷いたしましたして、公判に於ては成るべく接近したる期日を指定いたしましたして、其期日に於て法律上の論議及び事實上の調査、殊に證據調べと云ふやうなものを集中統一いたしましたして、以て此審理の迅速と適正とを圖りたい、斯う云ふ考へなのであります、此準備手續を原則と致しまして地方裁判所の手續を擴充いたしましたことは、本案の改正の非常に重要な點の一つでございます、第三に現行法に於ける缺席裁判所の手續は、徒に訴訟手續の遅延延滞を來すものがありますので、本案は之を廢しまして、而して當事者の一方が口頭辯論期日に出頭せざる場合と雖も裁判所は出頭したる當事者の辯論を聴き、當事者に辯論を命じ、辯論を聴き必要なる取調を爲し、判決を得ることに致したのであります、第四に現行法は總ての訴訟に付て上訴を許して居りますけれども、上訴に依りて受くべき利益が輕微なる場合に於て上訴を許すことは、訴訟經濟の上から見まして必しも當を得たものでないと認めましたので、本案は上訴に依つて受くべき利益が三百圓に満たないと云ふ場合には上訴を爲すことを得ないと云ふことに致したのでございます、其他訴訟を成るべく速かに完了いたしますことを期しまする爲に、訴が管轄權を有しない裁判所に提起せられた場合と雖も、現行法に於ては斯かる場合に

於ては直ちに却下を致して了ふと云ふことになつて居りましたけれども、改正案に於きましては之を却下せず、管轄權ある裁判所に移送する、又管轄權ある裁判所に提起された場合に、當事者に著しき損害を及し又は訴訟手續の遅延を來すと云ふやうな虞がある場合に於ては、之を他の適當なる管轄裁判所に移送することを得るものと認めまして、以て成るべく訴訟が簡便に迅速に完了するの途を開いたのであります、其他法人に非ざる所の社團若くは財團と云ふが如きものと雖も、代表者又は管理人の定めがある場合に於きましては、左様な代表者又は管理人は訴訟當事者たるの能力を有するものと看做しまして、取扱をするのと云ふが如き規定をも設けたのであります、其他細目に亘りまして改正の要項は多々ございますが、改正の最も重要な點を擧げますれば以上の如きものでございます、尙ほ他の明細に亙りましては政府委員より隨時御質問其他に應じまして説明いたすことに致したいと思ひます、次に民事訴訟法中改正法律施行法案は、新舊二法の施行の際に於きまする経過を圓滑ならしめる爲に規定を設けたのであります、大體に於きましては從來既に起つて居ります訴訟に付ては新法に依るを本則とし、唯々舊法上適法に效力を生じたるものは新法に於ては之を有效として取扱ふと云ふやうな、大體の原則を定めまして、規定を設けた次第であります尙ほ此民事訴訟法改正に伴ひまして、他の法律に民事訴訟法を援用し若くは準用いたして居りまする法律が甚だ少くないのであります、恐らくは數十に上つて居るだらうと思つて居ります、斯くの



如き法律の改正案に付きましては、此議會に取り敢へず數十案を近々先づ以て貴族院の方へ提出いたす手續に運んで居ります、今日中に提出が出来やうかと考へて居ります、自然本委員會に付託されるものと思ひますが、其他今年直ちに提出の運びに至らないものも多々あるかと思ひます、過日も申上げましたる如く、民事訴訟法改正法律案は大正十七年度には施行を致したいと云ふ豫定でござりまして、次の議會、或はもう一つ次の議會迄に是等の準備を整へますれば十分であらうかと思ひます、此ことも豫め申上げて置きます

○志水小一郎君 大體のことと申しますと、誠に大體のことであつて、先づ伺ひたいのは、此種の大法典に於きまして、議會に提出せらるゝ前に其出來上がりしました案を案として、世に公けにして廣く意見を徴すると云ふことになつて居つたかのやうに本員は記憶して居ります、或は考へ違ひであるか知れませぬが、或は刑法に於けるが如く、刑事訴訟法に於けるが如く、民法も亦さうであつたかと思ひますが、然るに此法典は昨年十一月纔に出來上がったと云ふのでありますからして、此出來上がった案其ものも世に公けにして、廣く各方面の意見を徴せらるゝと云ふ暇は無かつたかと思ふのであります、それに付て伺つて置きたいのは、是は先刻、大臣からも御話がございましたが如く、案の内容、内容中の主なる事項に付ては、既に廣く各方面の意見を徴せられたりと云ふ風に伺ひましたが、果してさうでございますれば、出來上がった案其ものを議會提出前に世に公け

にして廣く意見を徴すると云ふ必要はないのである、殆どそれと同じやうなことをして居るからと云ふやうな御意見でもございませうか、是は肝腎のことでもありますから……

○國務大臣(江木翼君) 既に本會議に於きましても、案の成立に至ります経過を概要申し上げました如く、明治二十八年以來、調査に着手し、法典調査會に於きまして一旦、成案を得ましたものを之を廣く世間に公けに致しまして、さうして裁判所、辯護士會、商業會議所、其他各方面の意見を徴しましたのでございます、随分各方面から意見が參つて居りまして、それを參考いたしました、更に立案編成いたしました、尙ほ其他の方面に對しましても、綱領だけに付きましては機會ある毎に意見を求めまして、其意見を參酌いたしました、本案の編成を致すと、斯様な手續を執りました次第でございます、廣く經驗家並に學者方面の意見を參酌すると云ふ手數、手續に於きましては相當、盡して居ると考へて居るのでございます

○志水小一郎君 明らかた御説明で分りましたが、それでは斯う云ふ風に伺つて宜しいでございませうか、唯今御述べになりました様な經緯を以て、此案が成立つたに依つて、既に成立つた所の案其ものを議會提出前に世に公けにすると云はむが如きことは無用である、其必要はない、斯う認めたと、斯う云ふことに伺へば宜しいでございませうか

○國務大臣(江木翼君) 私は從來の事例を能く承知いたしませぬが、大きな法典を編纂いたします



る場合に於きまして、綱領を先づ以て公けに致しまして意見を徴しまするか、或は案を廣く出しまして意見を徴しまするか、何れかに致しまして、廣く學者、實際家等の意見を徴しますると云ふ手續を執つて居るやうであります、案を得ました後、廣く公けに致しまして、而して意見をそれに對して徴しまして、例へば刑事訴訟法、刑法、民法等の改正に付きまして、素より再審議を手續上致したことはありまするが、それが爲に更に委員會を設けまして、其意見を參酌して、更に改案をすると云ふが如き手續は、是は執つて居なかつたかと思つて居るのでございます、今回の案は多少古くはございますが、明治四十五年頃に、廣く一般の意見を徴しまして、爾後、會同其他の機會のありまする毎に意見を徴しましたものは、之を本案の編成の參考に致すと云ふが如き手續を執つて居りまして、慎重の上にも慎重を重ねて居る點は從來の事例としまして、少しも劣つて居らぬかと斯様に考へた次第でございます

○志水小一郎君　もう續いて伺ひます必要はないのでありますが、本員の御尋ね致しました理由を念の爲に述べて置く必要があると思ふ、本員が既に成案となつたものを世に公けにせられる必要はないか、其必要はないとせられたのであるかと云ふことを申し上げますのは、其成案を世に公けにして更に各方面の意見を徴する必要はなかつたか、斯うは申さぬのであります、成案を世に公けにすれば之に付て種々の品評もあるだらうし、又非難もあるだらうし、其廣く品評なり非難なり或は賛

意を表することは、それ等のことは其筋の御參考になりはしないか、又議會に於て此案を是認、通過せしむる上に於ても多少參考になる事柄ではあるまいかと、斯う思ひますから御尋ねしたのであります、それからもう一つ伺ひたいのは、此帝國辯護士會の名を以て此成案に對する修正意見なるものが、私の所にどつからか參つて來て、私は具さに見ませぬのでございますけれども、此綱領に屬するだけのことを、ちよつと讀んで見ます、是が六箇條あります、六箇の綱領を擧げて、修正意見を述べて居る、逐條に付ても修正意見を述べて居るのでありますけれども、或は本員は逐條に付てはまだ讀過せぬのであります、所が此是等の修正意見と云ふものは、素人の意見とは違つて法曹の意見でありまして、ちよつと之を常識を以て讀みますと云ふと、多少の理由が無きにもあらず、有るものもあるやうに思ふのであります、是は何れの時期に之に付て當局の御意見は伺はれるのでありませうか、纏めて伺はれるのでありますか、或は之は順序を経て此條項に審査が到達した場合に當局の御意見を伺はれるのでありませうか、是が一つ、どう云ふ風に之を御決めになると云ふことは審査の進行上、大變關係があるのではないかと思ふ、それをちよつと伺ひたい

○國務大臣(江木翼君)　此民事訴訟法の取調委員會で出來ました成案を公表は致さないと云ふことを大體一般に申して居りますが、事實に於きましては、成案は裁判所、辯護士會、大學方面に、それぞれ配布いたしまして、固より委員會の承諾を経まして配布いたしまして批評は請うたのであ



ちます、是は其法案を一般に公表すると云ふやうな形を取りませぬでございましたが、事實に於きましましては案其ものを必要に應じまして幾部でも出しまして批評を求めた、是は意見を徴すると云ふことは、既に法典調査會の委員會に付きまして意見を徴すると云ふことは既に済んで居ります、改めて意見を徴すると云ふ形を取りませぬのでありましたけれども、是等の意見を斟酌して出來たものは斯様なものであると云ふことを一面に於ては諒解を得、且つ批評を求めると云ふ意味に於て提出を致した次第であります、それに付きまして東京の二つの辯護士會に於きましては、それ〴〵審議をせられたやうであります、東京辯護士會の方に於きましては、多くまだ意見が纏まつて居らぬかと思ひますが、第一辯護士會の方に於きましては、唯今、御話の如く修正意見なるものが出來て居るやうに見えるのであります、之に付きましては大分、其法律専門に關し申すこともございするので、若し此機會に之に對しまする當局の意見を話せと云ふ御趣意でございすれば、只今即刻、政府委員をして説明を致させましても宜しうございます、或は何れの機會でも、委員會の適當と認められます、機會に於きまして之に對しまする意見を申し上げたいと、こちらからも希望いたして居る次第でございます、是だけ申上げて置きます

○委員長(子爵伊東祐弘君)

それでは一つ御説明を細かに御願ひ致します

○政府委員(池田寅二郎君)

仰せに従ひまして、私より改正案の要項に付きまして一應の御説明を

致すことに致します、就きましては豫めちよつと御願ひ致したいと思ひますが、一緒に出頭して居ります長島書記官は、此案をこちらへ出しまするに付て、深い關係を有つて居られる方でありまして、政府委員ではありませぬけれども、私の説明の足りませぬ所に付きまして、随時に補充することを御許しを願ひたいと思ひます、此段は私より特に豫め申上げて、御願ひ致して置きたいと思ひます、それで御説明を申し上げますに付きましては、勢ひ辯護士會より出て居ります意見に付きましても、自ら論及する機會があることであらうと思ひます、其點は大體申上げることが出來やうと思ひます、案の公表と云ふことも、辯護士會の意見の中にあるのであります、即ち之を公表して相當の期間、研究の餘地を與へるのが相當である、であるから此議會に提出することを先づ見合して、暫く研究をするの機會を與へて貰ひたいと云ふのが一つになつて居ります、順序と致しまして、そちらの方面から致したいと云ふのであります、法典の立案のやり方に付きましては、先程、司法大臣より述べられました通りに色々になつて居りまして、豫め法典編纂の事業に着手しまする際に各方面の意見を徴しまして、其意見に基いて立案をし、而して案を得ましたならば、之を更に訂正すると云ふ手續を執りませぬで、其儘議會に提出すると云ふ方法になつて居るものもありません、又其案を公表いたしましたして、更に之を訂正する手續を執つて、然る後に提出すると云ふやうな例になつて居るものもありませんが、刑事訴訟法などは、今の後の場合に屬して居るものと承知して居り



ます、例へば商法の如き、又破産法の如き、陪審法の如き、確か此民法に付きましては、舊民法成  
立いたしました後に、實施の際に意見が出まして、其實施を止めて、新しい民法になつたと云ふこ  
とを聞き及んで居ります、其新しい民法、即ち現行民法制定の際には、確か案を公表して、更に訂  
正の上、提出になつたのではないだらうと考へて居ります、それ等のものは、大體、立案の事業に  
着手しまする際に、各方面の意見を徴しまして、其意見に基いて立案をして、其儘提出すると云ふ  
ことに相成つて居るやうであります、即ち此民事訴訟法も先づ大體さう云ふやうな方式に則りまし  
たのでありまして、茲に一部持參を致しましたが四十四年、法律取調委員會や法典調査會の案を基  
礎と致しまして、更に法律取調會の事業と致しまして、民事訴訟法改正に着手しますると云ふ際に  
先程、大臣より述べられました通りに、各方面の意見を徴せられたのであります、其意見を類纂い  
たしましたものが即ち是であります、それに基きまして立案の方針を定められ而して審議を進めら  
れたのであります、其審議の經過に付きましては、本會議に於ても述べられました所でございます  
が、法律取調委員會並に司法省の法律調査會と云ふものを経て慎重に審議をせられたのであります  
其際には立案に關與に相成りました方々を、是は或は必要もないかも知れませぬが、ほんの御參考の  
爲に茲で御披露いたしますと、富井、河村、富谷、田部、平沼、鈴木、仁井田、の諸博士、横田五  
郎氏、原嘉道、鳩山秀夫、豊島直通、松岡義正、小山温、山内確三郎、加藤正治、牧野菊之助、岩

田宙造、松本丞治と云ふ、其外にまだありまするが、諸博士が、或は法律取調委員會の主査委員と  
なり、或は司法省の法律調査會の委員となり、或は其起草委員として參加せられたのであります、  
即ち裁判の實務に當つて居ります裁判官並に辯護士の先輩長老の諸氏を集めて、大學に於きまし  
て民事訴訟法の専攻をして居られます教授の方もそれに加はるやうにして、而して随分長い間審議  
を盡されたのであります、でありますから、即ち各方面の有力なる知識と云ふものは先づ此立案  
には心血を注がれたものと申上げて差支なからうと思ひます、斯う云ふことでありますから、  
旁々此案が十一月に成案を見るに至りましたのでありますけれども、此議會に提出すると云ふこ  
とに相成りました次第であります、大體立法の手續の先づ一つの例であります普通の例に依つて  
居るものと云ふことを御承知置を願ひたいのであります、辯護士會より提出に相成りました各意見  
に付きましては、勿論司法當局と致しましては、十分の敬意を拂つて居る次第であります、或は一  
部の者が其獨斷の見解に依て此法案を立案したと云ふやうな意味のことも此意見書の中に現はれて  
居るかのやうに見えまするが、旁々事實は決してさうではないと云ふことを御諒承を御願ひ致した  
い、それから此民事訴訟の實際の有様と云ふものが此社會の必要に副はない、之を改革するの必要  
があると云ふことは多年訴訟の實務に携つて居ります者は勿論のことでありまして、寧ろ訴訟  
の實務の圈外に立つて居りまする一般の國民、殊に敏速なる事件の處理を必要と致しまする實業界



等に於きましては最も痛苦を訴へて居りますことは、是はもう申上げる迄もないことでありましてどうかして此弊を救はねばならぬと云ことを痛感した結果、色々裁判所方面に於きましても、或は辯護士各團體と屢々協議を遂げまして、現行法の範圍内に於て出来るだけ訴訟法の改良をしたいと云ふことは年來努めて居る所でございます、司法省に於きましても、度々此點に付きましては歴代の各所長や検事正等に對しまして訓示をなしまして、又度々各監督官等の意見も徴しまして何とか改良の方法はないかと云ふことで、屢々工夫を重ねたのでございます、がどうしても是は法律を改正し、而して同時に此工夫を一新いたしまして、新たな努力を致しまして、新たな知識を以て之に向はなければ十分の結果を得ることは出来ないと思ふことは、夙に感じた所でございまして、そこで前に申しましたやうな手續に依りまして、實際上の経験を積み學理上の研究を重ねられました諸大家が、心血を注がれまして、さうして多年の推敲を経て茲に一つの案が出来上つたのでありますから之を一つ速かに實施いたしまして、さうして訴訟の弊を救ひたいと云ふ熱心なる希望を持つて居る次第であります、此手續上のことは申上げるまでもないことでございますが、單純な理論の問題ではございませぬ、實際の便利と云ふことが最も主なることのやうに思はれます、でありますから徒らに茲に色々、人に依つたならば、斯うやつたら宜いだらう、或は斯の通りにしたら宜いだらうと云ふ方策に付きましては、議論はあるでありませうけれども、それを闘はして居りまして、其爲に

此實施を延べると云ふやうなことになりましては、甚だ遺憾に思ふ次第でありまして、是が茲に成立ちました以上は速かに之を實施いたしまして、而して此當局は無論是で好成绩を挙げ得ると云ふ確心は持つて居りますけれども實際の結果と云ふものは是は理窟ではないのでありますから、或は多少それに改良を要する點が實際の上に於て是は起ることがなきを保せないのであります、其際には速かに其實驗に基いて、局部的の改正を進めて行くと云ふことに致します方が、今茲に更に論議を重ねますよりは……此案を修正する爲に公表いたしましたして論議を重ねますよりは、此方が訴訟界を救ふと云ふ上に於ては効果が多いであらうと云ふことで、今年更に延べて而して更に此案を推敲した上に議會に提出すると云ふ、さう云ふ辯護士會の意見には同意いたし兼ねます次第でございます、それから次には此案は現行民事訴訟法の殆ど全部、五編までの法でございますが、殆ど全部を改正すると云ふことになつて居ります一體此民事訴訟法は二十三年以來頗る古い法律であつて、此法典の取扱には總てが習熟して居るのである、之を俄に此處に全部を改造すると云ふことは甚だ不便を感じる、又必しも全部の改造をする必要はない、現行法に於て改むべきものは無論あるが、それは其部分々々を改めればそれで宜いのである、であるが故に、是は一部改正の形に於て之を提出する方が至當であると云ふことが、もう一つの御論點に相成つて居ります、で大法典を全部改造すると云ふことは、成程是は誠に大掛りな仕事でありまして、餘程の日子を要する點もあ



りますし、容易に之をすべきものでないと云ふことは誠に其通りであります、所が此現行の民事訴訟法に付きまして、斯う云ふ關係がありますから其點を特に御諒察を頂きたいと思ひます、二十三年に出来たものでありまして、其當時の法律としましては舊民法が二十三年に出来たのであります、舊民法が二十三年に出来たのであります、舊刑事訴訟法が二十三年に出来たのであります、舊刑法は二十三年に出来たのであります、是等のものは丁度條約改正の際に、日本の法典を全體に於て整頓すると云ふことの必要の爲に改正せられることに相成りまして、先づ民法が二十九年、三十年と、此二度に出来まして、即ち三十一年より今日の所謂新式の法典と云ふものに變つたのであります、商法は一年遅れまして三十二年に現行の新商法に變つたのであります、此刑事訴訟法は大正十一年に新刑事訴訟法に變つたのであります、それで法典調査會で民法、商法此實體法だけは直ぐ改正の上實施せられました、當時未了になつて居りました今の刑事訴訟法の如き、或は民事訴訟、破産法のやうな斯う云ふ手續に屬しますものは如何なる意味でありましたか、後廻しになりました、民訴、破産法等に付きましては草案は纏まりましたけれども、それを公表された儘で法典調査會は廢止になりました、それから法律取調委員會が出来まして、而してそれ等の法典調査會の遺業を繼承することになりました、其時に民事訴訟法も一つ改めなければいけない、と云ふのは、前の引續きから……四十四年から前に申しましたやうな民訴の改正が初まりましたと云ふことになつ

て居ります、今日に於て考へますと、もう手續法、破産法も、大正十一年に出来上りました結果、手續法も大體新式の法典になりました、民事訴訟法のみが取残されたやうな形に相成つて居ります、是はどうしても外の全體の法典と調和を取りまする爲に、全部之を改めると云ふ必要は大いにありますものと思ふのであります、而して此全部改正を致しますることに依て、先づ初めて日本の法典の大體が新しい法典になると云ふやうな譯であります此民訴に付きましては、大法典ではありますけれども、さう云ふ沿革もありませんし、他の法典との關係もありますし、全部改正の方が頗る當を得て居ると云ふやうに思つて居ります、尙ほ其上に附加へて御耳に入れて置きたいことは、前に申しましたやうに、所謂民事訴訟の弊と云ふものをどうしても今日改めぬと云ふと、民事訴訟法と云ふものゝ社會の信用と云ふものを十分に維持して行くことは誠に難儀である、少し申し過ぎかも知れませぬが、私としては殆ど左様にまで考へて心配をして居るのでございます、そこで度々現行法の下に於てもまだ相當の改良の餘地があると云ふことで、實際上の取扱ひの上に於ても改正の餘地があると云ふことで努力を致しましたけれども、どうしても是は一般人の心を新にすると云ふことは誠に必要であると云ふことからして、矢張り此法典も全體を茲に改めまして、而して同時に此法律の改正の趣旨竝に民事訴訟と云ふものは斯く斯くの通りのものである、斯う云ふ風にしてやるものであると云ふことに付て、一般の國民に於て亦相當の理解をして貰ひたい、又それに對して司法當



局と致しましては相當の努力をしようと云ふ覺悟であります、それに依りまして此法の改正と共に、此訴訟社會の進歩改良を圖りたいと云ふ考へであります、旁々是は一部改正と云ふことよりも此全部の改正に致したいと云ふことにした譯でありまして、又既に此處まで全部の法典が成立つて來て居りますので、今一部改正が可なりと致しまして、それに逆戻りを致しまして、一部改正の方に向ふべきものであると云ふ論には、如何にも首肯することが出來ない次第でございます、そこで案の内容に入ることになるのでございますが、準備手續の點、是も辯議士協會の意見の中に現はれて居ります點であります、是から申述べたいと思ひます、唯今司法大臣より述べました通りでありまして、準備手續に付きましては私より蛇足を加へるも如何かと思ひますが、順序でありますから簡單に申し上げたいと思ひます、唯今の訴訟の實際を見ますと云ふと、訴狀が此處に出て参りますれば、それで其訴狀一本で茲に公判と云ふものが開かれると云ふことに相成るのであります、そこで公判廷に於て原告側の方より訴への趣旨と云ふものを説明を致す、斯う云ふ譯になります、そこで其説明をすることに付きまして色々疑問が起る場合も少くないのであります、其疑問に付ては一々其當事者より辯解をする譯に相成りますが、場合に依りますと其席を以て即座に完全の辯解をすることが出來ないが爲に、原告の主張事實の説明未了の儘公判を終りまして、更に他日を期して其説明の補充をしようと云ふやうになりますことも少くないのであります、ですからそれをやるに付

て既に數回を費すと云ふやうなこともあります、而して又今度は被告側は其原告の主張説明完了するのを待つて、初めてそれに對抗するの地位に立つのであります、故に原告側の申分がまだはつきりしない中は、被告と致しまして如何なる所にそれに對應をして宜しいか、態度を極めることが困難でありますのは、是は申すまでもない次第であります、そこで數回の辯論の後に、今度は被告側の「ケース」を陳述すると云ふことに相成るのであります、是も中々むづかしい相當に込入つた事件になりますれば、一回で済みませぬで、回を重ねると云ふことも少くないのであります、それで始めて茲に兩方の訴旨主張と云ふものが明確いたしました後に、始めて今度は争點に關する立證と云ふことに相成るのであります、それで其立證と云ふものも、場合に依りますと必しも原告側被告側一時に其立證を集中すると云ふことになりませぬでも、一部分づゝ立證する、或は其立證の結果に依つて更に又證據を探して立證をする、と云ふやうな事も相當にあるのであります、又場合に依りますると云ふと、大體是までの審理の結果、原被告兩造の主張と云ふものは自から分ることに相成りまして、それに基づいて審理を進めて居ります後に至つて、新しい茲に争と云ふものを持出すと云ふことも是もあるのであります、勿論當初に於て持出すことの出來ない事情ありしものは、是は無論已むを得ぬことではありますが、初めより分つて居る事柄でも、もう審理が相當に進みました後に至つて新しい主張がこゝに出て來るそれから又それに對して證據の準備をし取調をする



と云ふ必要があるのであります。其爲に訴訟が頗る多岐に亘つて来る、或は後の主張が早く出て居つたならば、是までの調と云ふものはせずに宜かつたと云ふやうな事も起つて来るのであります。旁々それ等の爲に甚だ此審理の進歩を害すると云ふことが是が一つの弊であるのであります。でさう云ふ譯でありまして、全く先づ準備不十分の儘訴訟の公判を開きまして、公判で以て公判を進行しつゝ準備を亦進行して行くと云ふやうな風に相成つて居ります。其爲に實際の状況を見ますると云ふと、或る一事件を、裁判所が其公判を開きまして、其事件に付いて審理を進め得る此審理の進度と云ふものは、頗る少ないものであつて、少しばかり調査を……審理を致しますれば、其以上のことは次回に之を延ばすと云ふやうなことが多いのでありますから、其一事件に付いて片口を立てまして、相當の程度まで審理を進めて行くと云ふことがなかく行はれ悪いのであります。其結果裁判所に於きまして、例へば一日に十件位の審理の時間があると云ふことになつて居りましても、其各事件と云ふものが僅かづゝにしか進行しないのでありますから、集中すれば十件若くは五六件と云ふ振合の所でも、或は其倍数以上も事件に入れて居る、さうして審理を開くと云ふやうな譯に相成りますので、従つて中には全部それが審理をされると云ふことになると、審理が充分終へないと云ふので、多少は其間に或は延期をしないと云ふやうなことを幾分そこに見込んで事件を掛けると云ふやうな風に相成つて居るのであります。さう云ふ風に相成りますると云ふと、如何

にも此訴訟の審理と云ふものが、だら／＼になりまして、例へば今日證據の……證人の調べを致しまして、又それが相當の期間を経て更に次の證人の調べをする、と云ふやうなことで、長きに亘つて居りますると云ふと、或は其間に於て人も更はると云ふこともあります。さうすると云ふと、今度は新しき主任の者は……係りの者は、其證人を自から調べたのではない、それは調書に書いてあるそれを見まして、さうして自分の心證を此處に形づけると云ふ風なことになつては、即ち名義上は口頭辯論を聽いて裁判所で判断すると云ふことになつて居りまするけれども、唯今申しましたやうな準備不十分の結果、公判の審理が長びくと云ふ其必然の結果として、全く書面と云ふことが主になつて、而して直接に調べたものではない、證人等の調をせなかつたものが、其調書に依つて判断をされると云ふが如く、まあなる譯であります。審理の適正の方から申しましても、經濟の方から申しましても、頗る不便利を感じて居る次第でありますから、そこで是は一變いたしまして公判を開く前に準備をされると云ふことが最も必要であると云ふことから、此の準備手續と云ふものを設けましたのでありまして、即ち訴狀が出ますれば直ちにそれに依つて公判を開くと云ふことを致しませぬで、判事の一人を特に命じまして、さうして、其人が、公開をせない特別の極く簡易な方法に依りまして、而して其訴狀に付いて説明を求める、それから相手方にそれに對する所の答辯を求める、私は英吉利で此實際の状況を見たのでございしますが、机を此處に並べまして、而して



原被兩造竝に其係官がそこに机を並べてさうして極く簡易な手軽な方法で、碎けた方法を以て、此請求の趣旨は此處はどう云ふ意味であるか、此處は御前の意のある所が解り悪いが、どう云ふ風になつて居るか云ふやうに簡易に確かめる、さうして相手方の方に、貴方の方は原告の主張に對して何處まで争ふかと云ふことを確かめる、洵に手軽な方法で頗る適切な方法と私は思つたのでありますが、然らば此點が結局争點になるか、左様であると云ふことを調査に留めまして、然らば證據はどう云ふものがあるか、私の方は然らば是だけの證人を申請いたします、證據は斯う云ふ書面がある、其書面は相手方に之を見せて、相手方が其書面を認めるかどうかと云ふことを更に尋ねる、で相手方が此の書面を認めれば宜しいが、認めなければ然らば自分はそれに對する立證の方法を講ずる、斯う云ふ證人を申請するとか、或は他の斯う云ふ書狀があるから之を以て立證すると云ふことの、證據の準備をそこでする、斯うして立てる所の方針を立てることが出来る譯であります、と云ふやうなことで争點を豫め決める、而して證人と云ふことも豫め雙方から申出をしまして、公判を開く前に其證人を呼んで置くのでありますさうして公判を開きます時は、是は普通の公判でありますから、全體の判事立會の上、原被兩告の主張を聴くのであります、其時には主張は悉く整理されて居りますから、其主張の意味はそこで解らないと云ふやうなことは殆んどない、雙方の主張と云ふものは悉く明細に且つ秩序立つて陳述と云ふものが出来る、それに基いて其争點が裁判

の前に明確にされますから、それに付いて既に呼んである所の證人を調べる、或は他の官廳等から取寄せる必要ある書類ならば、其取寄せること等も成たけ順を追ふて、成たけ豫めやつて置くことになつて居りますから、其書類調、其他又證據書類であれば其證據書類を出して調べると云ふことに致しまして、證人は茲に訊問を始める、でまあ英吉利の状況を見ますと大概の事件までは即日に公判の審理を終るやうになります、餘程の證人の多い事件でも二日、三日も掛ると云ふことは、滅多にないであります、そこで以て全體の訴訟の材料判断の材料と云ふものが一時に裁判所の前に展開いたしました、そこで裁判官が全體の資料を考慮して、さうして其眞否を判断すると云ふことに相成りますので、是が即ち辯論を聞いて又證人の調べを自らして、而して自分の頭に映じた所に依つて判断すると云ふことの實を擧げる所の方法であらうと思ふのであります、英吉利は相當前からやつて居りますが、千九百七年でありましたか、十年でありましたか、埃太利の民事訴訟法も此方法に則りまして而して十分なる成績を擧げて居ると云ふことであります、どうしても此準備を前にすると云ふことが必要である、現行法に於きましても込入つた計算上の問題があります時は此準備手續をやることになつて居りますけれども併しながら今申しました事件に限つて居ります、必しも計算事件ばかりではない、相當込入つた事件と云ふものは悉く準備するのが必要である、無準備で公判を始めると審理上誠に困難を來すと云ふ所から此現行法の準備手續と云ふものを擴張いた



しまして、さうして區裁判所では先づ事件が簡單でありますから準備手續はやらない、地方裁判所に於きましては先づ相當込入たものと見られますから原則として準備手續をする、併しながら何かにも準備手續をすると云ふ譯のものでは無論ないのであります、勿論地方裁判所の事件に於きましても訴訟の金高は多くても中味は誠に簡單なものも頗る多い、或は證書爲替事件と云ふやうなものに於きましては頗る簡單であります、さう云ふものが頗る多い、事案は簡單でありますから準備手續と云ふものをしないで、直接に審理に入ると云ふ此兩様の便法を設けまして、而して其手續を適當に運用して行きましたならば、頗る效能があるだらうと思ふのであります、ちよつと申し落しました其準備手續に於てちやんと申述べて居りませぬ事は、公判になつても新たにそれを持出すと云ふことは先づ是は原則として之を止めると云ふことになつたのであります、是がありませぬと云ふと準備手續と云ふものの效能が、詰り筒抜けと云ふ點に相成りますから準備手續に於て主張して居る事、持出して居る所の書類以外のものは、是は公判に於ては先づ原則として之を認めない、而して準備手續に於て充分其整頓をする併し之も何も沒義道に當事者の出す訴訟の資料と云ふものの提出を拒むと云ふ意思是毛頭無いのでありますから、格別訴訟の遅延にならない、或は其當時別にさしたる過失なくして提出することが出来なかつた、或は事柄が後から生じて來たと云ふやうなものに付きましては、それは適當に斟酌いたしまして、後から主張することも許すと云ふことが寬嚴

宜しきを得ましたならば、此訴訟の手續と云ふものは頗る宜くなりはしないかと云ふことを大いに考へる次第であります、辯護士會の意見も誠に尊重する次第でありますけれども、是は一つ是非政府の案に賛同されたいものと云ふ希望を私は辯護士會の方に向つても特に持つて居る次第でございます、それから次は闕席判決の廢止であります、是も此案の要項の一つであります、辯護士會より提出に相成つて居ります意見書にある項目の一つでありますから、丁度此處で申し上げたら宜からうかと思ひます、闕席判決は御承知の通りに當事者の方が裁判所に出ない、即ち闕席をすると云ふことに對する一つの制裁的意義を持ちまして中味の審査をしないで先づ、全然せない譯ではありませぬが被告が闕席の場合なれば、原告の訴旨が事實であるかどうかと云ふことの審査をしないで、先づ原告の云ふ通りの事を被告が認めたと云ふやうに、法律でそこに擬制を致しまして而してそれに基いて裁判をする、原告が若し闕席をしたら原告の訴を却下する、中味の如何に拘らず、原告の訴へを却下する、斯う云ふ中味の事實に付きまして別に審査を加へないで裁判をする、是は一つの闕席に對する所のまあ制裁的の意味が含まれて居ると云ふことに承つて居ります、さう云ふ譯であります、裁判其ものとしては、無論本當の正否を斷ずると云ふ意味に於ける裁判其ものとしましては甚だ物足らぬものには相違ないものであります、闕席者に對する制裁と云ふ所からは是は起つたものと思ひます、所が此闕席判決に付きましては實際の取扱ひの結果として我々考へる所に依りますと、必し







ば其證據を斟酌して内容的の裁判をすると云ふことが、寧ろ適當ではないか、而してそれに不服があれば、訴訟を提起すると云ふことになるのが至當であらうと思ひます、闕席判決をして故障があれば一躍元に戻つて對審判決をする、而してそれに對して上訴すると云ふことは無駄なことであらう、又裁判所は、審理の方から申しましたも、相當審理が進みまして所謂審理佳境に入つた際に、ちよつと闕席するとまた審理を中斷されて、また審理を新にすると云ふことは面白くないことであらうと思ふのであります、それで茲に一つ申上げて置きたい點は、一説に依りますれば、闕席に依つて其儘で事件が済むものが相當にあるのではないかと云ふことで、茲に統計も擧つて居りますが、成程相當にあります、で茲にあります所の統計の數はまあ多少の例外はありますけれども、兎に角數字の問題は別と致しまして、相當の數が闕席判決其儘で確定をして居ると云ふことはありますが、所が是は前に私が申上げました通りに其闕席者に於て眞摯に争ひをすると云ふ其理由を有たない者が、先づ多數を占めて居ると認むべきであらうと思ひます、眞摯な争ひの理由を有つて居る者は、闕席判決に依つて満足をすると思ふことは無いと見て宜からうと思ひます、それで債務はある、併しながら今拂ふことは不利益である、或は拂ふ能力が無いと云ふやうな、極く事件の中味としては當事者間に於ては明瞭な事件で、殆ど争ふ所の理由を有たぬと云ふやうなものが、多數を占めて居ることを想像するのは決して無理でないと思ひます、さう云ふ事件は闕席すれば闕席判決と云ふものに

なりますが、斯の如き事件でありますれば、此新案の法に依りまして訴訟の審理を致しましても極く簡單明瞭に審査は済むのでありますから、闕席判決の制を廢した爲に、それに依つて面倒が生ずると云ふことはなからうと思ひます、即ち闕席判決の故障を申立てないで泣寢入をすると思ふやうな者であれば、矢張り中味の這入つたやうな裁判に對して上訴をすることは無論ないであらうと思ひますから、無論是は簡單に片付くと云ふことは言へるだらうと思ひますからして、旁々闕席判決の改正と云ふことは、眞摯な訴訟に付ては茲に延滞と云ふことは憂へぬのであります、或はちよつと他に移りますけれども、辯護士會の意見の中にありますから申しますが、今日の狀態に於ては訴訟の延滞が無い、訴訟が延滞して居ると云ふことを憂へるのはそれは杞憂に屬する、決して訴訟は延滞して居ないと云ふことを計數の上に於て茲に出して居ります、是も此數字上の問題に付きましては深く論じませぬが、相當多數のものが早く片付いて居ると云ふことは之は片いて居りますが、唯茲に表にありますことに付て一言御参考の爲に申上げて置きたい思ひますのは、統計自身が或は適切ぢやないかと思ひます、それは何も茲に掲げてある表の罪ではないと思ひますが、其點は幾重にも御諒承を願ひたいと思ひますが、今日の統計の立方を見ますと、事件が茲に起りましても、其事件が起つてから愈々確定判決を経るなり、或は其他の方法で完結を告ぐる迄の期間を審理期間として見て居るのでありませぬで、一つ訴訟が起りまして、それから闕席判決をしますれ



は其闕席判決をするに至る迄を一事件として居りまして、故障が茲に起つて來ると故障に依つて新しく辯論を遣り直す事件は、統計表の上に於ては別事件となつて居るのであります、斯るが故に其事件に付て一回闕席判決をやつたとしますれば、それが例へば半年づゝ假りに掛つたとしますると闕席判決迄半年、それに故障があつて事件完結迄半年と云ふことになりますると、其事件は統計表に二件に擧げられました、各々半年で結了して居ると云ふ譯であります、併しながら訴訟の當事者の方から見まして、闕席判決になつても其事件は済んで行くが、更に故障があつてまた事件が繼續して居ると云ふことになりますれば、其事件は済んで居ない、それで其事件を提出してから事件が確定判決を得るに至る迄の間を、假に今申上げます例に付て見ますと、是は一年掛つて居る云ふことに相成るのでございますので、是は現在の司法統計自身或は適切に非ざることを申上げること歸著するかも知れませぬか、さう云ふことに相成つて居りますから、之を事件の起りましてより其事件が愈々本當の意味に於て解決を告げる迄の間の計數を取つて見ますと、相當に事件が延びて居ると云ふことを考へなければならぬと思ふのであります、併ながら相當に多數の事件が比較的短かい期間で済んで居る、或は取下げに依つて済んで居る、和解に依つて済んでゐる、或は判決に依るも短い期間で済んで居るものもある、又闕席判決に依つて済んで居るものも大體半分位あるのであります、今のはちよつと取消します、闕席判決で済んだものは半分ではありませぬで、缺

席と對席と半分々々になつて居ると云ふことを申上げます、其闕席判決で済みまする數も相當多數に上るのであります、併ながら所謂眞摯の争に依る、相當兩方とも争ひのある事件と云ふものと云ふものは、是は中々缺席では済まず、又容易に短かい期間では解決して居ないと思ふのであります、それから此數に於きましては相當の數が短い期間に於て済んで居ると云ふ爲に今日訴訟社會に於て吾々が樂觀すると云ふことは事實に反することであらうと思ひます、或は長く掛つて居る事件の數と云ふものは、歩合から申しますれば割合に少いと云ふことも言へますが、併し其歩合が假令少くても長く掛る事件と云ふものは質に於て調べて見ると、簡單な、輕微な事件が數多の事件に一つを以て匹敵すると云ふ風なものであらうと思ひます、單に多少數と云ふものに於て事件が早く片附くと云ふ形跡がありましたも、決して我々は樂觀を許すべきものでない、比較的或は少數である其事件と云ふものが眞面目な争ひのある事件である、それが如何にも長い、で數に於て少くとも實を以て考へますと、どうしてもそれ等の事件と云ふものはもう少し早く片附ける所の工夫をしなければならぬと云ふことを痛感して居る次第でありますから、今日訴訟の延滞と云ふものは心配するに足らないと云ふことには、如何にも我々當局としましては首肯することが出來ないのであります、又寄り／＼各方面の人より豫て承つて居りますが、如何にも民事の訴訟と云ふものがだらしが無くて早く決まるものでない、或は局外の方々よりして常に其批評を聽いて誠に恐縮して居るやうな



次第でございます、さう云ふ事件と云ふものは今の數に於て然らば、簡單に済む所の事件よりも多いかと云ふことになりますればそれは少いのでありますが、それ等の少い事件、さうして本當に争ひのある事件、是は誠に當事者が早く解決して貰はなければ困ると言つて皆慨いて居る所のものであると思ひますから、どうしても今訴訟の延滞と云ふことは之を救はなければならぬと云ふことを考へて居ります、それから延滞の問題でありますが、御手許に廻してあります表で、此表は不完全でありますけれども、不完全ながら過去九年間のものを三年づゝに區別致しまして、其訴訟の進行の状況を見ますと、矢張り段々訴訟は幾分遅れ勝ちの傾向を呈して居ると云ふことは御覽を願へば御諒承に相成ることと思ひます、旁々以てどうしても訴訟をもつと經濟的にやり、手廻しを良くして而して早く片付け、併ながら拙速を尊ぶものでない、審理を適正ならしめ、裁判所に本當の事實が明確に出来ること云ふやうな方法をどうしても執らなければならぬと云ふやうなことが、是が準備手續きを設けました譯で、其外まだ色々ありますけれども、其法律を今度造りました一つの大きな理由になつて居る次第であります、其處で次は爲替訴訟の點でございます、最も辯護士會の意見にありますから、一言申上げて置きたいと存じます、今度の案に依りますれば、爲替訴訟の手續は之を廢止致しまして、普通の手續に依ることと致したのであります、そこで此爲替訴訟或は證事訴訟と申しますものは、一口に申しますると例へば手形の權利を有つて居る、手形の義務者が其義務

を果さないこと云ふ爲に之を請求しますに付て、其手形を證據にして訴へを起すと云ふことになつて居りますので、そこで相手方の方で手形に付て争ひが無い、又其外に法律上の何等の抗辯もないと云ふやうな場合には、手形一本で裁判が出来ること云ふことで始めた所の手續であります、併ながら相手方の手形に付いて争ひがある或は其外に又抗辯を有つて居る、斯う云ふ場合に於ては手形に付いての争ひがありますれば、通常の訴訟に引直して手形の立證から掛らなければならぬから、どうしても手形訴訟で進行する譯に參らない、途中で普通の裁判に引直すと云ふことに相成るのであります、そこで原告側には今の手形一本、手形の外には證據を許さない、同時に被告側にも何も其證據に依る證據がなければ反證を許さぬと云ふことで、反證を此處に制限を加へまして、さう云ふ證據以外には何等か抗辯があつても、通常の訴訟でやらなければならぬ、爲替訴訟ではやらせないこと云ふことにして、制限を付けて、一應手形だけで事件を完結して、争ひや何か後に残るものには付きましては其手形の裁判に例へば被告を負かした、被告は原告の手形の金を拂ふべしと裁判が完結する併ながら、此外に事件に付て何か主張すべきことがあるならば、それは通常の訴訟手續で以て之を争ふと云ふことになるのであります、所謂留保附きの裁判をすると言ふことに相成るのであります、そこで留保が附て居りますけれども、一つの裁判でありますから、強制執行も出来れば何でも出来るのであります、此留保に基いて、例へば被告が負けた場合を考へますと、被告の方から



更に審判を願ひますれば、何時でも其事件を取上げて審判をしなければならぬと云ふことになつて居りまして、それには日限が附いて居らないのでございますから、一旦強制執行をしてそれを取つたと云ふ場合には、其審判の結果、元々の通り同じ裁判になりますれば差支ないのでありますけれども、若し抗辯に理由があつて元の裁判が破れると云ふことになりますと、既に取上げた所のものを更に被告に返還をしなければならぬと云ふやうなことになつて居るのであります、手續としましてはきつぱり其所で以て事件を完結すると云ふ所迄至らない其譯は兩方の立證を限定した結果であるのであります、さう云ふ極くきつぱり決めることの出来ない一つの手續であるのであります、そこで證書訴訟爲替訴訟と云ふことに依つて事件の完結するものは相當にある、然るに是は至極簡單の方法で済むのであるが、之を廢めて仕舞つて普通の手續に依ると云ふことになつたならば、争ひをしないと云ふ、是が辯護士會の意見でありまして、誠に御尤もな御心配と思ふのであります、又此原案の方の考に依りますと、此説は或る訴訟の手續を現行の法律よりも相當に簡便に致したのであります、先づ手近い所で例を申しますと、訴訟が此所に出ましてから、辯論の期日を決めます間には、二十日の日を原則とすると云ふことになつて居ります、今度の法律に依りますれば、それ等の猶豫を置かないと云ふことに、必ずしもそれは法律上置かなければならぬと云ふことではない裁判所が適當に定めると云ふことになつて居るのであります、でありますから、現行の法律其儘に

して置いて二十日の猶豫を置くと云ふことに比較しますれば、如何にも爲替訴訟の方が期日が極く短くて開くことが出来ることになつて居りますから、差別がありますが、今度は如何やうにも適當に期日は決めて早く済むべき事件ならば早く辯論の期日を決めることが出来ますから、其差は誠に少く相成つたやうな次第であります、而して此爲替訴訟の方が済んで居ります所の状況を、是は爾する方が其成績を見るのには最も手近であらうと考へるのであります、此爲替訴訟で以て済んで居りまする事件の済み工合を能く調べて見ますと、闕席判決で済んで居りますものが頗る多いのであります、普通の訴訟に於きましてはまあ半々位に闕席判決がなつて居りますが、爲替訴訟になりますと半々以上、六分位は闕席で済んで居る、是は一體何を物語つて居るか、即ち一方の方に詰り被告側の方に殆ど何も争ひが無いと云ふものであらう、即ち闕席で以て満足する、原告が即ち手形上の權利を主張して手形の辨済を求めると云ふ趣旨に對して、缺席をして其儘に泣き寝入つて居ると云ふことでありまして、もうそれに對しては内々に於て何等の異議がないものであると云ふことを想像するに難くないであらう、で殆どさう云ふやうに被告に於てそれに對する争ひの意思もなければ、争ふべき所の餘地も持たないと云ふやうなものが、是が多々あると思ふ、で普通訴訟よりも一層多くの場合に於て爲替訴訟と云ふものは闕席判決で済んで居る、でさう云ふ譯で闕席判決をして居るのであります、其前にも済んで居るかどうか分りませぬが、闕席して済んで居ると云ふ場合が多い



そこでさう云ふ簡略な訴訟でありますならば、今度の案に致しましても期日を成るべく早めて、さうして簡単に済ますと云ふことが出来るのでありまして、無論それに對して異議のある筈のものでありませぬから、其儘簡単に済んで来て居る、斯う云ふことに考へるのであります、で證書訴訟の本然の効果と云ふものは今現はれて居るかどうかは付ててありますが、即ち對席判決をするかどうかと云ふことに相成るのであります、無論缺席判決の方は、それは證書訴訟としての本来の效力を發揮するものではないが、如何なる訴訟の場合よりも被告が缺席判決を受けて其儘になつて居る、斯う云ふ譯であります、一面に於きまして爲替訴訟等がどう云ふ風に一體進行しつゝあるかと云ふことを更に側面の方から觀察いたしますと云ふと、今の缺席の判決の多いと云ふことの外に、三箇月以上此訴訟が……證書訴訟等が係つて居ります所の數と云ふものも相當に多いのであります、三箇月以上も係ると云ふことになりますと云ふと、是も亦證書訴訟、爲替訴訟としての本来の目的は餘りに完全に達したものは云へない、即ち極く早く簡単に済むと云ふのが、之が目的でありますから、それで以て證據を制限されて居るに拘はらず何時までも永びくと云ふことになりますれば、殆んど證書訴訟として其趣旨を全うしたものと云ふことは言ひ悪いかのやうに思ひます、さう云ふ譯でありまして、試みに此通常訴訟の方の審理の具合と對比して見ますと云ふと、是はあとで御廻し致しても宜しうございますが、大正十二年の審理進行中の事件に付て調べて見ますと云ふ

と、通常訴訟は三箇月以上のものは先づ六割七歩、爲替訴訟等は五割五歩、幾らか少なうございませうが、矢張り五割五歩の事件と云ふものが三箇月以上になつて居ると云ふやうなことになつて居りますが、それは大正十二年、十三年平均を見ましても略々之に近い數になつて居るのでありますから、是はまだ進行中の事件でありますから、是が完結するに付きましては、もう少し日限がかかるものと見なければならぬのであります、而して缺席判決で済む所の事件が頗る多いと云ふことになつて居りますから、是等の點から見まして、此證書訴訟と云ふ方は今日其證書訴訟としての完全の使命を達して居らないと云ふことを想像するに難くないと思ふのであります、で今度は前に申しましたやうに手續も簡略になつて居りますから、旁々斯う云ふものを置くの必要はあるまい、さうして若し被告に於て争ふの意思があるならば、もう訴訟をなにするかと云ふことに依つて直ちに證書訴訟として行き詰まつてしまふと云ふことになつて来るからして、本當の争ひのある事件でありませうれば、逆も證書訴訟で争ふことは出来ない、争ひのないやうな事件でありますれば、特に斯う云ふやうなものを茲に設けずとも、今度の簡便な方法に依つて解決すると云ふことは頗る易々たるものである、而して又争ひのあるやうな事件になりますと、判決を得ても留保になる、其判決はいつ何時どう云ふ抗辯に依つて之を覆へされるか分らない、而してそれには日限がない、斯う云ふ状態でありますから、斯う云ふことは餘り手續として面白くないと云ふことになりまますから、是は廢す



る方が宜からう、斯う云ふことから考へて見まして、辯護士會の意見もあることでありますけれども、此案と致しましては此方が至極結構であると云ふことを實際の経験より考へて居る次第であります、で辯護士會より提出になつて居りまする項目の中、主なるものは唯今申上げましたやうな所で、盡きて居るかと思ひます、其他に各箇條に付て意見も出て居りますけれども、是等は一つ案の審査の際に御参考に供しては如何かと思ふのであります、もう一つは六の點、強制執行はどうするかと云ふことが一つあるのであります、今度は強制執行の編は其儘と致しまして、裁判の手續きを變へましたに付て、必然變らなければならぬ所の事項を應急的に改正をしたに止まつて居るのであります、而して此分に付きましては此改正案が成りますれば、早急に別に委員を組織いたしましてさうして此調査を進める計劃に相なつて居るのであります、之を民事訴訟法の一部とすべきか、或は獨立の法律とすべきかと云ふことは、無論是は立法の形式に係る所の問題でありまして、議論の餘地はあるかと思ひます、此案の見る所に依りますと云ふと、裁判の手續きと云ふものと、所謂權利義務の判斷の手續きと云ふものと、出來上つた所のものを執行すると云ふ所の手續きと云ふものは、是は自ら性質が違つて居るのである、であるから必ずしも一つの法典の中に入るべき性質のものではない、で舊商法の、商法から破産法の結局獨立致しましたと云ふこと、必ずしも其趣きを一にする譯ではありませぬけれども、此際裁判の手續に付ては一編乃至五編で盡きて居る、之を獨

立の法律とし、さうして執行の方は是は大いに改革をする、而して必ずしも民事訴訟法から來る所の裁判ばかりではない、例へば公正證書等に依る所の執行、其他色々の執行方法がある、即ち財産……主として財産の方であります……に對する所の、其裁判其他命令の執行と云ふものを、而して之を適當な方法に従つて權利者に支拂うと云ふやうな此手續きと云ふものは、是は自ら別の性質のものである、でありますから、此強制執行の部分は之を別にする、又法の立法の根據としてもさうあるべきものである、でありますから旁々強制執行と云ふものは之を別にする、併ながら是も頗る今日必要なものと認めて居りますが故に裁判の方が立派でありましたも執行の方が充分でないこと云ふと、結局目的を達せぬと云ふことは勿論でありますから、之も早速調査に従事して、成るべく早く之を提出すると云ふことに致したいと考へて居ります、が併ながら前に申したやうに自ら違ひます、さうして今日の裁判の弊、訴訟の弊と云ふものを救う爲には、一編乃至五編で以て先づ其一端を實現し得ると云ふことを考へましたに依つて、一編乃至五編と致しまして裁判手續と云ふものを定め、別に執行と云ふことを極めると云ふことに致しました次第であります、それで大體は今まで申しましたことと辯護士會の意見を盡し、又此案に付きまして主なる點は盡したと考へますから其外の點に付きまして更に御質問に依りまして、私なり長島書記官なりより御答を致したいと考へます

○委員長(子爵伊東祐弘君)　そはでは今日は是で散會致します



大正十五年二月二十日(土曜日)午前十時十九分開會

○委員長(子爵伊東祐弘君) それでは是から特別委員會を開きます、前會に續いて御質問を願ひます

○河村讓三郎君 此改正案の主要の點は那邊にあるかと云ふことを論議しますするには、此改正理由書を一讀いたしたゞけでは少しまだ早きに失するのではないかと思ふのであります、どうしても案の大體に付て一應眼を通した上で質問を致しませぬと云ふと要領を得ることがむづかしきものと思ひます、それで私は其時期を俟つてもう少し詳しく御伺ひしたいと思ひますが、幸に發言を許されましたから立ちましたものでございますが、此際に私は少し質問を致します、其御答を得まするに付ては、少し御調査を願つた上でなければならぬと思ひますから、御答は追つて宜しうございませぬが、で寧ろ私は其質問と申すよりは政府委員に於て御取調べの上で御説明下さることを希望する趣旨で述べますのであります、私は此立法の變遷進化の順序と、それから實體法と手續法との關係と云ふ此二點に付て少し考慮して見たいと思ひます、近代此法典の改正を行ひました國民が何れにあるかと云ふことを考へますと、丁度獨逸帝國が統一されました後に、佛蘭西「ナポレオン」二世の勢力に依て、歐洲列國に行はれて居りました其法典に大改正を加へまして、獨逸帝國の民法と云ふ

ものが制定編成されました、それが近代での大なる立法のやうに思ひますが、此獨逸民法の出來ましたのが千九百九十六年八月であつたかと思ひますが、此民法は非常なる研究の結果、今日に於て完全の法典と認められて居るやうでございますし、又日本の民法の制定の際に大いに参考にされたやうに聞いて居ります、而して此獨逸の民事訴訟法に可成り大なる修正が千九百九十八年五月に行はれて居るやうに思ひます、丁度二年経たない中に民事訴訟法の修正を行つた、此修正は何の爲に致したかと云ふと、實體法と手續法との聯絡を保つ爲に是非とも修正しなければならぬ必要が起つたのであらうと思ふ、其修正の箇條でございますが、其修正の箇條が何箇條ありますか、それから其修正は如何なる點に付て修正を加へたのでございませぬかと云ふことが私は此参考に致したいのであります、それから果して其年月等も間違ひがありませんか、又修正の箇條はどう云ふ箇條であつて、どう云ふ所であるかと云ふことを御調べの上で御報告を願ひたいのであります、私も一二の書物を持つて居りますから、若し御必要がありますれば御眼に懸けても宜しうございます、それから其當時獨逸に於きましては此新民法を實行するに付ては裁判官、大いに有爲の裁判官を任用する必要があつて、所謂老朽淘汰の必要を感じまして、さうして此際任意に退職する者には俸給の金額を給すると云ふやうにして退職せしめると云ふ法律を出したやうに思ふのであります、それに依つて大分獨逸の裁判官の選良の目的は達成せられたと云ふことも聞いて居りますが、其法律は何に書



いてありますからよつと覺えて居りませぬが、さう云ふ法律を出したこともあるのでございますから、其時代のことも御分りになりましたならば御報告を願ひます、或は其際に辯護士法等の改正もありませんが、是は私は存じませぬが、御分りになりましたならば参考に伺ひたいと思ひます、それからは等は立法の變遷改正の順序を得たものであらうかと私は考へますのでありますが、そこで翻つて此日本の立法が如何なる経過を経て参りましたかと云ふことを考へますと、誠に残念ながら條約改正の爲に時を期してまあ無理でも法典を公布しなければならぬと云ふことでありました爲に、さう云ふ正しい順序を経て居ると云ふことが出来なかつたのではないかと考へます、そこで民法は二十四年でありましたか三年でありましたか公布になりましたが同時に訴訟法も出て居りましたけれども、此民法と訴訟法との間に、どう云ふ聯絡がありましたかよく研究が出来て居るかと思ふことを少し調べて見たいと思ひます、そこで民法は「ポアンナード」の起草でありますが是は議會の反對に遭つて解散になりましたが、更に提出したものであります、其時代に訴訟法は誰が調べて、どう云ふ風になつて居りましたか、確か獨逸人の「モッセ」でしたか案を立てました、其案が今日の訴訟法として残つて居るのぢやないかと思ひますが、其新民法の出来ます前に、訴訟法の案の方が出来て居つたのではないかと思ひます、さうして同時に之を施行すると云ふことに付ては、研究が出来ましたか餘程疑はしいのであります、何か新民法の七條か十四條あたりに法律行爲と云ふこと

を……訴訟行爲と云ふことを書く、それ位なことで始末が付いたのぢやないかと云ふ疑を持つて居るのであります、私は丁度其調査の最中海外旅行中でありまして、よくは存じませぬが、丁度歸朝いたすと直ぐに略々法律は出来上つたが、まだ人事訴訟手續法と非訟事件手續法と云ふものが……法典全體と云ふものが出来て居ない、急に之を作らんければならぬから、作れと云ふ命を受けまして、故人になりました高木豊三君、富谷君と私と三人で、人事訴訟手續法を急に起草したことを記憶して居ります、それは議會に出ましたけれども、審議されずに其儘になつて居つたやうな有様であります、さう云ふ有様でありますので、今日の訴訟法と民法との間に聯絡がまるで付いて居らぬではないか、之を改正する必要があつたらうと思ひますが、今日まで實は其目的を達することが出来なかつたやうであります、此關係と此案の關係に付ては、自分の考へます所に依つて質問いたすと云ふことも必要が判りませぬが、それはどうも只今其時期ではないと思ひます、もう少し此案に付て政府の御説明を伺つた上でなければならぬと思ひますから、只今は唯其立法の順序といふことと、それから實體法と手續法、今申しました他に商法も度々修正されて居ります、破産法も現に度を改正いたして居ります、是は民法と聯絡が十分に出来て居る、一方訴訟法はまだ其儘になつて居るやうで、能力の規定とか中斷の規定とか最も必要な規定に付ては、是は其どれだけの調査をされてあるのか、殆どそれは了解し兼ねる點があります、それは又追つて申し上げますが、只今申した



立法の沿革に關する事實、年月等のことだけ一つ調べて、私は只今材料がありませんから、詳しく判りませぬので、御調べを願つて何時か御報告を願ひたい、此希望を申述べて置きます

○政府委員(池田實二郎君) では恐縮ですが暫く……只今河村委員の御希望に付ては、早速取調べにかゝりまするでございますが、何分古いことと、それから外國の今御申しになりましたやうな資料がありまするかどうか、一寸その所が私は今承知いたして居りませぬので、御請合いたすことは難儀に存じますけれども、出來まする限り取調べまして、相當の機會に結果を得ました場合に申上げたいと思ひます、それから先程來水上委員、佐竹委員等より御懇切なる御質問がありました、司法大臣より大體のことは御話ございましたから、私より殆ど蛇足を添へることもないのでありますけれども、唯事實上のことを一寸補足いたして置きたいと思ひます、昨日御質問がありました、殊に帝國辯護士協會の意見等もありました、旁々それに付て此全部の改正を致します所の理由事情等を述べましたのでございます、其中に殆ど述べ盡して居ると思ひますけれども、折角今日の水上委員の御質問でありますから、極く掻摘んだ所の事實關係を申述べて私より補助いたしたいと思ひます、河村委員よりの今日の御話の中にも言及されたのでありますが、我國の基本法典とも申しませぬか、重要法典の中、刑法は明治十三年に出來たのでありますが、それが明治四十年に新刑法に變つて、新式の法典になつて居ります、それから商法は明治二十三年に出來て居るのでありますが、それ

が三十二年に新商法に相成りまして、それで面目を一新して居るのであります、舊民法は二十三年に出來まして、それは成立いたしましたけれども、實施に及ばずして廢止せられました、それが二十九年と三十一年の兩度に跨りまして、即ち今日の新民法が出來て、是が新式の法典と云ふことに相成つて居るのであります、所で手續法も其際同時に改正せられる手順になつて居つたやうに記録等では見えるのであります、即ち破産法、民事訴訟法、刑事訴訟法もさうであつたと思ひますが、是等も一應の取調べは其當時出來たやうであります、今此立案の……民訴の立案の一つの基礎になりました、法典調査會の案の如きも、矢張り三十六年に成案が出て居ります、破産法も成案が出來て居つたのであります、其儘に相成つて居つたのであります、即ち手續法は結局後廻はしになつて居つたのであります、それが明治四十四年に相成りまして法律取調委員が法典調査の事業を繼承致しました、而して此民事訴訟法を取上げまして一つ改正をすると云ふ順になつたのであります、其外破産法等の調査、それから刑事訴訟法等の調査も始め、而して刑事訴訟法並に破産法は大正十一年に完成を遂げましたのであります、即ち新式の今日の法典として完備致した譯であります、唯一つ民事訴訟法のみはまだ其十一年迄には完成を見る事が出來ませぬので、残つて居る次第であります、今日の日本の重要な法典中民事訴訟法のみが全く舊慣を改めて居ないと云ふことに相成つて居ります、今日の此現行法たる民事訴訟法は矢張り廢止せられました所の二十三年の舊民法を土



臺に致しまして法文の中にも形に於ても舊民法を引いて居ると云ふ、舊民法を前提にして居ると云ふ所もある位であります、全く舊式の法典であります、それで是は矢張り改正する以上は全部の法典の形式を改めまして、さうして新しい法典にすると云ふ方が最も適當である、斯う云ふ所から、初めから全部改正する方針で來られたやうに思はれるのが事實のやうであります、それで之を終りますれば、初めて基本の法典が大體揃ふと云ふ譯に相成るのであります、其内容に付きましては、度々御説明を申し上げます通りであります、之も昨日辯護士協會の意見も出て居りましたのであります、少々協会の意見等に接觸を保ちまして、此案の重要な改正の點に付きましては略々御説明を申上げたのであります、水上委員、佐竹委員の御話の通りに、或は當事者主義であるとか、或は口頭辯論を本位にすると云ふ、さう云ふ大根本の骨組を變へると云ふことに相成つて居らぬのであります、唯さう云ふ根本の理論は先づ其儘でありますが、實際の運用上頗る訴訟の實績を擧げる上に於て不利な點があると云ふことに於て改正を加へると云ふことが、主眼になつたのであります、其中茲に比較的先づ大きいものと申しませうか、或は説明の便宜もありました理由書の前の方に特に抜出して居りましたものは、相當大きな改正の點であらうと思ひます、其中で或は準備手續の問題、先程も申しましたのであります、之等のことは訴訟のやり口を、大きな根本の理論と云ふことになりまして即ち現行法の一部とは言ひながら之を認めて居りますから、それを擴充したやう

になりますれば誠に其通りであります、之を實際の上から見ますと云ふと極く限られたる部分に之を適用して居つたものが、訴訟の先づ込入つた訴訟には全體に於て之を原則として用ひると云ふことに相成りましたのであります、而してさうなりますと云ふと、此訴訟のやり口が昨日詳細に實際的に申上げました通りに、之までのやり口とは大いに面目を一新する、手廻はしの仕方がすっかり違ふと云ふやうに相成るのであります、是等のことを蓋し大臣は通俗の意味に於て根本に掛かると云ふやうなことを申されたことでないかと考へます、理論の上から申しますれば、現行法に局部的とは云ひながら認めて居るものを擴張したと云ふことに過ぎないのであります、實際的に申しますとそれが即ち大變な關係があるので、それで以て訴訟のやり口が多分大いに變はる、而してそれを十分に實行して實績を擧げたいと云ふことに考へて居る次第であります、其外の各項目の點に付きまして、佐竹委員の指摘せられました通りに、種々の點に付きまして現行法の不備の點を補つて居る、其爲に訴訟の促進を図り、審理の適正を期すると云ふことを達したいと云ふことで來たのであります、ちよつと更に補足致したいと思ふのであります、此説明書中に掲げてあります改正の要點として、注意すべき部分と云ふことに、二三の箇條を擧げてあります、是等のことに付きまして或は是は從來の慣行で以て之を勵行すれば行くのではないか、或は又法文の解釋を少し擴張すれば行くのではないかと云ふ御意見も承はりましたのでございますが、或は精細に吟味致して見



ましたならば、一部分は或は變へて行く所が全然ないと云ふことを私が此所で斷言することは少し憚りが多いのであります、けれども大體私の見る所に依りますと、各項目は、七項目以外のものに付きましても、今日の法律の解釋を以て進むと云ふことが如何にも難儀であると云ふことで、特に法文を以て設けたと云ふことに御承知願ひたいのであります、それと此今日の法律に於ても所謂書面準備と云ふものがある、併ながら實際に於て少しも行はれない、之を勵行すると云ふことは誠に緊要なことであつて之を十分に行つたならば改正を待たずして相當の成績を擧げることが出来るのではあるまいかと云ふ御沙汰でありました、誠に其通りであります、書面を以て準備すると云ふことに相成つて居ります、所が所謂此特殊事件に付て適用されます準備手續、即ち計算事件等に用ひます準備手續と云ふ、斯う云ふ準備手續と一般に所謂書面を以て訴訟を準備すると云ふ準備とは其訴訟法の立前が大分異つて居りますので、計算事件等に用ひます所謂準備手續と云ふものは準備をしたことではなければ之を公判に於ては先づ原則として述べさせないと云ふことに相成つて居りますので、準備と云ふものは誠に適切に參るのであります、所が一般訴訟法に於きまして訴訟を書面で準備すると云ふことに付きましては、準備せねばならぬと云ふことは法の趣旨に現はれて居りますけれども、其準備せざりし人の方の其方の結果と云ふものが如何にも十分に規定せられて居らない、即ち準備せずして行成り口頭辯論で以て主張することが出来る、唯其結果として見

るべきものは相手方の缺席の際に陳述が出来ないと云ふことだけの結果になつて居りまして双方兩相對しまして、對席の上で辯論を致しまする際には、例へば豫め書面を準備して居らなくとも矢張り新しいことがどん／＼公判廷で主張が出来ると云ふことになつて居りますものでございますから、そこで幾度か裁判所或は辯護士の間で協調調停を遂げまして、十分に一つ準備書面を出すことにしやうぢやないか、さうして置かないと御互に訴訟の審理と云ふものは十分にいかぬと云ふことは困るからと云ふことで、幾度か其點に付ては骨を折つて居りますけれども、色々の事情の爲に矢張り準備と云ふものが完全に行はれない、行はれないとすれば矢張り公判廷で以て新しい事實をどん／＼述ても是は致し方がない、其結果訴訟が後れると云ふことに相成つて居るのであります、是は如何も通弊として嘆じて居る次第でありまして、監督官等……裁判所の所長、院長と云ふ監督官の會合の際にも屢々此事は協議を致しまして、又任地に歸りまして地方の辯護士團等とも協調を遂げられました、確に行はれて繰返して來たですけれども、どうしても其結果は思ふやうに行かぬ、是は法律を改正をして準備手續は念を入れてやるが、其念を入れてやつた所の準備手續に於て主張せざりしことは、固より公判廷に於ては原則として述べさせないと云ふことまでせなければ、此準備と云ふものが本統に整ふと云ふ譯に行くまいと云ふことに必要を認めまして出來ましたのが、今度の案に於ける準備手續であります、即ち事柄は、理論の上から申しますれば現行法、既に計算事



件に付て認めて居ります所のものを一般に擴充したに過ぎないのでありますから、敢て新機軸を出したと云ふ譯でありませぬ、實際の働きから申しますれば、局部的のものを先づ大體全般に於て之を行ふと云ふことになつたと云ふこと、訴訟のやり口に於きまして餘程大きな此處に違ひが參る、而して是は大變必要なことであつて、まゝ是非一つ實績を擧げたい、斯う云ふ考であります、勿論裁判所、當事者側に於きまして矢張り教育をしなければ法律のみに依つて完全な目的を達するものとは勿論考へて居りませぬが、先づ茲に法を立直しましてさうして努力をしたいと云ふことを考へて居るやうな次第であります、大體先づ左様な状況でありますから、此處まで全部法制を改正する、改造すると云ふ方針の下に既に茲に成案を得まして、其成案を得るまでの手順等に付きましては、或は又關係せられました委員の方等に付きましては昨日詳しく申上げて置きました通りに十分に學識、十分に經驗を有つて居られる方がそれを傾注して、拵へ上げられたものであります、此全部改正の成案に基きまして、成るべく一日も早く之を實施し而して又實際の適用をやつて見せし上には或は又工夫を要する所の點も生ずることがないとは申されぬ、今日に於きましては十分の成算は有つて居りますけれども、實際やりました上には或は是は手續上のことでありますから、多少の亦改正を要する點もあらうかと思ひます、それ等の點は是より一部改正の方法を立てまして、さうして逐次に時に應じ必要に應じて直して行く、さうして成るべく訴訟の實際を適當に改良

して參ると云ふことにする方が最も適當ではないか、此處まで此成案と云ふものが出來て參つて居りますものにて、一部の改正の方法を以て更に別の十分の形にする方が宜いではないか、と云ふことの思召も一應は御尤でありますけれども、此處まで來たものゝ論と致しましては、どうか此全部改正の案を持ちまして速かに御審議を御進め下さることを私として特に希望いたしましたのであります

午後零時十五分休憩

午後一時四十分開會

○委員長(子爵伊東祐弘君) それでは是から午前引續いて特別委員會を開會いたします

○志水小一郎君 唯今尙ほ質問の時期でありますから、私の述べたことは或は不適當かも知れませぬが、質問と言へば質問、意見と言へば意見であらうと思ひますから申し上げます、本員は唯今段々承はりました、此改正は申さば枝葉末節に付ての改正ではないか、一つも根本義に觸れては居ないではないかと云ふ御意見であります、如何にも成程さうも聽えるのであります、併ながら退いて考へると云ふと、第一乃至第六として掲げてあります所のものは根本義と言へば根本義、それのみならず第六項以外に掲げてあります所のものをも、我々は根本義と云はれるものもありはせぬかと思ふのであります、それでも根本義云々の御質問は、根本義には觸れて居らないではないか、枝葉



末節ではないか、左すれば斯う云ふ大袈裟な改正をせぬでもつと手頃な手短かな改正の方法があつたのではないか、斯う云ふ御意見に歸するやうであります、或はあつたかも知れぬ、併ながら十數年乃至二十年もかゝつて出来ました法案でありますからして、既往に遡つて改正の方法が宜しきを得なかつたと云ふやうなことを言つても甲斐ないことであらうと思ふ、左すれば此改正案を審議調査するのは悪いと云ふ御意見があるかと云ふと、それは一つもないやうである、さうすればもう大概重要な點に付ての御質問も濟んだやうでありますからして、進んで案の内容に這入るとか、或は編纂の體裁を調べるとか云ふやうなことに進みましては如何でありますか、先刻河村委員からも御述べになりました如く、果して枝葉末節に留まるか、根本義に觸れて居るか、觸れて居らぬかと云ふことは、内容に入つて調査するに従つて確めることも出来やうと思ひますからして、申さば本員の意見であります、此中にも多少疑問も含んで居りますから申上げて見たい

○男爵池田長康君 議事のことに関しまして發言の御許しを得たいと思ひます、政府委員より御説明の通り本案は十數年を要して研究された成案であります、それを短日月の間に同じやうな審査を我々が遂げて完璧ならしむることは殆んど不能のことのやうに私は考へる、唯茲に考へなければならませぬ事柄は、世論も相當に出て居ることありますから、或は是は十分審査を遂げてさうして世論を更に聞いた上に出すべきか、或は左様なことを致して居るならば到底此案と云ふものは又成

案が出来ると云ふことが遅れると云ふ憂ひがそこにあるやうに考へる、殊に我々は此手續法に付ては素人であるのみならず、又是は實際問題に觸れて居る問題でありますから、今日茲で更に詳細に亘つて専門的論議をすると云ふことは容易ならざることのやうに私は考へる、付きましては大體質疑の大綱は論ぜられて居りますやうでもありますし、又政府委員より御話も承りましたやうな次第でありますから、更に此方面に付て造詣の深い御方を御選擇になりました、小委員を御設け下さいまして、さうして詳細な御研究に俟つて其報告を聞いて、さうして更に大綱に付きまして委員會を開かれまして討論せられまして、成るべくんば議事の進行を早めまして衆議院の方へも、速に回送いたしましたして、衆議院に於ても審議が出来るやうな方法を執つたら宜くはなからうかと思ふ、斯う云ふ風な私共私見を持つて居るのであります、さう云ふ茲で一つ動議と致しまして小委員を設けることの動議を私は出したいと思ひます、尙ほ小委員を設けますに付ては、其數と如何なる人がなされるかと云ふことに付ては委員長の御指名に委託すると、斯う云ふ動議を私は茲に提出したいと思ひます

○安立綱之君 唯今の池田男爵の意見と同様であります、で速かに小委員に十分なる御調査を願ひまして、其上に審議を又致すと云ふことに致しまする方が、此法案の進行上に付て却つて都合の宜いことではないかと思ひますので、其事に賛成いたします



○委員長(子爵伊東祐弘君) それでは皆様は御諮り致します、池田男爵より動議が出まして賛成が  
ありましたので御意見を伺ひたい、即ち小委員を組織して之を精査し其小委員の氏名及人数は委員  
長に御委せと云ふことでありますが、御異議ございませぬか

〔「異議」ナシと呼ぶ者あり〕

○委員長(子爵伊東祐弘君) 御異議ないものと認めます、それでは御諮り致しますが、御質問は一  
應是で打切つて置きまして、是より小委員に直ちに移すことに致しては如何ですか、御異議ござい  
ませぬか

〔「異議ナシ」と呼ぶ者あり〕

○委員長(子爵伊東祐弘君) では左様に取計らひます、それでは小委員は水上長次郎君、渡邊暢君  
河村讓三郎君、志水小一郎君、男爵渡邊修二君、佐竹三吾君の六名の御方に願ひます、それでは是  
で散會いたします

午後一時五十五分散會

### 貴族院特別委員小委員會議事

#### 委員氏名

委員長	河村讓三郎君
	水上長次郎君
	渡邊暢君
	志水小一郎君
男爵	渡邊修二君
	佐竹三吾君

大正十五年二月二十日(土曜日)午後二時五分開會

○佐竹三吾君 御諮り致しますが、小委員の委員長に河村博士を御願ひ致したら如何でありますか  
〔其他「賛成」と呼ぶ者あり〕

○佐竹三吾君 それでは河村博士に願ひます

○河村讓三郎君 甚だ僭越でありまするが、御請けを致します

○委員長(河村讓三郎君) 是より小委員會を開會いたします、會議の順序は初め一節づゝを議題と  
しまして、政府の説明を求め、それに對し御質問に御答を願ひまして……其程度で一應終りまで進  
行いたしたいと思ひます、一度御諮りを致します



「異議ナシ」と呼ぶ者あり」

一六〇

○委員長(河村謙三郎君) それでは第一編第一章第一節を問題に供しまして、政府の御説明を煩はしたいと思ひます

○志水小一郎君 ちよつと私は茲に一言申し上げますが、一節毎に議して行くと云ふ御趣旨は能く分りました。本員は先づ第一に編纂の體裁に付て伺ひたい氣持がするので、是は全部に付ては少しく大き過ぎますと思ひますが、假りに第一編は第一編に付ての編纂の體裁と云ふものが伺ひたいやうに思ひますが、之を問題として如何でありますか

○委員長(河村謙三郎君) 志水さんに申し上げますが、それで差支あるまいと思ひますから、それでは第一編の編纂に關する御質問がありますれば何か其順に御質問を……

○志水小一郎君 第一編の編纂の大體に付ての一つ御説明を伺ひまして、私は多少疑ひを有つて居ります

○政府委員(池田寅二郎君) 現行法と大體同様であります。變りました點は、第一編の編纂に付て編列の方法に付きまして變りました點は、現行法に依りますと訴訟費用に關することが第二章の「當事者」と云ふ標題の下に、第五節として規定せられて居る、それを此案に依りますと、「當事者」の章よりそれを引離しまして、第三章としまして「訴訟費用」と云ふ特別の章を置きましたのでござ

います。それから現行法に依りますと、裁判に關することは第二編「第一審ノ訴訟手續」即ち地方裁判所の訴訟手續の章に「判決」と云ふ標題で第二節として規定して居ります。其内容は必ずしも判決ばかりではありませぬで、其他の決定、命令の如き裁判のことも規定してあります。仍で裁判のことは一審の訴訟手續に地方裁判所の訴訟手續に限るものではありませぬから、之を引離しまして總則の方に持つて來りました。即ち案に依りますと、第四章第四節としまして、「裁判」と云ふ概括的の標題を掲げまして、即ち總則に之を規定したのでございませぬ、それが編列上の變更でございまして、即ち前に申しました通りに、大體は現行法の編列に則つて居ります次第であります。それから現行法の第一編第一章六節の「檢事ノ立會」、檢事の立會と云ふ事柄は此度は止めましたので、結局此節がなくなりましたやうな譯であります。其外多少の變更はありますもの、是は内容の變更に基きます事項に止つて居るのであります。それだけ御答へ致して置きます

○志水小一郎君 御説明に依りまして、あらかた了解を致しましたが、尙は伺つて置きたいのは、此刑事訴訟法の編纂の體裁との比較であります。是が性質が違ひ目的が違ふから、變るのが當然であると思はれれば、それだけのことであります。御承知の如く訴訟法 就中刑事訴訟法など編纂の體裁などは大分歴史があるがやうに思つて居ります。治罪法時代に訴訟裁判のことが解決致しました爲に、同じやうな條項に依つて第何編、第何章、第何節と云ふ規定を適用して居つたのは御承



知の通りであります、所が現行刑事訴訟法編纂の時に當りました、其編纂の體裁が全く一變いたしまして、各審に於て其通の事柄は成るべく總則中に之を掲げると云ふ風にまちなしたやうに心得て居ります、従つて刑事訴訟法に於ては、第一編を總則と致しまして、其内容に十六個の章を設けました、ずつと各審に共通の規定が掲げてある、あゝ云ふやうな風には民事訴訟法編纂はならぬものであらうかどうかと云ふのが私の第一の疑であります、で實際刑事訴訟法には、第一編を總則として、此民事訴訟法に掲げてあるやうなことの重なる事項は皆之を章としてずつと羅列してあるのであります、然るに本案では等しく第一編は總則としてあります、其内容に至つて裁判所と云ふ一章を設けて其内容の二個の節目、「管轄」裁判所職員ノ除斥、忌避及回避、此二個の節が設けてある、それから又第一編の第二章に於ては「當事者」と云ふ一個の章を置きまして此に四節ある、で、是も第一節の如きは必ずしも此當事者と云ふ章の下に置かぬでも分るやうな氣持が致します、それから「訴訟代理人及輔佐人」と云はむが如きことでも、刑事訴訟法では當事者と云ふ章の下に置いてあるのではなく、一個の章として書いてある、それから此案の第三章に「訴訟費用」と云ふ章が設けてありますが、其中の一節二節三節と云ふものは必しも節を節として規定せぬでも宜いやうにも思はれるのであります、それから此案の第四章の「訴訟手續」と云ふ中に、「期日及期間」が第二節になつて居り、第三節の「送達」、第四節には「裁判」で、是れ亦必しも訴訟手續と云ふ章を置いて其

下に羅列せんければならぬが如きもんでもないやうに思ふのであります、刑事訴訟法では「期間及期日」は、第八章に概括して設けてあつて、それから「送達」は刑訴は第七章、「裁判」は刑訴の第五章に置いてあります、それで此點に於て正しく趣きを異にして居りますが、刑訴の如きは規定せられない事情があるか、或は體裁から言つて見ても一つの理想に問うて見ても、此方が宜いとも言ふことでありませうか、それは別に意見も何にもないのですけれども、矢張り一つの疑を懐いて居る所であります、それからそれぢや現行の民事訴訟法はどうかと申すと、今申上げました如く、矢張り「裁判所」と云ふ一章があり、「當事者」と云ふ一章があり、「訴訟費」とか、「訴訟手續」と云ふやうな章があるかのやうに思ひます、此現行規定を採用したものであると仰せあれば、それだけであります、外に何か理由がありませうか、ちよつとそれを……

○政府委員(池田實二郎君) 刑事訴訟法の編別を比較なされての御疑でありまして、誠に御尤と思ひますが、實は民事訴訟法現行法の體裁を先づ踏襲したいと云ふことになつて居りまして、格別深い意味はないと思ひますが、唯、此章節等の編別は成るべく或る觀念で以て系統の立ち得るものでありまするならば系統を立て、置く方が諒解が便であるし、取扱にも便であると云ふやうなことが多少あるのではないかと云ふやうなことで、即ち先づ第一に裁判所を置き、裁判所のことと云へば裁判所の管轄構成に關すること、それから次に今度は訴訟當事者、當事者と云ふものの中に矢張り



能力に關すること、或は當事者が直ぐに在る場合或は外より其訴訟に参加して當事者となる場合、又當事者を代表し、當事者を援ける者、是は矢張り當事者と云ふ觀念の中に自ら包含せしむると云ふことが如何にも分り易いと云ふやうなことで、此三章四章共に相當此章の表題の下に置いて、更に斯う云ふ分類をする、其分類したのは、章に於て纏め得る、纏めれば如何にも觀念に於きましても組織上先づ幾らか整ふて參る、從つて了解をするにも便利であらうと云ふことがまゝあるのです、併ながら斯う云ふことは便宜上のことでありますから、必ずしも刑訴の例を逐ふて此章、此節を悉く章に改めると云ふことは甚しく不都合であると云ふことの御問でありますれば、左までのごことはあるまいと思ひますが、まゝ此位の意味合ひと思つて居ります。

○志水小一郎君 御説明に依りまして大要編纂の御趣旨は分りました、是より進むで御尋をする必要もありません。

○政府委員(池田寅二郎君) それでは第一章第一節の管轄のことに付て御説明致します、此節に於きましては凡そ一般の人に對しまして訴を起すべき場所は何處であるか、即ち普通裁判籍と稱するものは何處に是を決めるかと云ふことと、それから又特殊の訴へであれば所謂普通裁判籍でなくとも便宜上他の所でも訴へ得る、即ち特別裁判籍、此二つのことを定めまして、更に此次には裁判所のまゝ事物の管轄と稱して居るものであります、訴への種類或は訴額等に依りまして管轄が決

まることがありますが、それは大體此原則は構成法に規定せられて居るのであります、そこで本案に於きましては其訴額を算定する所の基準を決めましたのが一つ、それから次に管轄に付きまして當事者が合意をした場合に、それを如何なる程度に於て認むるか、即ち合意管轄の規定、是等は總て現行法にもあるのてあります、それに對しまして相當多少の修正を加へたのであります、それから最後に管轄は一應決つても其管轄に訴訟を起して參りました時に、必要に應じて他の管轄裁判所に移送すると云ふ場合、又管轄を間違へて管轄の無い裁判所に訴へを起しました時に之を却下せずして、他の管轄ある裁判所に移送すると云ふ規定、それを置いたのであります、其移送の點は現行法では極く限られた範圍であります、案に依りまして極く廣い範圍で認めただけであります、普通裁判籍のことに付きましては、是は殆ど先づ現行法の通りであります、唯、特別裁判籍のことに付きまして船舶航海に關して船舶所持者、或は船舶の賃借人、或は傭船者等に對しまして起し得る訴を、其船籍の所在地の裁判所に起すことが出來ると云ふことを決めたのが第十條になつて居ります、それから商法上の所謂船舶債權、其他船舶が擔保になつて居ります、さう云ふ債權の訴へは船の現に存する所、さう云ふ所の裁判所に起す方が便宜であると云ふので、そこを便宜上の管轄と定めましたのが第十一條であります、それから此會社或は其他の社團、斯う云ふものから社員に對す



る訴、或は社員相互間の訴、是に付きましては其會社若くは社團のありまする所の裁判所に訴ふることを得と云ふことは現行法にもあるのであります。更に其趣旨を擴張いたしました。さう云ふ社團若くは財團等より役員に對する訴、或は會社より其發起人に對する訴、さう云ふ訴は社團若くは財團の所在地に於て起すを便宜として、新しく認められたのが十二條の二項に相成るのであります。それから會社の債權者から其社員に對して、社員たる資格に於て社員であるが爲に責任を負ふと云ふ場合に、其社員に對する訴、斯う云ふものも矢張り同様に社團の所在地に於て起すことを便宜として、特別の裁判籍を認められたのが第十三條であります。十四條も矢張り大體同趣旨の訴への趣旨を敷衍したのであります。それから不法行爲關係の訴に付きましては、現行法にも規定があります。が、矢張り一つの例であります。船舶衝突の場合に於きまして特に規定を置く必要があります。ので、最初に到達したる場所の裁判所に訴を起すことを得と云ふことを追加いたしましたのが十五條の二項になるのであります。十六條は海難救助、是も矢張り同様な裁判所に提起することが出来る。と云ふことを決めましたのが十六條、それから不動産の訴に付きましては、是迄不動産所在地の裁判所の管轄に專屬することになつて居りましたのが、必しも專屬するの必要は無いと云ふ所から矢張り一つの特別裁判籍と云ふことに致したのであります。それから登記登録に關する訴、是は即ち此登記を爲す場所、即ち登記官廳の所在の場所に於て、訴を起す方が頗る便宜であらうと云ふの

で、十八條を以て新しく特別管轄を認められたのであります。それで大體現行法に依りまして存する特別裁判籍の外に、今申上げましたやうな特別裁判籍を認めまして、成るべく訴を起し得べき所の便宜の場所を殖やすと云ふことに致したのであります。それから次に此の事物の管轄に付て、目的物の價格に依つて事物の管轄を定めます場合に、其價格の算定如何と云ふことに付きまして、現行法は頗る周密な規定がありますが、頗る錯雜して居りますので、必しもさう細かく規定する必要は無いと認めましたのが第二十二條であります。二十三條に於て概括的の規程を設けました。適當の裁判所で調べると云ふことの餘地を存しました次第であります。それから次は三十條以下に管轄移轉に關する規定でありまして、是迄は管轄權の無い裁判所に訴を起しました場合は、訴を却下することになつて居りますが、それよりも寧ろ適當な管轄裁判所に移送して、そこで訴を受理する、裁判をする方が適當であらうと云ふことを、特に三十條の規定を設けたのであります。それから又此管轄裁判所で訴を受けて居ると云ふ場合にも先きに申上げました普通裁判籍並に特別裁判籍の關係上、一つの事柄に付て甲、乙と云ふ數箇の場所で訴を起し得ると云ふ關係が出来て參ります。其中で原告が選擇をする譯でありますけれども、其選擇を過つて、其處で裁判をするのは極めて不便である、或は訴訟調べ其他の爲に手数が掛る、従つて損害を生ずるやうな場合に於きましては、他の管轄裁判所、其方に廻してやると云ふ規定を設けました次第でございます。大體此



節に於て特に申上げべきことは、此位かと思ひます、更に又御尋に依りまして申上げます。

○水上長次郎君 唯今、政府委員より御述べになりました點に付て、二三御尋を致したい、第二十八條に職權證據調をすることが規定されて居るのであります、御承知の通り現行法では檢證又は鑑定を命ずることが出来ることになつて居るのであります、改正案ではさう云ふ區別をせずに職權を以て有らゆる證據調を爲すことが出来ることになつて居りますので、現行法よりは、或は餘程其範圍が廣くなつて居るのであります、私の御尋ねしたいことは裁判管轄に付て檢證とか或は臨檢とか云ふことの證據調をするのは、勿論必要でもあり又其ことを要する場合もありませうと思ひますが、其外の證據調を爲すと云ふことに付ての必要と云ふものは、實際多くあるまいと思ひふ、是は私の記憶から申上げることでありませうから、或は間違つて居るかも知れませぬ、今日まで實際取扱の上で管轄事件に付て概括的、廣い意味の證據調を爲すことが出来ないと思ふのを、何時でも感じたことは實際餘り覺えない、それでありますから先程御尋ねした一部改正とか、何とか云ふことに拘らず、兎に角餘り必要が無いやうに私は思ひますが、實際斯う云ふことに一般の證據調をする、證據調を爲し得るやうにする方が事實上、實際便利であるかどうかと云ふことを承りたい、先づ此改正法の二百六十一條ですが、二百六十一條で職權調査と云ふことを、廣い意味で規定されて居りますから、それと調和を保つ爲に、いつそのこと職權を以て證據調と云ふことにした

ら宜からうと云ふやな御考から爲されたものであるかとも思ひますが、まあ其點に付て第一に御伺ひします、それから其次に……其ことだけ……

○政府委員(池田實二郎君) 唯今御話になりました點は、現行法の六條と此改正案との對照上の御質問であつたと思ひますが、現行法では職權を以て進むのは檢證若くは鑑定と云ふことになつて居ります、併ながら之に限つて居る譯でない、申立があれば一部證據調が出来ると思ふことになつて居るのであります、それで此價格の審査と云ふことは、是は裁判所自らが一體調ぶべき事柄でありますから、若し此の檢證鑑定の以外に於ても尙ほ證據調の必要が此處にあると思ふ場合には當事者の申立を待つて發動すべきものであります、是は矢張り進んで證據調を、一般に亘つて爲すの權限を有するものと考へる方が、至當であらうと思ふ所から斯様に相成つたのでございますが、唯今仰せのやうに檢證鑑定以外の證據調をすると思ふことが實際上たんと必要がある見込みであるかと思ふ御話でありましたが、或はさうたんともないか知らぬと思ひます、現行法で申立を認めて居る所から見ますと證據調は必要のあるものである、さうすれば矢張り職權を以てやるのが、必要であらう、必要に応じて職權を以て調べると云ふことが宜からうと思ふ位の意味であります

○水上長次郎君 それから次に改正の十二條に一般的に……會社其他の社團より社員に對し、又會社の債權者より社員に對し、それから其次の條の、十四條でありましたか、矢張り前二條の規定云



々とございますが、是は現行法と似たか寄つたかのことでございます、多少違ひますけれども、現行法の儘で、現行法の儘でなくとも、現行法の趣意と多少違ひますが、併ながら現行法の儘で改正になつたやうな規定の趣旨に解釋することが出来るかのやうに私は思ひますが、其點に付てどうか御説明を願ひたい、ちよつと御断りして置きますが、私は現行法と比較して先程から御尋をして居りますが、それは私の了解する便宜の爲に申すので、決してどの場合でも、現行法を土臺とする考へでありませぬから、其積りで御答を願ひたい、それから、十五條でもさうで、不法行爲に關する訴に於ても矢張り同様である、尙ほ續いて御尋ねしますのは、此管轄裁判所の此一節に付ては、先程御質疑になりました十六條、それから十五條の第二項、それから十八條、十一條、それから十條、此四箇條に付てですが、此十八條の如き又十一條の如きは、是はもう現行法に何等の規定がありませんからして御尋ねすることはありませぬが、其外の條に付ては現行法に於て、又裁判例に於て差支の無いやうになつて居るやうに私は記憶いたして居りますが、此點に付ても一つ……

○政府委員(池田寛二郎君) 十二條の二項、十三條、十四條、十五條二項、十六條、是等の特別裁判籍は現行法の趣旨で解釋を以て補ふことが出来ないかと云ふ御尋と拜承いたしました、此解釋の當否如何に依りましたは手續上の効力に重大なる結果を生ずるものでありますから、此解釋を以て補ふと云ふことが無論全く出来ないと云ふ譯ではありませぬけれども、餘程、此裁判所の方でも

實は躊躇するやうな次第でございました、今御引きになりました條文、今申し上げました其箇條に付きまして、之を解釋上補ふことが出来るぢやないかと云ふことは或は御意見であらうとは思ひますけれども、此案の立案に際しまして考へました所に依りますと、ちよつと是は解釋で補ふことはむづかしいであらう、例へば不法行爲に關する訴は、不法行爲のありたる地の裁判所に之を提起すると云ふことは、是はまあ二十條の通りでありますけれども、さらばと云つて、海上で衝突いたしました、一體、其場所と云ふものは何處であるか、衝突の場所が不法行爲の地には間違ないが、其船が初に到達したる港の所在地の裁判所に訴を起すことが出来ぬと云ふと、不法行爲の所在地の裁判所が管轄権があると云ふ、此規定を解釋で以て左様に擴めると云ふことは是は餘程難澁ではないかと思ひます、其外、此會社に關することにしても、船舶債權のやうなものにしても、ちよつと此解釋を以て之を補ふことは餘程困難ぢやないかと思ひます、或は此中で物に依りましては全くいかぬことはない解釋上ことがあるかも知れませぬが、今申しましたやうに、成るべく明確に定めて置きませぬと、是は其後、其事件に付て爲すべき一切の訴訟手續の有力の基準になるものでありますから、餘程、裁判所でも管轄を解釋で補ふことは躊躇するのではなからうかと思ひます、旁々御話のことは明確に定めて置く方が宜からうと、斯様に致しました次第であります、

○志水小一郎君 是は尋常な御尋でありますけれども、法文の上から私は從來疑つて居るのですか



ら伺ひますが、此何々の裁判所に之を提起することを得と云ふ法文であります、是は一つの原則と云ふものをそこで定めて置いて、其原則に對する特別規定、許可的規定とでも讀むのでありますか、さうすると、十四條……十五條の如き、十六條の如きものは此裁判所にも起訴することを得、同時に普通裁判籍のある裁判所に訴へることを得と云ふ意味ではないかと心得て居りますが、此文字其ものが何か甚だ疑はしいやうに思ひますが、是はどんなものでありませうか、或は何か此母法となつて居ります外國の法文などは、其法文の語脈か何かからさう云ふ疑が起らないやうに讀めるのでありますか、詰り提起することを得と云ふ奴は、原則として其外にも斯う云ふ裁判所にも提起することを得と、斯う云ふ風にも聞えるやうに思ひますが、如何であるかと云ふことを極めて尋常な御尋でありますか……

○政府委員(池田寛二郎君) 御尤な御疑でございます、此特別裁判籍の所は皆「提起スルコトヲ得」と云ふことになつて居ります、そこで此大體の立前はさう云ふ特別の訴に付ての裁判の管轄の外に凡そ一般に人に對して訴を起すべき場所は何處であるかと云ふことを定めますのが、是が土臺の管轄になつて居るのであります、即ちそれを普通裁判籍と申して居るのであります、其普通裁判籍を第一條の方に掲げまして、即ち「訴ハ被告ノ普通裁判籍所在地ノ裁判所ノ管轄ニ屬ス」是が原則だ、併ながら是は訴は總て概括的に種類の如何を問はず先づ原則として普通裁判籍のある所に起す

べきものだと一條で原則を決めて居ります、そこで今度は特別裁判籍になりますと、併ながら訴の種類に依つては斯う云ふ種類のものがあれば此處で起立しても宜しい、即ち差支ない、斯う云ふ意味合で「得」と云ふことを決めるのであります、原則は第一條に「普通裁判籍所在地ノ裁判所ノ管轄ニ屬ス」即ち此處で訴を起すべきものだと云ふ原則を決めて居ります、それに對する除外例の場所は、特別裁判所に訴を起しても宜いと斯う云ふ意味合で使つた立前になつて居ります

○志水小一郎君 さう云ふ意味でございますれば法文に何等非難の餘地は無いと思ふのであります、が、例へば不法行爲に關する訴の如きものは、其行爲のありたる土地の其裁判所に提起することを、同時に第一條の原則に立戻つて其處にも訴をすることが出来る、それから、十六條の「海難救助ニ關スル訴ハ救助アリタル地又ハ救助セラレタル船舶カ最初ニ到達シル地ノ裁判所ニ之ヲ提起スルコトヲ得」此處にも提起することを得るのみならず同時に原則に立戻つて第一條の規定に依つても訴が出来る、斯う云ふ意味でありませうか、それならば此法文には非難の餘裕が無いのみならず適當な法文であります、さうでないやうな風に心得て居りました、若しそれが間違つてあれば誤解であります、唯、實際から言つても原則に立戻つて普通の裁判籍のある其裁判所に訴べると云ふことは、何んだか好むでさう云ふことをする者もないのでありませうが、變なやうに思ひます、又原則に對する許可的と法文に、私はさう云ふのがあるかと思ふのであります、原則に對する許可



と原則と云ふものを決めて、さうして其原則の働かない變則だけを働かせる場合でも、尙ほ何をすること得と云ふ法文が幾らもあつたかと思ふのですから、之を稱して原則に對する許可的、即ち特別規定のある場合には原則は働かぬと云ふ規定が幾つもあつたかと思ひますが、それではありませぬか、伺ひます

○政府委員(池田寛二郎君) 其原則を働かせない意味の除外例ではないのであります。此處にも亦訴を起すことが出來ると云ふ意味のことであり、左様御承知を……

○水上長次郎君 改正案には任意の管轄裁判所と云ふものが澤山出來たやうであります。總てを一つにすると云ふことはむづかしくはありませんが、大部分に於ては一箇條若しくは二箇條で……例へば財産權上の訴は「事務所又ハ營業所ヲ有スル者ニ對スル訴ハ其ノ事務所又ハ營業所ニ於ケル業務」の如き、斯う云ふ風に箇條を一つと一箇條若しくは二箇條に定めて、任意の裁判所を定めることが出來得ることだらうと思ふ、さうすれば、立法の技術上の善し悪しはどうか知りませぬが、併し大體其人の住所を以て管轄を定めると云ふのが大原則である、其取除け法として此數箇所任意の裁判所が出來たのであるそれを數箇所設けると云ふと、如何にも裁判官と云ふものは勝手次第なものである、自分の思ふ所は何處でも行けると云ふやうな感じもし、又之を研究する上に付ても亦參考する上に付ても、各條にすると云ふと非常に事務の取扱の中で面倒ではないだらうか、であるから

其文句若しくは事柄の許す範圍内に於て、此數箇條に亘るものを一箇條若しくは二箇條に取縮めた方が、取調べの上にも便利であり、又變則變令の規定としても亦立法の技術の上から云うても、さう云ふ風にした方が能くはないかと考へられますが、此點に付て御意見を……

○政府委員(池田寛二郎君) 特別裁判籍に關します規定を相當増加せられましたに付きまして、是等の事項に付てはもう少し規定を簡略にして、是等の記載事項と云ふものを纏める方が取扱上、其他に於て便宜ではないかと云ふ御尋の趣旨と拜聴いたしました、誠に左様であります、大體、此案も其御趣旨に基いて居るのでございまして、唯、成るべく此訴訟を便宜な地に、便宜と申しますのは事體其物から見まして訴訟の審判に便宜な地があれば、成るだけ其處に於て訴を起すと云ふやうにする方が、當事者並に裁判所とも利益であると云ふ所から、現行法に於て認めざりし處であつて便宜であらうと云ふ箇所箇所を考へまして、此新しい所に裁判籍を設けたやうな次第であります御覽の通りに事柄が皆違つて居りますので、之を餘りに纏め過ぎますと云ふと、又錯雜いたしましたのでありますが、大體、此位に先づ纏めて置く方が至極手頃だらうと云ふ具合に考へて規定せられて居る次第であります

○渡邊暢君 此七條に付て伺ひます「軍人軍屬又ハ船員ニ對スル」軍所用ノ廳舎ノ所在地又ハ艦船



ノ本籍若ハ船籍ノ所在地」とありますが、軍人軍屬と云ふならば非役の人でも軍人軍屬と云ふことがあるだらうと思ひますが、非役でありますとする、例へば第一聯隊に居つた人が此頃は北海道に行つて居ると云ふ時に、是だけで讀むと云ふと東京で訴へられるやうになりますけれども、そこはどうでせうか。

○政府委員(池田寅二郎君) 是は軍人用の應舎、艦船の本籍と云ふことを裁判籍の基準に取つて居るのでありますが、成程文字の方から見ますと、豫後備と云ふものに屬する者であつても、此處に訴を起させるやうな形に相成つて居りますけれども、矢張り此軍事用應舎の所在若くは艦船の本籍に所屬をして居ると云ふことが大體の立前でありまして、解釋上其趣旨に相成るであらうと云ふことに考へて居ります、之は或は豫備後備と云ふことに書きましても、矢張り少し足りない所がありまして、矢張り召集を受けて居ると云ふ者でありますれば、此處で訴を起しても差支ないと云ふことに相成るのであります、其意味で御了解を願ひたいのであります

○志水小一郎君 速記を止めて……

○委員長(河村謙三郎君) では……

〔速記中止〕

○渡邊暢君 尙ほ文字の上から申すと、さう云ふ風になつて行くかも知れませぬが、さうするも

よつと……今度は船籍の所在地として云ふ方の、船員に對する方に付て、どう云ふやうな説明をしたら宜しうございますか、船員の方では休養で此際田舎に行つて居ると云ふ時は、矢張り船籍の所在地へ訴へられるやうな風になりますか

○政府委員(池田寅二郎君) 此船員と申しますのは、詰り船の乗組員なり、船の「クル」と、まあ申す者だらうと思ひます、それ等の者は矢張り此船籍の所在地に關係を有することも相當にあることだらうと云ふ所からして、茲に特別裁判籍を認めました次第でございます、御承知の通りに、特別裁判籍のことですから、必しもそこに訴を起さなければならぬと云ふことではありませぬのは勿論のこと、他に或は裁判籍があると云ふやうなものに付ては、是は無論そこに行くことは是は申上げるまでもなく御承知の通りであります、唯今御引例になりましたやうな、一時其居を外に移して居ると云ふやうな者でありましたならば、或は其處ではなくして、此處が其特別裁判籍と云ふことになりはしないかと思ひます

○渡邊暢君 今度は十五條の所の第二項に「船舶ノ衝突ニ基ク」と云ふことがあります、次の十六條には「海難救助ニ關スル」と云ふことがあります、其十六條の方は申しませぬが、十五條の二項は「船舶ノ衝突ニ基ク損害賠償」と云ふだけに限つてありますが、若し船舶衝突と云ふことを特に選び出すならば、尙ほ他にも之に類したことが有るやうに思ふのでありますが、それは特に扱かれる御



考であつたのでありませうか、如何でありますか、それを伺ひたい、例へばどんなことかと云ふと、敷設水雷のもう取つて仕舞つてあるべきのが、取つてなかつた爲にそれに衝突する、或は飛行機から狙撃されるとか云ふやうなこともあり得ることと思ふのでありますが、それ等は無論其中には這入りますのでありませぬか、それに付てちよつと……

○政府委員(池田寛二郎君) 御尤の御尋でありまして、唯今仰せになりましたやうな事例は、蓋し無論あり得ることと思ひます、特にそれが爲に特別裁判籍を定めると云ふまでの必要があるか、之を實際に觀察しまして、それまでの必要が蓋し無いぢやあるまいかと云ふので、起ります場合が稀れであると云ふことの爲に、特に其爲に此特別裁判籍を設けると云ふ必要を認めなかつたと云ふことになるのであります

○渡邊暢君 もう一つ、二十一條に付て伺ひたいのでありますが、數個の請求を爲す場合で、「一ノ訴ヲ以テ數個ノ請求ヲ爲ス場合ニ於テハ第一條乃至前條ノ規定ニ依リ一ノ請求ニ付管轄權ヲ有スル裁判所ニ其ノ訴ヲ提起スルコトヲ得」と、斯うありますが、我々の心配する所は數個の請求であつても、どうかして原告の唯だ都合の好い爲にたつた一つ詰らないものがある爲に、其詰らない所へ被告を引寄せて裁判をしなければならぬと云ふやうなことが、是では起りはしまいかと云ふ懸念があるのでありますが、それに付ては如何でありますか

○政府委員(池田寛二郎君) 其點は誠に御尤の御質問であります、御話の通りに數個の請求をなしまする場合に、其一個に付て管轄權のある所に、他の請求に付ての審判もそこに合せて管轄せしむると云ふのが此規定の趣旨に相成つて居るのであります、其結果としましては、此規定を相當に運用すると云ふことが、蓋し必要のことであらうと考へます、唯今御引例になりましたやうな場合で本來そこにある所の管轄と、他より二十一條の規定に従ひまして其處に引寄せられた所の事柄、それを考慮を致しまして、其一つの訴の集まりました全體の事件にして、之を審判するのに果して其場所が非常に不適當であるか、どうかと云ふことになりまして、若しそれが甚しく不適當でありまするならば、即ち此三十一條に規定に依りまして、適當なる場所に之を移轉すると云ふことに依つて此弊の生ずることを防ぎたいと云ふのが、此案の立前になつて居ります、之に依て先づ適當に運用を致すことが出来るだらうと云ふことを期待して居ります次第であります

○水上長次郎君 先程來、此第一節、管轄に關する規定全體に付て政府委員より説明をなされ、又私共も其全體に付て質問を致したのであります、各條に亘りましては随分疑ひの點が多々あるものであります、此際にすつと引續いて逐條申としますか、各條と申しますか、其御尋をして宜うございますか、まだ併ながら皆さんの中で一節全體に付ての御質問があれば、それはもう引續いてなされるのが適當であります、若し皆さんの中に御質問が無いとすれば此儘すつと逐條若くは各條



に付て説明を承り、又御尋ねすることが出来ませうがそれを……

○委員長(河村謙三郎君) ちよつと私から申し上げます、此第一節全體に付て説明を承はつて、それに對して質問を願ふと云ふ積りであつたのですが、無論、各條に付て疑があれば御質問になつて宜いと思つて居ります、順序はまあそれは逐條でなくても前後しても宜しい、如何でせうか、先づ此第一節に對する御質問は一應是で終了したものと見まして次に移りますか、後に又必要があれば戻つても宜からうと思ひます、それでは第二節に移ります

○政府委員(池田寅二郎君) 第二節は除斥忌避及回避に關する規定を設けたものでありますが、是も大體現行法と同様でございます、現行法と異なりまする所は、現行法に於きましては除斥の原因のありまする場合と、忌避の原因がありまする場合とを併せて忌避の手續に依つて裁判をするに云ふことに相成つて居るやうであります、是は自から其性質を異にして居りますので、此本案では三十六條に依つて除斥の原因であれば、其除斥に付て裁判をする、それから假りに裁判の公正を妨げるやうな事情があれば、當事者が之を忌避することが出来る、忌避があれば其當否に付て裁判をする、其忌避と云ふことの、除斥と云ふものを全く區別を致します、それから次にはさう云ふ或は除斥に相當する場合、又或は除斥と云ふものには當らないけれども、色々の事情に依りまして裁判の公正を害するものとして忌避することの困難なるやうな事情があると云ふやうなことがあります

したならば、判事より、監督權ある判事の許可を得まして、其事件の裁判を回避すると云ふことを認めたのであります、是等が現行法に對する修正の分に相成つて居るのであります、而して此除斥の事由等に付きましては大體現行法と同様であります、幾分か其現行法を補充して居ることになつて居ります、三項の「同居ノ戸主若ハ家族」、五項の「輔佐人」と云ふやうな者は現行法では除斥の理由になつて居りませぬが、是等も當然除斥の理由に入れるべきものだと思ふ考からして新たに加へられました次第であります、其他は大體修正の理由は現行法の趣旨に則つて居ります次第であります

○水上長次郎君 先刻も御尋を致しまして、又御答も得ましたことに付て、此裁判事務が兎角殖え勝ちであると云ふことは、今日の有様では官民共に其憂ひを同じくして居るのであります、それで此憂ひを無くするやう、即ち遅延の原因を何處迄も徹底的に排除すると云ふ政府の御考へは極めて結構なことだらうと思ひます、そこで此忌避に付てありますが、此法律の上から見ますると云ふと現行法に於きまして、亦改正法に於きまして、裁判の公正を妨ぐべき場合とか、或は能く能く重大なる場合に限つて爲し得るものである、容易に之を爲すことの出来ない性質のものであり又規定から見てもさう云ふ風になつて居るのであります、所が事の實際を見ますると、訴訟代理人よりして容易に類々忌避をしたいと云ふことを申すのであります、譬へて申しますれば、自分の思



ふ通りの調べをして呉れない、或は又自分が提供した所の證據方法を容易に排斥したとか云ふ場合には、拘束的に直ちに判事に向つて忌避の申請を爲すのが實際事例が多いのであります、改正法に依りますと、忌避を爲し得る範圍と云ふものが餘程狭くなつて居るから、私が心配いたして居りますやうな、單に忌避を爲すと云ふやうな弊は除き得るかも知れませぬ、併ながら尙ほ是でも随分忌避を以て裁判を延ばすとか、或は又期日の變更を求めの意思だけに止めると云ふことは出来ることであらうと思ひます、そこで御尋ねしたいことは勿論此忌避の規定を爲さる上に於ては今申上げたやうな事柄を十分考慮の中に御加へになつたと云ふことは申迄もないことではありますが、何とか他の方法を設けて、もう一段嚴重に此點の制度を設けたら、どうであらうかと思ひます、併ながらまだ私は十分に研究をした上の御尋でありませぬから、或は政府に於かれまして、或は斯う云ふ條もある、あゝ云ふ條もあるから十分だと云ふやうな御答を得たならば、それ迄ですが、其點に付て一つ御聽きしたい

○政府委員(池田寅二郎君) 御質問の趣旨にも御述べになりました通りに、忌避の手續と云ふことは、是は誠に重大なる事柄に屬するのでありますから、輕々に之を爲すべきものでないと云ふことは勿論のことでありまして、又それを期待する次第であります、手續上のことに關しましては大體現行法に則つて居りますが、唯、三十八條の二項を設けまして説明を速かに爲さしむと云ふこと

の日限を切りましたのでございます、或は訴訟の遅延を來すと云ふことを慮つた結果、茲に入れたのでございますが、是等のことは訴訟期限を目的にして忌避申請を爲すと云ふやうなことが、是亦どうも行はれやうとは私一人として思ひませぬでございますが、若し假りにさう云ふことがある傾向があると致しまして、是等の規定は正しく之に對する一つの保障となるではあるまいかと云ふことを考へて居るのでございます、外に是れ以上、或は制限を致しますとかと云ふやうなことは如何なるものであらうか、此處にありますやうな場合に於ては、矢張り忌避の手續と云ふものを認めると云ふことにする方が適當であらうと云ふ風に考へて居ります

○水上長次郎君 忌避の申請を以て期日變更の望みを遂げる一手段に供すると云ふことは、是は政府當局に於ても御認めになることであらうと思ふ、さうして又忌避のことたる極めて重大なることである、規定の資格を有ち、規定の官職を持つて居る者に對して容易く偏頗の措置をする、不正なることをする理由を以て忌避すると云ふことは極めて重大なることである、忌避をされる判事の名譽、信用と云ふものは實に容易ならぬ毀損を受けるものだと思ふ、でありますからして、斯様な事柄を容易くなすと云ふことは出来ない筈であるに拘らず、之を容易く實際に爲して居ると云ふ者も敢て怪まず、受ける者も平氣で居ると云ふのでありますから、私は事の重大なるに鑑み又容易く之を容易になすと云ふやうな弊を矯める上から、或る一種なる目的を以て濫りに事實に反して忌



避を申立て、其忌避の申請を却下した場合には、忌避した者に對して相當の制裁を加へると云ふことは穩當である、且つ此弊を防ぐの上に於て必要な制度ではないかと云ふことを考へるのであります、併ながら又一面から見ますると、若し其申請にして正當であり、適正であるに拘らず、却下せられて直ぐに制裁を加へられると云ふことになる、如何にも何か裁判官が法理を曲庇して以て其人の名譽を穢すやうなことがあつては、是も甚だ面白くないかと云ふ考もないではありません、けれども忌避の一事に對して裁判官が決してさう云ふやうな疑を世の中から懐かれるやうなことは、現在に於ても、竝に既往に於ても將來に於てもあるまいと思ひます、若も此儘にして置いたならば、忌避をして、其忌避が決定になつた所が、是は大方、裁判官が同情を表する爲にやつたのである、其證據には間違つたことを申立て、別に裁判がないではないか、斯う云ふことになつて來たならば、裁判官の信用威信と云ふものは殆ど「ゼロ」である、況んや自分の要望を容れられむ爲に、又自分の望みをば強要せむが爲に、濫りに忌避を申立てる者に於ては千萬許すべからざることであると考へる、であるからして、故意に若くは大過失で忌避の申請をした者があつて、若し其ことが決定の際に判つた時には科料に處すとか……科料と云うてはどうか、他に制裁法があれば宜いけれども、差當り科料より他に途はあるまいと思ふからして、さう云ふ制裁を設けるの御意思は無いでありませうか、それを一つ伺ひたい

○政府委員(池田寅二郎君) 唯今の御質問の御趣旨は能く了解を致しました、私の見ます所では今仰せになりましたやうな弊が此處にあると云ふことを申上げる迄に私は考へて居らないのであります、併ながら萬一さう云ふことがありと致しましたならば、それは他の寧ろ方法に依るべきことぢやないかと思ふのであります、又さう云ふ事實も確かではありませぬが、あつたかのやうに記憶して居るのでございます、それは他の方法を以て、救済する斯う云ふ考で居ります、それから尙ほ一つ御参考の爲に申上げて置きたい、現行法に依りますと、如何にも之に關する規定が、例へば偏頗の虞れある時は之を爲すと云ふことになつて居りますが、偏頗な處置を執ると云ふことは、茲に如何にも判事が態々さう云ふ處置をするやうな風なことに、穩かならぬ文字に出て居ります、無論私はさう云ふことがあらうとも毛頭想像いたさないのでございます、併ながら此人の身邊に出來て參ります所の事情と云ふものは、其人の責に必しも歸することの出來ない事情、それ等のことが必しも是は除斥と云ふまで行くべき法律は無いけれども、併ながら茲にさう云ふ事情がある以上は、矢張り其人が自ら回避すると云ふことが宜いと思ふやうな場合が出來て來るのであるまいか、そこで此説はさう云ふ偏頗な文字を避けまして、三十七條では「裁判ノ公正ヲ妨クヘキ事情アル」と云ふことに致したのであります、除斥も即ち裁判の公正を妨げる事情でありますけれども、是はもう顯著なるもので、或は判事其人に依つて、是等の事情があつても無論立派に裁判を爲すのでありませ



うけれども、外間から見まして、如何にも裁判の信用を維持する上に於ては構成に加はらしめざる方が宜いと云ふことの明瞭なる者に付ては、特に法律で除斥と云ふことにしたのであります、それ迄のことではなくとも、判事の身邊に公正を妨ぐべき事實ありと云ふ場合には、矢張り是は、本人も無論回避も致しませうが、總ての場合に於て矢張り忌避すると云ふことに致した方が良くはないか、判事自身が自ら偏頗なことをするやうなことを茲に想像すると云ふことは、如何にも私はさう云ふ想像は出来ないであります、又現行法より見ますると、三十三條の二項に「偏頗ノ忌避ハ判事ノ不公平ナル裁判ヲ爲スコトヲ疑フニ足ル可キ事情アルトキ之ヲ爲スコトヲ得」とあります、幾分か緩和されて居りますけれども、矢張り是でもどうも面白くない、だから矢張りさう云ふ事情があれば構成に加はらぬ方がよくはないかと云ふ方から出て来て居りますので、餘程現行法と其處には異なる點もあります、けれども、立前が違つて居ります、其點を御参考までに申上げて置きます

○渡邊暢君　ちよつと伺ひます、三十五條の第三號であります、當事者の後見人と云ふことは茲に豫見してありますけれども、同じやうな位置に在る保佐人をお抜きになりましたのは何か意味がありますか

○政府委員(池田寅二郎君)　ちよつと御待ち下さい……唯今の御質問の趣旨は三十五條の三號の後

見人とあるが、之に保佐人と云ふものを加へざりしはどう云ふ譯かと云ふことであります、成程保佐人と云ふものは加つて居りませぬが、是に付ては相當總會で議論を致しましたが、詰り此本人に對する關係と云ふものが、後見人と云ふものになりますと、大分性質が違つて參りますので、そこまで此法律上の當然の除斥と云ふことに必しも加へるの必要はないではないかと云ふことから、此處には這入らなかつたことに相成つて居ります

○志水小一郎君　是は極めて尋常のお尋のやうであります、此除斥忌避の所に於て親族の巾を狭くせられたことでもあります、是は刑事訴訟法の民法の親族の定義に従つては、斯う云ふ風になることはあるのであります、私が伺ひたいのは、是はどう云ふ根據があるのでありますか、獨逸の例も斯うであると云ふ位のことでもありますか、随分重要な問題であります、六親等内の血族、三親等内の姻族と云ふ民法の親族の定義を、特に斯う云ふ巾を狭くせられた立法の理由を伺つて置きたいのであります、是は刑事訴訟法もさうではないかと仰しやれば議論にならぬのであります、是は是として理由がなくてはならぬと思ふのであります

○政府委員(池田寅二郎君)　三十五條の二號に於きまして親族の範圍を民法の親族と同様に致しませぬで、それに制限を付けました譯は、詰り此判事と公正を妨げるに足るべき是が顯著なる事情と云ふことが、此三十五條の先づ立案の趣旨になつて居るのであります、其考から致しまして民法